

---

# まやかしの太陽

tkkosa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まやかしの太陽

### 【Nコード】

N8869H

### 【作者名】

tkkosa

### 【あらすじ】

幼い頃に受けた深い傷への復讐に燃える男。彼を愛し、その復讐に手を染める事を決めた女。誤った道に進むことでしか生きる術のなかった男女の恋物語。

## 第0話

殺してください。

俺を殺してください。

殺してください。

私を殺してください。

愛をください。

俺に愛をください。

許してください。

私を許してください。

見ないでください。

そんな瞳で見ないでください。

泣いてください。

哀れだと泣いてください。

近寄らないでください。

側に来ないでください。

勝手に馴れ馴れしくしないでください。

読まないでください。

心の中に立ち入らないでください。

急がないでください。

隣になんか立たないでください。

無くしてください。

私たちの記憶をぶっ壊してください。

そして、二度と思い出さないでください。

## 第1話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

## 第1話

夜21時15分、事態は平生からの急落。

3階のナースステーションに点滅する赤い信号は死者への血の号令。そこへ轟く警報音

は復讐の鐘を意味していた。

「402号室の佐藤さん、容態急変です！」看護婦の緊迫さが言葉の重さを示してた。

受話器の相手側からの差し迫りが彼女に移ってしまったのだろう。

その場にいた2人の看護婦は飛ぶように現場に向かっていく。少し後に2人の医師がナースステーションの前を駆けていった。その様子を瞳に留めていた

四宮菜奈は数時間前に

その中の誰かが患者に言っていた「病院内は走らないでください」

という言葉がふいに浮

かぶ。矛盾。

デスクに置いてあったデスクトップパソコンに手を伸ばす。そこに病院の患者のデータ

の保存場所へのアクセス方法があるのは知っている。こんな簡単に個人情報が入るんだから市立病院のセキュリティなんておろそかなものだ。ダブルク

リック。402号室、

佐藤太吉、73歳、病名・肺がん。ここで検査した時には既に転移されており、先の組織

変化を止めるのは難しかった。本人には柔に告知したが、年齢もあつてか己の幕引きを

素直に受け止めたらしい。

あとは果てゆく身に最期を重ねるだけの時間。やがて人生終了。  
可哀相に。

3日前、看護婦2人が佐藤太吉の会話をしてるのが耳に入ってきた。「402号室の佐藤さん、今日もずつと独りで窓の外を眺めてたわよ」「誰かお見舞いにでも来てあげればいいのにねえ」5年前に妻に先立たれ、一人息子も単身赴任していて滅多にここに来ることはない。毎日身寄りも寄ってこない病室でつまらない時間に流れゆきながらただ最期に近づいていた。

せめてファイナーぐらい華々しくさせてやろう。決定。

20分後、看護婦が1人戻ってきた。20代後半で顔のパーツが全体的に外側に偏っているのが何ともおかしい。心の中では彼女を「福笑い」と読んでいる。そんなことは口が裂けても本人には伝えない、もちろん。

「どうだった」それとない感じで聞いた。福笑いは一息をついて顔を横に振った。パーツが余計に外に寄るんじゃないかと思った。いずれ顔からはみ出すんじゃないか、と。

「まだ、いろいろ掛かりそうだから帰った方がいいよ」福笑いは滅入りながら言った。いくつか用具を手にして、再び病室に向かっていく。後ろ姿を見送ると、菜奈は不敵な笑みをこぼした。

広げていた教材とノートをリュックにしまうと、人影もない物静かな建物を抜けて帰路につく。夜間用の出入り口から出ようとすると、守衛室の40代前半のエロ目の警備員が

いた。「あれ、今日は早めのご帰宅だね」

「なんか、今大变みたいだよ上」

「えっ、何かあったのかい」

「分かんない、容態急変だったさ」

「へえ、そいつは今夜は賑やかになりそうだねえ」

じゃあね、と帰ろうとするとエロ目に呼び止められる。またか、と溜め息を殺す。

「菜奈ちゃん、今日の下着の色は」鼻の下を伸ばしながらエロ目が聞いてきた。そのま

んま地面まで伸ばしてろ、と頭をよぎる。

「やだなあ、それ止めてよ」適当にあしらっておく。

「そんなこと言わず、たまには教えてよ」

「ご想像におまかせします」

「ええ、そんなこと言う想像しちゃうよお」

「ダゝメっ」

アハハと笑いながら、エロ目と別れた。病院の敷地内を出ると、持っていたリュックを

地面に思いきり投げつけた。

マジ最悪。親子そろって死ぬ。

近場にあった公衆電話からダイヤルを押すと、低い声がした。その声が怒気に満ちた心をさっすりと撫でてくれた。「ターゲット死亡」

翌朝の朝刊にはまだ佐藤太吉の一件が並んではいなかった。病院側も対応に追われていたのだろう。しかし、テレビニュースの画面には見慣れた建物が映し出されていた。音量

をあげたのは母の菜子だった。「昨夜、安里市立病院で点滴に重度の薬品が数種類何者か

によって故意に注入され、入院していた佐藤太吉さんが亡くなりま



した。当時、病院内に

は関係者しかおらず、警察では詳しい原因を調べています」

「大丈夫かな、パパ」菜子が現実から逃避するように画面の行方に憑かれていたので、

菜奈が呼び起こす。

「ああ、そうね、心配ね」毎朝の生き生きとした母親の顔はなかった。夫に降りかかった

た不可思議な事件を思えば当然だろう。

佐藤太吉は昨晚、死んだ。点滴に混入された薬品が体内に入り、彼の弱っていた体には

それに耐えるだけの力はなかった。警察は他殺を中心に捜査を開始。病院関係者による線

が考えやすいが、侵入者によるものとも考えられる。本人による自殺目的というのもある

だろうが、可能性は低い。

その時、家用の電話が鳴り出した。菜子が出ると、二言三言を交わして受話器を菜奈に

差し出した。会話から相手が父親の貞男であることは分かった。「もしもし」

「ああ、もしもし」疲れきった声がした。あんなことが起こったのだから寝ていないの

だろう。「昨日のこと、もう知ってるんだろう」オブライイトに包んでるが、何を言いたい

のか一目瞭然だ。

「うん、あんとき病院いたし」

「そのことを聞いてな。今日、病院に来られるか」

「いいけど。どうして」

「警察にそのときのことを話してくれ。事情聴取ってほどじゃない。ただどこにいて何

をしてたかを言えればいい。面倒くさいかもしれないが、後々になっ

てから病院にいたこと

が伝わって怪しまれるようになったら困るしな。まあそんなことはないだろうが、

一応だ。父さんたちも散々いろいろ聞かれて参ったよ」

「そんなに聞かれるの」

「いや、大したほどじゃないがな。向こうも容疑者の確率を秘めている人間として取り

調べてるわけだから、軽い犯人扱いのように聞いてくる。精神的に参った」

「それ、なんか怖いなあ」

「大丈夫だ。お前はまだ中学生だし、そんな手荒くはしないはずだ」

分かった、と電話を切った。内容を伝えると母は不安そうな顔をしたが、そんな大層なもんじゃないからと宥めた。時間の経過に気づき、かきこむように朝食を体に入れて家を出た。

安里市立第一中学校、この校門を通るのも慣れてきた。春に入学した時はこの門がずいぶん強固な構えに見えたものだ。中学生、その響きは心持ちを快活にさせてくれた。早く大人になりたい、小さい頃からそう願ってきた菜奈にはそのステッブは嬉しいものだった。

校則の自由が制限されるのは嫌だった。自分を深く知りもしない人間に分かったように縛られるのは癪に障る。制服は好きだ。白のセーラー服は定番だけれど、前から憧れてはいた。恋人にも見せに行った。似合ってるよ、と言われて思わずはにかんだ。クラスメイ

トは好きじゃない。毎日同じ顔ぶれを眺めるのは退屈だ。情性を打破できない、しようと

も思わない奴らと一つの土俵に乗ってるのは屈辱に思える。仕方がないから妥協で一緒に

いてやる。教師はもつと好きじゃない。嫌いじゃないが好きにはならない。生徒を上辺で

しか捉えられない薄っぺらい奴らにあれこれ指導されるなんて耐えられない。奴らは奴ら

なりに頑張ってるんだろうけど無理だ。本当に生徒の事を把握してるのなら、私に近づい

てくる教師は一人たりともいないはずだ。怖じ気づいて逃げ出すだろう。合掌して命乞い

するだろう。

「菜奈っ、おっはあ」教室に入ると、林田千鶴が両手を広げて出迎える。

「千鶴、会いたかったよあ」菜奈も両手を広げ、2人でがっしり抱き合う。毎朝の挨拶

代わり。いささか疑問はあれど、システムとして己に組み込んでおけば訳はない。女子に

特有のスキンシップの多さは構造としてこの体に組織されている。依頼があれば任務を遂

行する。そう認識しておく、こんなこと真面目に繰り返してたらいつか反吐が出る。

千鶴は親友だ。小学校の3年生のときからの友達だ。彼女はお人好しで人を信じすぎる。

きつと、悪どい女連中の輪に入るになれば使いつぱしり役になる。キャッチセールス

や訪問販売で言葉巧みに無駄金をはたくのは彼女のような女なんだろう。そうなる前に私

が拾ってあげた。「ねえ千鶴ちゃん、一緒に遊ぼう」と声を掛けた

ら、満面の笑顔をみせ

て「うん、遊ぼう」と答えた。単純な奴。それから私たちは親友といえる関係になった。

「今日のニュース見たよ。菜奈のお父さんの働いてる病院じゃん。大丈夫なの、あれ」

心配そうに千鶴が言った。本気で気にかけてくれている。彼女に嘘はない、嘘をつけない

タイプだ。こっちにも猜疑心の必要がない。他の同級生なら先ず好奇心で聞いてくるのに。

その証拠に、さっきからクラスメイトにちらちら見られている。自分のことで彼ら彼女ら

が有る無い話を咲かせている。無性に腹はたつけど、あんな低脳たちのために何をするこ

とはしない。

「無問題。どうせ、外部の人間でしょ。私よく病院行ってるから、そんなことする人がいないのくらい分かるよ」

本当はあんなこと出来る肝のある人間がいなかった。人を治せても人を殺せやしない。

「ここだけの話なんだけどさ」と小声で言うと、千鶴は聞き耳を立ててくる。

「あの事件があつた時間、私病院にいたんだ」

「えっ、どういうこと」

「昨日、部活の後で病院に行ったの。ナースステーションで勉強させてもらってたら、

急に騒がしくなっちゃって。そこで、あのおじいちゃんが亡くなったの。もち、そんなとき

は薬品が混入されてたとか殺されたとかは知らなかったけど」

「じゃ、じゃっ、じゃあ、菜奈はあ」頭の中が混乱して千鶴はうまく言葉をまとめられ

なかった。

「そう、その犯人と同じ建物にいて、殺された瞬間もそうだったってこと」

「うわぁ、なんか異様な感じだね」彼女には刺激の強い話だった。ホラー系が苦手なの

も知っている。遊園地に行くと絶叫系でぎゃあぎゃあ喚くから気分が失せる。周りの視線

のせいで自分が悪いような錯覚に陥りそうにもなる。

「他の人に言わないでね。こんな話、千鶴だからしてるんだからね」

「うん、絶対言わないよ」千鶴はグツと口を噤んだ。彼女は秘密事が好きだ。そういう

ことへの好奇ではなく、自分だけにしてくれる約束事という意味合いで。だから、こんな

契約はよく交わす。正直、そこまで内緒でない事でもする。それによつて、彼女は私への

信頼を増し、私からの信頼が増しているのだと勝手に思い込む。

「あら、菜奈ちゃん。こんにちは」学校が終わり、病院へ行くと副院長室から出て来る  
婦長の下越と鉢合わせになった。「聞いたわよ。あなたまで大変ねえ」

「いえ、そんな大したことないですから」菜奈は自然と口角を上げていた。下越には好感を抱いている。いい人間だと思う。周りに対しての気配りや心遣いが出来ていて、たまに厳しい意見も言う。それも愛情のうちだ。この人は愛を知っている、私が失いかけてるものを。

「昨日、あの事件のときに赤妻さんが帰しちゃったんですってね。」

大丈夫だった？」赤妻は福笑いの名字だ。

「全然。第一あのときはまだ事件って分かってなかったんだから仕方ないし」

「でもねえ。もしかしたら、犯人が近辺にいたかもしれないのに」  
「無問題、無問題。この通り」そう言い、菜奈はくると一回転してみせた。

「ホント、菜奈ちゃんは元気ねえ」互いに笑みを含ませ、その場は別れた。

副院長室に入ると、父親は奥のデスクで作業をしていた。菜奈の姿を確認すると、貞男は医者から父の顔になった。「まあ、かけなさい」と言われて座ったソファは家にあるの

より高価なものと思えた。病院には数えきれないほど来ているが、こうして父親の仕事場

に入ることは滅多にない。大概是図書室や医局室やナースステーションにいる。そのせいか、わずかに緊張感も憶える。

「まもなく来ると思う。ちょっと待つてなさい」貞男が刑事に連絡を入れた。事件発生

当時は何人といった警察も今は3人ほどが残ってるだけらしい。

「ねえ、刑事って怖そうかな」

「まあ、仏頂面が多かったな。なあに、お前は言われたことに素直に答えればいい」

「そうかあ」不安げな顔になった。正確に言えば、不安げな顔を繕った。

刑事は3分ほどで来た。2人は菜奈の対面のソファに座ると、確認するように彼女の顔をちらりと見た。刑事の1人は50代前半、髪は白が黒を汚染していて、皺々にたるんだ

肌は年齢による人の衰えを如実に示している。こんなオンボロが道を歩いていたら、体を執拗に避ける。いずれ、己にこの結末が待ち構えてるのかと思うと絶望に溺れてしまう。

もう1人は20代後半、髪は適度に整えられてあり、まだ活気というものがある。名前は老いた方が唐木田千治、若い方が牛嶋大悟と名乗った。

「今日はわざわざ来てもらって悪かったねえ。一応、こちらも手掛かりになりそうなところは訊ねておかないといけないもんで。いくつか聞くけれど、身構えんと答えてくれればいいから」イントネーションから唐木田が地方出身者であることは読み取れた。それも微妙に標準語と混ざってるところがややこしく感じた。いつ地方から来たのかは知らないが、自分の出身地に誇りを持つてるのだろう。言葉を変える必要なんかない、と思いつつ染められてもいた。「最初に昨日のことをあなたなりに説明してくれませんか」

「昨日は部活が終わってから来て、ナースステーションで勉強してました。21時過ぎにナースコールが入って、容態急変って看護婦さんもお医者さんも病室に走っていった。

しばらくしたら、その人が亡くなったって聞いて。それで、その日は帰ることにしました」

用意しておいた言葉が流れた。少し思い起こすフリもした。

「どうして、ナースステーションで勉強なんかしてたのかね」唐木田の口調が取り調べのモードへ切り替わる。女子供にも容赦はないのかと構えたが、スイッチは自然と入って

しまうものなのだろうと感じた。長年の職業病というやつだろう。

「よく勉強させてもらってるんです。ここには小さい頃から遊びに来ていたから、みんなとも仲良くて。ホントはいけないんだろうけど、なんか私には居心地がいいんです」嘘

はない。本当にここには幼稚園の頃から遊びに通っていた。同年代の子が友達の家に行く

ぐらいの感覚といえるだろう。病院のスタッフたちも小さい菜奈をとても可愛がっていた。

その頃からの慣れもあり、今でも親しい関係が続いている。菜奈が病院のどこにしようと

誰も疑いの目で見ることなどない。

「ここには頻繁に出入りしているということだね」牛嶋が言った。

「はい、暇があれば来ています」

「事件のあった時間はナースステーションにいた、と」話を本筋に戻すように唐木田が言った。

「はい」

「そこには看護婦が2人いたということやけど」取り調べでメモをした情報を見ながら

確認を求める。

「いました」

「それで、事件が起こったんで家に帰った」

「そのときは事件があつたなんて知りませんでした。そんなの分かってたら一人で帰る

なんてしてません、犯人がいるかもしれないのに」俯いて、怖がった表情を見せる。自分

はこの事件に関与していない単なる女子中学生というポジションを前提にしていなければならぬ。



「そうだね、怖かったよね」菜奈の偽造した心情を察知した牛嶋がそれに配慮する言葉  
をかけた。彼女の演技に何一つ疑いを抱いていない。元々、彼女が犯人であるとはミクロすら思っていなかった。

「ごめんな、最後にもう一個だけ答えてくれませんか」唐木田も申し訳なさそうに質問をした。「今回の事件に何か心当たりはないですか。怪しい人物を見かけたとか亡くなつた佐藤さんに変わった行動があつたとか」

「いえ、全く」佐藤太吉との関わりはない。形跡も匂いすら残さなければ完璧に拭える。

四宮菜奈と佐藤太吉はただの他人だ。

そうですか、と力なく唐木田は息をつく。思つたほどの成果があがつていないのだろう。

こんな小娘が重要証言を持つてるとは思つてないにしても、万が一という淡い期待はあつた。あるだけ無用だった。「わざわざお呼び立てしてすまなかつたね。これで終わりますんで」菜奈へ言つた後、奥にいる貞男にも頭をさげて刑事は部屋を出て行つた。

してやつたり。警察なんてちよろいもんだ。

刑事の背中を眺めながら、自然と口角が上がっていた。

夜、礼服を着た唐木田と牛嶋はガード下にある冴えない立ち飲み屋で酌を交わす。佐藤太吉の通夜に参列した帰りだった。季節は暖かさへと向かっているはずなのに、この日は寒い夜だった。

「唐木田さん、掴めない事件つすねえ」牛嶋は寒そうにしながら

強めの酒で体を温めて

いく。「囲みは見てんのに中身は見えない、みたいな」

そうやなあ、と唐木田が言いこぼす。確かに牛嶋の言うとおりだった。佐藤太吉の殺害

の一連の経緯はあつさりと分かるものだ。しかし、誰がやったのか、どうやったのか、がさっぱりだった。

「病院関係者の線がやっぱり濃厚なんですかね」

「まあ、それが一番考えやすいってことや」病院の人間なら薬品を入手することは可能だし、あの時間に院内にいても怪しまれることはない。外部の人間がやるよりも明らかに犯行はスムーズにいく。「でもなあ」

はい、と牛嶋は息をつく。そう決め込むにはいささか不具合が生じる部分があることが否めなかった。病院の人間の犯行にしては時間が早くないか、ということだ。第一発見者

の看護婦の証言では被害者の異変が確認されたのは21時15分。安里市立病院の就寝時

間は21時。そこから15分しか経ってない。やるのなら、もっと深い時間にすればいいはずだ。そっちの方が确实だし、なにも可能性の低い選択をする必要なんてない。「どういうことなんですかね、一体」

考えられるとしたら、と前置きをする。「容疑者を多くしたいということやね。夜中にやるとしたら、真つ先に疑われるのは夜勤の人間。しかし、あの時間にやっておけばまだ病院には医者も看護婦もそれなりの数がいる。自分が疑われるパーセンテージを減らそう

つていう魂胆やろ」

なるほど、と牛嶋は納得する。「そうすると、やはり病院関係者ということになります

ねえ」

そうやなあ、と唐木田は息をつく。「どっちにしろ、そこに行きついてしまう」

安里市立病院には1階に5つの出入り口がある。そのうちの3つは患者や外来用のためのもので、面会時間の終わる20時過ぎに閉められる。もう1つは緊急の外来や夜間用の職員の出入り口だ。ここには守衛室があり、事件当時は警備員がいた。誰も不審な人物は通つてない、と証言もしている。残りの1つは非常口、ここも夜間は施錠が義務づけられている。つまり、事件のあった時間に開いていた扉は夜間用の出入り口のみとなる。

病院関係者を軸に考えるのが普通だ。入院患者にも出来るだろうが、点滴に含まれていた数種類の薬品を調べたところ安里市立病院では扱っていないものもあった。はっきりいって、素人が入手できるレベルのものではない。相当に薬品関係に精通した知識の持ち主であるかそういった類の知り合いがいるか、どちらかだ。

「おかえりなさい、疲れたでしょう」2日ぶりに帰宅した夫を菜子が出迎える。

「ああ、さすがに堪えたな」22時過ぎに家に帰った四宮貞男は引き込まれるようにしてリビングのソファに座り込む。一昨日は夜勤から一日中働き、昨日の夜に帰れると思っ

たときの事件だった。副委員長の自分が帰ることなど当然出来ず、佐藤太吉の対応と警察

の対応に追われ、結局そのまま今日の日勤にも出るようになってしまった。長時間勤務に

は慣れてるといつても、今回のそれはまた違うものだった。職業上、人の死の際には

幾度となく立ち会ってきたが殺人事件はいくらなんでも初めてだ。

溜め息とともに目を閉

じてみると、佐藤太吉の死に顔が浮かんでくる。容態急変の知らせを受け、402号室に

向かったが遅かった。患者はすでに息を引き取っており、そこに異変を感じたのもすぐの

ことだった。肺がんの人間がどうなろうとあんな不可思議な死に方はしない。何かが起こ

ったのだ。そして、それが殺しであることを刑事から告げられた。

佐藤太吉は殺された。

あれが人に殺された人間の顔なのだ。

「パパ？」

耐えきれなくなり、両目を一気に開くと葉奈が心配そうにこちらを見ていた。彼女はも

う一方のソファでテレビを見ているところだった。いけないいけない、とまだ多少どこか

にある佐藤太吉の残像を己の中で振り払う。「ちょっと疲れてるだけだよ」

「明日とか休んだら」

「そういうわけにはいかない。他の人たちだって昨日は夜通しで病院にいたんだから、

俺だけ休むってのはダメだよ」副委員長という立場上、余計にそれはいけない。プライド

というか上に立つ者は率先して動かなければならない。模範になる

べきポストが失念など

こうむりたくはない。こう言っではなんだがイメージダウンというものだ。人気投票で成

り立つものではないが信頼関係は大事だと思う。「ありがとうな、菜奈」

「ううん、今日はゆつくり身体休めたほうがいいよ」

「ああ、そうするよ」菜奈の笑顔は温かった。親バカと言われるかもしれないが、我

が子は天使のようだ。子持ちの同僚に話を聞くと、菜奈がどれだけ真つすぐに育ってくれ

てるのかが分かる。やれ幼稚園児は物をばらばらに散らかして片付けない、やれ小学生は

毎日洋服を泥んこにして帰ってくる、やれ中学生はピアスの穴を開けて不良に目覚める、

やれ高校生は飲酒や喫煙が当たり前のようになる。正直、聞いているだけで耳が痛くなる。

それに比べ、菜奈はこれでいいのかと疑いたくなるほど誠実な子だった。同僚に菜奈の話

をするといつも羨ましがられる。ウチにも菜奈ちゃんが欲しい、と彼女も病院に來るとよ

く言われるらしい。愛する妻に自慢の娘、こんなに恵まれていていいのだろうか。自分に

そんな資格があるのだろうか、たまにそう思ってしまう。

陽射しの強さが直接肌に触れ、瞳を細めて見上げた太陽は十二分に存在感を放っていた。

この前までは梅雨で雲の群れに隠れつきりだったのに急にこうやって自己主張してきたり

気まぐれなもんだ。そう思うと、その姿を自分自身に重ねてみた。

結果は失敗。私は太陽

にはなれない、私はあんなに明るい光を放つことは出来ない。前に「菜奈ちゃんは大太陽み

たいな子だねえ」と言われたことがある。四宮菜奈の上辺だけに接してる人間はそうやって

捉える。まやかしの偽造物を本物とたしなめられて受け取っている。偽物を表に出し、

本物を裏にしまい込む。そうやって生きてきた。まやかしの太陽、それは自分自身とよく

重なった。

「おい、何してるんですかぁ」クラスメイトの蔵川がのんき気ままに声をかけてきた。

長細い目は太陽を見上げていた菜奈の目とちょうど同じ大きさだ。

「良い天気だよなあ、

ブル日和ってやつだぜ」

何言ってるんだ、こいつ。こちら、そんな低能な考え事なんかしてないんだよ。

「何か用？」こんな奴に構ってたら、こっちにまでバカがうつる。話す時間があっても

話したくはない。願い下げだ。適当に鼻であしらっておくのがいい。

「そんな冷たく言うなよあ、5年来の付き合いだろあ」中学1年生のまだ出来上がって

ない細い体をくねくねさせながらぴったり菜奈の近くに着いてくる。気持ち悪い。蔵川は

小学校の3年生の時から同級生だ。それから5年生の時のクラス替えも中学でのクラス

でも同じになった。林田千鶴はいいが、こいつはいらない。馴れ馴れしく触られるだけで

腫れ物になりそうな嫌悪感がともなう。それを表面上に出すことはしない。変に目立つこ

とはしたくない。

「こらっ、蔵川、菜奈に触ったでしょ」後ろから千鶴が加勢に入ってきた。

「はあっ、手が当たっただけだろうがよ」嘘をつけ。意図的に触れてきたのは承知だ。

一度ならともかく何度も繰り返してれば、それが本人の意思かどうかは明確だ。まして、

こんな体育の水泳の授業の時になんて狙ってるに決まってる。「おせっかいババア、いら

ねえんだよ」そう千鶴に言い捨て、男子の固まりのほうへ戻っていた。

「あいつ、いっぺん殴ってやりたいよ」そう拳を握りしめる彼女をなだめる。彼女は菜

奈の護衛役を担当している。無論そんなことお願いしたわけはなく、向こうから願いだした

だけの事。事あることからくる蔵川から菜奈を守る、という自発的な思いで。それ

によって、彼女は私への信頼を増し、私からの信頼が増しているのだとまた思い込む。そ

の思いが一方通行だと気づきもせず。「菜奈もビシッと言ってやんないと。あんたなんか

眼中にないんだ、って」

「まあまあ、いいじゃん。別に変な事されたわけじゃないから。

それに好きでいてもら

うのは悪いもんじゃないよ」菜奈の言葉に千鶴は首をかしげた。分からなかったらしい。

彼女にはまだ男がいらない、だからだろう。好きになる事、好きになられる事、その良さを

おぼろげには理解しつつも実感がないから。菜奈にとってのそれは蔵川にではない、もち

ろん。対象外な人間に用はない。むしろ、いらない。

どうせいらなら利用して捨ててやればいい。相手も恋先の役に立てた、と喜ぶことだろう。

25時34分、急落の再応。

「405号室の野戸さん、容態急変です！」看護婦の顔がゆがんだ。狂いそうになる呼

吸を整え、飛ぶように現場に向かっていく。少し後に四宮貞男が前を駆けていった。野戸

平蔵、75歳、病名・胃がん。

放っておいても失くなる命、なら有効に活用させてもらう。

極度の慎重は怠らなかつた。緊張はしているが、深夜である分やりやすい。二回目であ

る余裕はない、あつたとしても打ち消す。そんなものでミスをするわけにはいかない。こ

れは自分だけの犯行ではない。復讐であると同時に大切な人間を守るためでもある。予断

は許さない、確実にやり遂げてみせる。

あいにく、警備が手薄なことは知っている。守衛室の人間が怠惰な性格なのは聞いてあ

る。「ここだけの話、院内の見回りつたって適当だよ。別に何があるってわけじゃないん

だから」と漏らしていたらしい。そんな奴に後ろをとられることはないし、そんな事が

あれば一生の恥だ。死んだ方がマシだ。

順調に院内を抜けていると急にガタンと物音がした。咄嗟に身を隠す。息を潜めて、身

を伏せる。男子トイレから老人が出てきた。寝つけず、起きてしまったのだらう。こちら

に気づくことなく、自分の部屋へと帰っていく。今、上で何が起こ



っているのかは明日に  
知ることだろう。「その時間、ワシは起きとったぞ。ちょうど眠れ  
ずに便所に行っていた  
時じゃ」とでも、その事件に携わったように言いふらすかもしれない。  
まあ、そんなこと  
関係ない。気配を消して屈み腰で歩を進ませていくと、奥の扉を開  
錠して外へと脱出する  
ことに成功した。病院を振り返る。こっちに視線が向いてること  
など当然ない。405  
号室の明かりが点いていた。今頃は医師である無力さに頭を抱えて  
いるはずだ。ざまあみ  
ろ、そうほくそ笑みながら歩き出した。  
犯行終了。全ての計画に青信号。

「昨夜、安里市立病院で再び点滴に重度の薬品が数種類何者かによつて故意に注入される事件がありました。これにより、入院していた野戸平蔵さんが死亡。当時、病院内には関係者しかおらず、警察では詳しい原因を調べています」署内に流れるニュース番組に事件の一報が流れると、唐木田は怒りをあらわにした。「どういふことや、これは！」

周囲の視線が集まる。「落ち着いてください」と、牛嶋が小さく言う。

「全く同じ犯行や、警察なめとるぞ」湧き上がる怒りの矛先は侮辱したように二度連続の犯行を行った犯人とそれを暴けない自分自身に向けていた。1週間前に佐藤太吉の事件が起こってから特別な成果もあげられてない中での今回の事件とくれば仕方ないものだ。

牛嶋も何も言い返せなかった。言い返す言葉はどれもここで力を持つものではない。捜

査は病院関係者と部外者の二つの可能性から探りつつ進展がない。

正直、今回の事件から

出る新たな点が解決へと結びついてくれればと思っていた。

そのとき、朗報が飛び込んできた。鑑識の結果から、405号室から押収した物の中に

野戸の指紋と異なる反応が出た。物は十字架のキーホルダー、現場検証の際に「75歳の

持ち物にしては若い趣味だ」と疑問が拳がっていたものだった。「それや、そつから犯人

一気に洗い出すぞ」唐木田の顔色が勇ましいものへと変わった。

「あれ、おかしいなあ」物理の担当教師の欠席による自習時間に騒ぎ立つ1年2組の教

室で蔵川だけが浮かない顔で辺りをキョロキョロしている。おかしいなあ、と何度も機械のように呟いている。

「どうしたのよ」チラチラ目につく姿に菜奈が声を掛ける。

「俺のキーホルダー、いつもリュックに付けてるのが無いんだよ」知らないか、と視線を向ける。

「知るわけないでしょ、あんたの物なんか」千鶴の棘のありそうな言葉も蔵川には一切耳に入らない。

「もし見かけたら拾つといて」十字架のキーホルダー、と言って向こうへ行つた。

「見つからないよね、そんな小さいの」彼があれを気に入ってたのは知っている。ただそんなこと他人には知ったことじゃない。千鶴がお気に入りの花柄

のペンを失くした時は一緒に探してあげた。見つからないのは分かっていた。私が焼却炉に放っておいたんだから。そう、他人には知ったことじゃない。かえって、報復のいい材料になる。

「そういうの、案外全然見当違いなところにあるかもしれないよ」蔵川と千鶴、両者に対して言った。顔は笑っていた。千鶴は言葉の意味になど気づくこともなく、蔵川へのものだと勘違いして受け取った。

その日は部活終わりで病院へ行った。そこには重々しい空気すら感じられた。さすがに二件も殺人事件があったとあれば、外来の患者の減少はもちろん、入院中の患者にも殺伐とした面持ちが目立っている。いつもガヤガヤと賑やかなロビーも人の姿はまばらで医師や看護婦にも穏やかな表情は見受けられなかった。

「なんかもう墓場みたいよ。こんなところに十何時間もいんの耐えられない」ナースステーションに顔を出すと、福笑いが愚痴った。パーツも揃わないのに口は一丁前に吐くのか、と思った。

「みんな、疲れてるみたい」

「そうよ。警察にはまたあれこれ聞かれるし、患者からはこの病院はどうなってるんだって問い詰められるし、仕事も緊張しながらやってるし、参っちゃうわよ」昨日の事件の後、再び警察による事情聴取が行われた。今度は病院勤務者全員が対象となった。連続の

薬物混入事件、一件目以降は警備体制も強化して院内の見回りも細かくし、唯一の夜間用

の出入り口にも疑わしきところがあった。病院関係者、入院患者の順に疑惑がのぼるの

は当然のことだった。「仕事しながら、もしかしたら今ここにいる人が犯人かもしれない

とか思っちゃうのよ。もう、正直どうにかなりそう」福笑いは頭を押さえた。

「大変だね、もし私に出来ることがあったら言って」親身になって言った。

「ありがとうね、気持ちだけ貰っとくよ」彼女はそれを鵜呑みにしていた。

淀んでいるところには居にくかったので図書室で過ごすことにした。ここなら静かなの

も普通だし、病院で一番落ち着くところでもあった。医局室やナーステーションに行く

のはあくまでコミュニケーション、建前でしかない。四宮菜奈の表の顔売っておくため

の場所、それだけだ。彼ら彼女らと本気で仲良しになる気なんて毛頭がない。私のことを

分かってくれる人間なんて1人か2人だろう。私を理解してくれる人間と私を理解してく

れるであろう人間。それ以外の人間は私の本性を知れば、すぐにでも離れていくに違いな

い。それでいい、別に構いはしない。理解しない人間に理解してくれと強く訴えることな

んかしない。その1人か2人でいい、それで私は満たされる。

この日は面会時間の終わる20時過ぎに帰された。通常なら21時過ぎから22時あた

りまでいるのだが、今の病院の状態なら仕方ない。帰りがけに擦れ

違うスタッフに執拗な

くらい「一人で帰って大丈夫？」と心配されたが、問題ないからと押し通した。私は問題ないことを知っているから。

夜間用の出入り口から出ようとすると何やら話している2人がいた。守衛室のエロ目の

警備員と蔵川だった。菜奈は足を止めて、壁に隠れる。今、あの2人と一緒にいることは

分が悪くなる恐れがある。携帯をいじるフリをして通行人を遣り過ごしていると、話し終

えた蔵川が帰っていった。それを見届け、菜奈は歩き出す。

「おお。なんだ、今京介のやつが帰ってったんだよ」エロ目が菜奈の姿を瞳にすると、すぐにそう告げた。

「へえ、そうなんだ」さも今知ったように反応を示す。

「今から追いかければ間に合うよ」

「いいよ。毎日学校で会ってるんだから」

「冷たいなあ、おじさんの知ってる菜奈ちゃんはそんな子じゃないよ」そう言うと、

お互いにアハハと笑った。

「今日は早いねえ」

「うん。昨日の事件があったからさ、早く帰りなさいって」

「妙だよねえ、二件も続けて。この出入り口は一応ずつと見てるんだけどさ、誰一人も

通っちゃあいないんだよ。だから、外部からの侵入は無しだね」エロ目が興味本位的话を

始めた。きつと警察にもこう話したのだろう。

「じゃあ、内部の人間の仕業ってこと？」興味があるフリで乗っけてやる。

「そうに違いない。いやあ、見回りに行くのが怖いよ」そんなに

怖そうには見えなかつ

た。こんな状況なのにスリルを楽しんでるように思える。

もうすぐ、もっと極限的な恐怖を味わわせられるつてのに。

バイバイ、と普段よりも大きめの笑顔で別れた。ハナムケとして。

「安里市立病院で二件連続で点滴に重度の薬品が数種類何者かによつて故意に注入され

て入院患者の佐藤太吉さんと野戸平蔵さんが死亡した事件で、警察は今朝に容疑者とみられる親子を殺人の疑いで逮捕しました。逮捕されたのは、病院の警備員として勤務してい

た蔵川築介とその息子の13歳の男子中学生。調べによると、二件目に起こつた野戸平蔵

さんの殺害現場に残された物の中から男子中学生の指紋が検出されたとのこと。警察では、

この男子中学生と父親の蔵川築介による共犯の線が強いとして詳しい原因を調べています」

翌朝にテレビに流れた緊急ニュースは一帯に激震を与えた。逮捕された人間は誰しも予想

しなかった線だった。決め手になったのは病室に残されていた蔵川京介の十字架のキーホ

ルダー。昨日になって紛失したことからタイミングもバツチりと合つた。そして、犯人が

蔵川京介であることで謎だった侵入経路も解明できる。蔵川京介は堂々と夜間用の出入り

口から病院内に入ることができた。守衛室にいた父親の築介が黙認すればいいだけのこと

だから。毎日のように深夜の見回りをしていて院内のことを把握している築介が手を貸し

たのなら犯行もやりやすいはずだ。最も濃く確実な筋書きに警察は

難なく嵌った。

天下の警察が子供の計略にのせられるなんて、ただの恥だ。完全なる失望と満足。

学校では終日この話題で持ちきりになった、当然。全員が一日にして蔵川京介をクラスメイトから犯罪者という判別に変えていた。中にはかばう奴もいるかと思つたが、意外にそういつた勇氣のある奴はいなかった。蔵川の肩を持つことはイコール連続殺人犯の肩を持つことになる。そのリスクを冒してまで友情を選ぶ人間はここにはいなかった。所詮、友情なんて裏切られるだけのもの。そんなものを最初から信じてるから痛手を負うことになるんだ。偽者の関係なんか一つの事故で崩れ去る脆いものでしかない。

「菜奈……どう思う？」帰り道、千鶴が定まらない表情で問い掛けてきた。まだ彼女の中で今回の事件が整理されていないのだろう。学校側からは事件に関する明言は避けられていた。逮捕はされたが、蔵川による犯行と決定したわけじゃなかったので学校としても対応をしきれないところだった。マスコミの取材は受けないように、今回の件に關して軽い発言は控えるように、と言われたぐらいだった。「蔵川は確かにだらしなくてム力つくやつだけださ、あんな事をするようなやつじゃないよね」菜奈は怒りを覚えた。こんなに蔵川を犯人扱いしてる生徒たちの中で千鶴はそれをしなかった。どこまで良い子ぶれば気が済むんだ、と内心で思った。「分かんないけど、あれ

だけ証拠がはつきりと出てるんだからそうなんじゃないの」

言え。お前も蔵川が犯人だって言え。

「でも……」千鶴は良い子でしかなかった。それに居ても居られなくなり、菜

奈は用事を思い出したと言って彼女と別れた。

近場にあつた漫画喫茶に入ると、個室の中でスクールバッグの底に隠しておいたタバコ

に火をつけて吹かした。溜まった怒気を煙で紛らわしながらテレビを眺めた。ニュース番

組は今回の事件について蔵川親子は容疑を一切否認していると報道していた。

きらきらひかる おそらのほしよ

まばたきしては みんなをみてる

きらきらひかる おそらのほしよ

きらきらひかる おそらのほしよ

みんなのうたが とどくといいな

きらきらひかる おそらのほしよ

瞳をつぶると、体の中に「きらきら星」を流した。きつと今頃、

あなたもどこかで流し

てくれているのだろうと思うと涙が流れた。

破滅への序曲。それはあなたの希望になるための音色。



## 第2話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

## 第2話

泣いた夜はあなたにいてほしい。

私の涙を拭いてもらいたい。

あなたの涙も拭いてあげるから。

楽しい時にもあなたにいてほしい。

私の笑顔を見てもらいたい。

あなたの笑顔も見たいから。

あなたのことを見つめたい。

あなたのことを触りたい。

あなたのことを知りたい。

あなたの心を見つめたい。

あなたの優しさに触りたい。

あなたの憎しみを知りたい。

今すぐにもあなたのもとに行きたい。

今すぐにもあなたに包まれない。

今すぐにもあなたと結ばれない。

どうすればいいの。

どうすれば私とあなたは男と女になれるの。

どうすれば……。

夢から覚めると、右の瞳から涙が肌を伝って枕に沁みていた。鼻

をすすると、重い身体

を起こして虚ろな気分に浸っていく。

夢だった。よく見る夢だ。これまでに何度見てきたか分からない。心の奥を読み取った

ように操られた夢は現実味を帯びていて悲しい想いにさらされる。

それだけ自分が意識を

してしまっているんだろう。計画が始まったことでよりそれが高まってしまってるのかもしれない。

気を引き締めないといけない、今だからこそ。計画における一切の油断は許されない。

この時まで培ってきた努力が全て水の泡に化してしまう。求める未来へと架けられた橋

が渡れなくなってしまう。最後まで四宮菜奈としての仕事を全うしなければならぬ。私

たちが望んだ未来を手に入れるために。

「安里市立病院で点滴に重度の薬品が故意に注入され、患者の佐藤太吉さんと野戸平蔵

さんが死亡した事件は容疑者の蔵川築介とその息子の男子中学生が逮捕されて3日になり

ます。依然として親子は容疑を否認し続けているため、警察では引き続き詳しい原因を調

べています」朝食中、テレビの地方チャンネルのニュースから流れしてきた。容疑者の逮捕

によって事件は解決かという空気の中、蔵川親子はそんな周囲の思惑を無視するように否

認を続けていた。進展のみえない事件は全国区のニュース番組から流れることはなくなり、

こうして地方局の報道機関へとランクを下げた。それでも、当然こ

こら一帯の世帯では続

報が気になるため、薄まった事件の詳細を追っていた。

「一体、いつになったら終わってくれることやら」そう呟きながら、貞男はテレビ画面

を全国区へ変えた。身近に起こった事件を何より気にしていたが、家族にはあまり心配は

かけたくないと自分から会話を始めることはしなかった。

「まだまだ解決しそうにないわね」菜子は緊張感を解けない毎日を過ごしている。彼女

はひどく心配性な一面を兼ね備えているため、周りもへたに重い話をしづらい。逆にそこ

を突いて、一芝居をうつて驚かせたりすることもある。要は正直者なのだ。人間を信じす

ぎるのだろう。いつかそれは利用できるかもしれない、と踏んでいる。

「パパもママも不安になりすぎ。犯人捕まってるんだから、もう時間の問題でしょう」

静まりかけていた朝の食卓の雰囲気的菜奈が割って入る。たまたまテレビ画面に流れてい

たファッションのトレンドを紹介するコーナーに一つ一つ口をはさんでいく。それは40

代女性の菜子には辛うじて分かるが、男の貞男にはさっぱりという内容だった。それでも、

菜奈が気遣って話を盛り上げてくれていることは分かった。12歳の我が娘に気に掛けら

れて、それがいけないことであると2人は察した。同時に、よくできた娘に頼もしさすら

感じた。

安里市立第一中学校では事件に対する対応にやきもきしているの

が事実だった。保護者からは「おたくの学校は安全なのか」「ウチの子供は大丈夫なのか」といった連日の抗議じみた電話に困っていた。かといって、犯行を認めていない蔵川京介へ具体的な対応策もとれないのが現実だ。彼が犯人である場合、そうでない場合の両側を考えつつ、あやふやな態度を示して時間を稼いでいる。そうした曖昧さを続ける機関を報道で目にしてきたが、実際にその立場になってみると本当に何もできやしないんだと痛感させられる。中には厳しい意見が届くこともあり、それが生徒からの時もある。学校側の現状を知り、皮肉ったようにいじめてくる心のないやつもいる。はるか年下の若い人間にそんなことを言われ、怒りを覚えるが毅然としていなければならない。上からも下からも圧力をかけられ、学校というものは脆いものなんだと胸を痛ませられるばかりだった。

1年2組、野竿はこのクラスの担任になったことを後悔していた。春に新入生の学級を任された時、まさかこんな大事に巻き込まれることになるなんて予測のしようがなかった。

1組でよかったのに。3組でもよかったのに。どうして、よりによって自分のクラスから連続殺人事件の容疑者が出るんだ。最初は何かの間違いだと思った。でも、時間が経つにつれて現実味を帯びてくる。周囲から押し寄せる圧迫感とはとてもなく、学校からは当然のところ、保護者、家族や親戚、報道機関といった様々な方面から距離を近づけられ、ど

うにもならない疲労感に襲われて参っていた。なんとか正気は保っていたが、いつ壊れて

しまうのかと自分でも保障できない感覚に陥っていた。

こういうとき、人間は本性を現すように他人事と自分を引き離す。昨日まで仲良くして

いた人間が急に冷たくなっていく。精神的にやられていた野竿にはそれがショックで、ま

た一つ気を落としていった。優しい言葉をかけられても全て嘘っぱちに聞こえてくる。

無関係だからそんな思ってもないような言葉が吐けるんだ、と相手を卑下してしまう。そ

んな自分自身がどうしようもない人間に思えて苛立ちが増していく。ありとあらゆる事が

悪循環になり、どうにかなってしまいそうだった。

「先生、大丈夫？」その声を掛けてくれたのは受け持つ2組の生徒の四宮菜奈だった。

正直、その言葉には心を和らげてくれる効果があった。蔵川が逮捕されてから、滅入って

いた自分に優しい言葉を掛けてくれた生徒は彼女だけだった。他の生徒は蔵川京介と一切

の関係を断とうとし、今回の事件に関してへたに干渉しないようにしていた。そのことで

どれほど頭を悩ませていたかという担任の気持ちも同時に。ただ、四宮はこうして何彼に

つけて毎日職員室まで来ては気遣ってくれていた。これまで、それなりの中学生の生徒と

接してきたが、なかなか中学1年生でここまで出来る女子はそういない。彼女にはどこか

しら同年代の女子とは違うものがあると思っていたが、やはりそうだった。勉強も運動も

人間としても、全てが平均的に調和が取れている。かといって、出来過ぎという分野がないのも特徴だった。全てにおいて上位に位置づけられるのに、どれもクラスで二番手から三番手あたりにいるのだ。中間テストではどの教科もクラスで五位以内に入り、合計でもクラスの二位だった。運動もよく出来るらしいが、抜きん出た何かというのではない。人間的にも、それが当てはまる。ホームルームで話し合いが行われると、学級委員の進行では大概は怠慢な空気が訪れてしまう。最終的には、じゃんけんでも決められそうな勢いにさえなっていく。しかし、そういうところで彼女はさりげなく進行を軌道修正するような一言をもらす。あくまで、さりげなく。客観的に見ていれば、彼女が話し合いを取り仕切っているにも思える。だが、四宮は前に出て来るタイプではなかった。出ようと思えば出れるし、2組のリーダー的存在になれると思う。ただ、彼女はそれをしない。学級委員に向いていると指摘したこともあるが、「絶対に嫌」の一点張りだった。目立つのは好きじゃないようだ。総合的に考えてみると、目立ちたくはないから全てにおいて適度な位置を保っているのではないかと思えた。本当はトップになれるのに、わざとそれをしないで自分をセーブしているんじゃないかと。そうだとしたら、年齢にそぐわずしたたかな女だといえる。

「ああ、大丈夫だよ」強がって、そう返した。

「あんまり考えすぎちゃダメだよ。先生が何したわけじゃないんだから」こちらの思いを見透かしたように四宮は気遣いの言葉を言うてくる。

野竿は不適切な感情に駆られる。それが誤った都合のよすぎる解釈であるのは分かって

いる。しかし、こんな40代から50代の同僚の異性しかない職場にいと若い女の子

の魅力というのはこれでもかと心を揺さぶる。今までは感情を抑えてきたが、こうして窮

地に立たされて感覚が鈍っていた。その中で、こんなふうに優しくされてしまうと芯が大

きくブレてしまうのが事実だった。

「ありがとう、四宮。わざわざ心配しなくてもいいよ」また強がって、返した。

「了解。もし、私に出来ることがあったら何でも言うてね」そう言い、四宮は帰って

った。職員室の出入り口で振り返り、こちらに手を振ってきたので同じように返した。

捜査本部では思うように進まない事件の取り調べに難航していた。

唐木田は長く解き放

たれない悩みがいい加減うんざりしてきた。「どうなつとるんや、一体全体」

横から2人分のコーヒーを持った牛嶋が1つを差し出す。「考えすぎもよくないですよ。

一度休憩しましょう」

「そんなん言うてもなあ」蔵川親子は全くもって犯行を認める気がない。そんなに意思

の凝固な人間にはみえないのだが、一向に口を割る気配はない。事件の経緯と証拠品から



すれば2人の犯行は最も考えやすいのだが、「知らない」「分からない」「やってない」

の連続だ。嘘がうまいタイプにはみえないし、嘘をついているようにもみえない。刑事を

長年やってきた勘からして、あの親子があんな卑劣な殺人をするようには思えない。いや、

もしかすると表向きにはない裏の顔を持ち合わせてるのかもしれない。あれだけのことを

やってのける犯人だ、それぐらいはやってくれるだろう。「どうも何か引つ掛かるんや」

「何か、と言いますと」

「分らん。ベテランの直感や」

「そんなんじゃ何の根拠にもならないでしょう」

「阿呆、頭のいい官僚の兄ちゃんの推理より100の現場に携わった平の刑事の直感の

方が何倍も当てにできるもんや。こちららなあ、泥水かぶってまで毎日ヒーコラ歩き回っ

とんねん」

「そりや、唐木田さんの言うことは当たってるんでしょうけど。

でも、今回の事件には

蔵川親子が犯人であると断定できる証拠があるんですから。事件のあった時刻、あの2人

には二件ともにアリバイもない。事件にまつわる全ては蔵川がやったと言ってるようなものです」

唐木田は机をバシツと叩いた。「それがおかしいんや。状況はあまりに蔵川親子が犯人

ですよ、と指し示しすぎてる。あれだけ完璧に近く犯行を成し遂げた犯人が何であんなドジを踏むんや」

「いくら連続殺人犯といえど人の子です。あの状況で緊張していたんでしょう」

「それはそうだろうが、さすがにキーホルダーを落として気づかんのはおかしいやろ。」

チャリン、だとか響くはずや。夜中の病室なら尚更のこと」そう  
だ、あの犯行を行った人間にしては結構にずぼらだ。

「確かに……」蔵川京介が現場で十字架のキーホルダーを落としたことを想像してみる。唐木田の言うように、その音が耳に入らないのはおかしいといえる。13歳であることを加えれば極度の緊張感であったことも想定されるが、そんな人間にあの犯行が可能なのだろうか。「でもですよ、そうすると誰が他にあの事件を起こしたんですか」

牛嶋のその質問には唐木田も返す言葉がなかった。一つ息をつき、「さあな」と言うの

がやっとだった。あの事件には不可解な部分もある。しかし、では誰が真犯人なのかとなつてしまえば捜査はほとんどゼロの状態に戻ってしまうだけだ。捜査本部とすれば、あの

2人が自供してくれるのが一番願いたいところである。それをわざわざふりだしから再開するなんて面倒なこと、正直やってられないだろう。このまま流れに身を任せるべきなのか、唐木田は迷っていた。

「あれねえ、さつさと私がやりましたって言えばいいのに」病院でさりげなく事件について探りをいれると、福笑いがばやいた。学校側に同じく病院側に

しても犯人が特定さ

れないと対応がはつきりできないのが事実だ。「だってさあ、どう考えたってあの2人に

違いがないんですよ。だったら、さっさと認めて少しでも罪を軽くした方がいいんじゃない」

「うん、どうだろうね」明言は避けておく。

「でもなあ、あんなことするような人には見えなかったけどな。話しやすいし、穏やか

な印象だったもん。まあ、たまにセクハラじみたこと言われたりはしてたけど」あいつ、

福笑いにまでそんなことしてたのか。

「なんか怖いもんね。未だに夜寝るときとか誰かいるんじゃないか、って縮んじやうし」

心配しなくても、お前のことなんか誰も襲いやしないよ。

「人は見た目じゃ分かんないってことだね。私だってさ、こう見えて普段はがさつだ

もん」全然見た目どおりだろ。ってか、お前の顔ががさつだ。

「赤妻さん」後ろから婦長の下越がやってくると福笑いはそそくさと仕事に戻っていく。

「またサボってたんじゃないの、彼女」今度は婦長からナースへの探りがはいる。

「いえ……一応、ギリで仕事の話です」暗黙の了解で肩を持つておく。

「そう。もしサボってたりしたら、仕事しなさいって言うておいてね」

「いやあ、私にそんな権限ありませんから」

「何言ってるの。この病院では菜奈ちゃんの方が先輩なんだから」

「先輩って、私何してないのに」

「そんなことないわ。患者さんでも長い人になると新人の看護婦にああでもないこうで

もないってダメ出しするもんよ。それに比べたら、菜奈ちゃんは医療の事も勉強してるし

問題ないわよ」

「いやいや、私なんかまだまだ全然だから」

「そうかしら。私は未来の名医の卵だと思ってるんだけどな」

ええっ、と瞳を開く菜奈を見て下越はクスクスと笑っていた。かわかれた菜奈も満更

という気分でもない。下越に言われると悪い気はしない言葉だった。福笑いに言われたらぶつとばしたくなるだろうが。

「まあ、あんまり赤妻さんの相手してあげなくてもいいからね。菜奈ちゃん自分の事があるんだし」

「いいえ、赤妻さんと話してると楽しいですから」嘘だ。あいつの話なんて、半分以上は愚痴だ。耳が腐りそうになる。

「そういえば、事件のことなんだけど。菜奈ちゃんの学校の方ではどうなってるの」

「そうですね……いろいろ困ってるらしいです。犯人が確定されてないから、苦情とかの対応もはつきりとできないみたいで。学校はもちろん自分のところの生徒が犯人でないことを願ってるんだろうし」

「やっぱ、学校もそうなのね。こっちも同じよ。患者さんや外来の方の対応に困ってるの。病院としても、もちろん蔵川さんが犯人でないことがベストなんだけど。そうであって欲しいから、曖昧な返事とかをしていると外来を回避されちゃったりもして。警察も頑張ってるでしょうけれど、早く白黒つけてくれるとありがたいの

よね」病院側も未曾有の出来事に弱っていた。そうだ、それでいいんだ。これが私たちの思い描いてたシナリオそのものなんだ。

でもね、まだまだこんなものは序の口なんだよ。もっと地獄を見せてあげるから、待っててね。

結局、蔵川築介と京介は容疑否認のまま勾留されることが決まった。このままいけば、あの親子は無実の罪を刑事裁判で裁かれることになる。それでいい。刑の重さなんかどうだっていい。裁判が何回開かれようが、誰が証言をしようが関係ない。奴らが犯人である結果さえ残れば、それだけでいい。

もう焦点は次に向かっている。前は死にかけの眠り人だったが、今回は標的も普通の人間になる。失敗は計画の失態を意味し、そんな損ないが有り得るわけがない。あんな日々を薄ったれて過ごしている凡人たちに俺たちの生きる糧を潰されてたまるか。

復讐とは成されてこそそのものだ。

安里市立第一中学校、四宮菜奈が通っている学校だ。近くに来たときに遠目に建物を見たことはあったが、こうして間近から見るのは初めてだった。学校の横手にある劇場の外階段から隠れてカメラを構えると、校門から出て来る下校中の女子生徒の姿を次々とフィルムにおさえていく。夕暮れの校舎から吐き出されるように出て来る学生は拘束から解放

されたように伸び伸びとした表情が並んでるが、そんなものは目的ではない。ピントを合

わすのは顔ではなく体だ。全体像というよりも制服に的を定め、膨らみはじめた胸や汚れ

ていない白く細い足も撮っていく。変態の気持ちはよく分からないが、それらしい写真を

仕上げていけばいいだろう。周りの人間はよく成人向けの雑誌を眺めながら裸の女の写真

に興奮しているが、正直いって性の目覚めなんかに興味はない。いらない欲に溺れること

などしないし、そんな低俗なところにはいない。童貞なんかとつくに失くしている。俺が

興奮する女は一人だけだし、それ以外の女はいてもいなくても支障はない。

まばらに流れていく学生の中に四宮菜奈の姿を捉える。視線の角度、身体の傾き、友人

との距離感、全てこちらに都合がいいようにポジショニングを取ってくれているのが分か

った。これでもかとシャッターをきり、その快活な姿をカメラの記憶に留めていく。もう

ピントが合わない距離まで離れると、彼女の視線がこちらに向いた。こつちも彼女へ視線

を向ける。止まったように流れる数秒の間、2人とも無表情を続けていた。

野竿の気分は相変わらず浮かなかった。蔵川京介の勾留の報せが届き、事態はほぼ親子

を犯人と示すのも同然となった。ここから別の人間が犯人となって逮捕されるなんて逆転

は起こらないだろう。どうにもやりきれないが、現状を受け止めな

ければならない。蔵川

は連続殺人犯であり、自分はその担任だ。普段のあいつを見るかぎり、そんなことに手を

染めるようには微塵も思えないが現実がこうなっている以上は仕方がない。周囲や世間か

らの厳しい目を向けられるだろう。何かしらの処分だってあるかもしれない。こうなった

からには学校側としてもないがしろには出来ない。どうなってしま  
うんだ、俺は。副担任

に格下げか。別の学校へ飛ばされるのか。まさか教師を辞めさせる、  
なんてことはしない

だろう。それはあまりにもだ。冗談じゃない、俺が何をしたってい  
うんだ。そうだ、俺は

何も悪いことなんかしていないんだ。こんなに怯える理由がない、  
いつそ開き直ってやれ

ばいい。俺の教え子は犯罪者、それがどうしたと。あいつが勝手に  
殺したんだ。あいつの

都合で俺は苦しめられてるんだ。俺は被害者、ただの被害者なんだ。  
もっと俺に同情して

くれ、優しく手を差し伸べてくれ。

「先生、どうしたの」その言葉に我に返る。声の方を向くと、四  
宮菜奈が前を指差して

いた。前に向き直すと、目の前に壁がありハツとなる。彼女が声を  
掛けてくれなかったら

壁に突っ込んでいるところだった。「なんか、そのまま当たりに行  
きそうな感じだったよ」

「ああ、すまん」

「授業中から気になってたんだ。また考え事でしょ。言ったじゃ  
んか、先生がそんなに  
背負わなくていいんだって」

「そんなこと言ってもなあ……」言った後に自分の言葉に起こされた。普通に弱音を吐こうとしている自分がいる。生徒、しかも中学生の女の子に対して大人の弱さをさらけ出そうとしている。そんなバカな、これまでこんな事はなかった。相手はまだ少し前までランドセルを背負ってた子供だぞ。こうして気にかけてくれるのは嬉しいが、本気で相談をするなんてあるはずがない。そうか、あまりにも精神的にやられてしまっているんだ。「いや、何でもないよ」

「いいよ、何でも言ってくれて」四宮は気がかりそうな顔をして言った。その純粋な瞳に弱った野竿の心は揺らぎそうになる。

「本当に何でもないよ。ありがとうな、心配してくれて」なんとか正気を保ち、教師としての態度を心掛ける。

そう、と言って四宮は顔をくずした。「先生、どこか気晴らしにでも行ったら？」

「そうだな、そうするかな」確かに心身のリフレッシュが必要かもしれない、と野竿は思った。

「なんなら、私が一緒に行こうかな」

えっ、と野竿は声に出してしまう。それに四宮は驚いた表情を見せる。

「嘘だよお、ジョークだってば」無邪気に彼女は笑い飛ばしていた。「第一、今の状況

で先生と私がどこかに行く方がまずいじゃん」

「そうか、そうだな」野竿も無理に笑った。四宮が冗談にしてくれたおかげで助かった。



あんな言葉を本気にするなんてどうかしている。彼女でなければ、変態扱いされてたかもしれない。

そろそろ時間だ、と四宮はその場を後にした。着替えのようなものを持っていたので、次は体育なのだろう。こちらに笑顔で手を振ってくれたので、野竿は小さく振り返した。姿が見えなくなると、異様な脱力感を感じた。四宮菜奈と接すると、なぜか疲労を覚える。どうしてだ。数多くの生徒の中の一人だろう、彼女は。何をそんなに身構えることがあるというんだ。おかしい、あの事件で自分はどうかになってしまってるんだ。

ドウニカ・・・ドウニカナッテシマッテル・・・。  
気づくと、足は水泳室に向かっていた。いや、明らかに自分の意識でそうしているのだ。

己の異変を隠そうとして理由になるような事を引き出してるだけだ。安里第一中学校は温

水プールなので、二階の見学室から見分には気づかれる可能性は低い。幸い、見学者は

いなかったのですんなりと見学室に入ることができた。とはいえ、一階のプールにいる生

徒に運悪く発見されることがないように慎重にこっそりと下の様子を覗き込んだ。下から

響く声変わりのしていない高めの声音に心臓が高鳴る。その中に四宮菜奈の姿を見つける

と、それからしばらく彼女を目で追い続けた。鼓動が早くなっている。確実に四宮の姿に

心が揺れている。おかしい、どういうことだ。俺はロリコンなんかじゃない。証拠に、今

まで生徒に恋愛感情を抱いたことなどない。それが今、四宮の水着姿に興奮と動揺が続いている。まずいと思いながら不屈きな考えをしている。四宮菜奈をどうにかしたい、あの体をどうにかしたいと。野竿はもうそこにはいられなくなり、急ぐように呼吸を正しながら早歩きで戻っていった。

四宮菜奈はかわいい子だ。パツチリとした瞳と小さめの鼻とアヒル口のバランスは的確なポジションをとらえている。涼しげな顔立ちと緩んだ笑顔のギャップは男心をくすぐる。もしも同じ年で同じクラスに彼女がいたとしたら、間違いなく恋をしているだろう。違う、自分はもう彼女に恋をしてしまっている。エスカレートしていく気持ちを抑えることはできない。しかし、現実には教師と生徒で30歳以上の年齢差は縮まることはない。この想いは届かないのだろうか、叶わないのだろうか。

四宮自身はどうなんだ。いつもの様子を見てるかぎり、脈がないとは思えない。彼女は他の女子生徒とは違い、こんな親父な教師でもウザがらない。毎日気さくに話し掛けてくれるし、どの生徒よりも距離は近かった。こちらが適度な距離を保とうとするところを向こうからどんどん狭めてきてくる。蔵川の一件があつてからは毎日心配して来てくれるし、常にこちらの顔色を窺ってくれてるようだった。これがただの40代も後半の独身男への態度だろうか。自分は特に冴えたところもない、何の変哲もない男

だ。あれはそんな暗く

沈んだ男に対する行動ではない。そうだ、きっと四宮も俺のことを想っているに違いない。

彼女と俺は両思いなんだ。言葉にするのが恥ずかしくて、ああいう行動にでていたという

わけなんだな。分かったよ、そういうことならこっちから迎えに行つてあげるよ。

ムカエニ・・・ムカエニツテアゲルヨ・・・。

「君の処分も含めて検討させてもらってるよ」朝、校長から言われた一言だった。愕然

とした。もしかするとは考えていたが、それでも自分にまで手が及ぶとは本気にはして

いなかったから。俺は何もしていない。何もしていないのに何の処分を受けなければなら

ないというんだ。蔵川京介の内に潜んだ悪を見抜けなかったから、というならあまりにも

だろう。いくら生徒といえども、犯罪を犯す人間かどうかを対象に見たことなんかない。

ましてや中学１年生だし、蔵川なんか前兆がまるでなかった。それを見抜ける教師の方が

表彰ものだろう。強引すぎる、残忍すぎる、勝手すぎる。辞めたいのなら校長が一人だけ

辞めればいい。あんたが学校の責任者なんだから、下の者をかばつて自ら腹を切るのが筋

というものだ。なのに、俺まで巻き添えにしようだなんて話がおかしいのも甚だしい。こ

んなことがあつてたまるか。これじゃ、俺はこの先ずっと生徒を連続殺人犯にした教師と

いうレッテルを貼られて生きていかなければならない。そんなもの

真つ平ごめんだ。誰か、  
誰か助けてくれ。誰か俺を助けてくれるやつは……いた。

「ねえ、蔵川ってどうなっちゃうのかな」放課後、部活終わりで一緒に帰ろうとしていた千鶴から尋ねられる。不安げな彼女の横顔を見つけると、菜奈は気づかれないように微笑んだ。彼女もようやく蔵川親子が犯人であると納得したのだ。その事実には菜奈は顔色を緩ませずにはいらなかった。

そうだよ。そうやって、人を心で裏切っていけばいいんだよ。

「私もよく分かんないけど、こういう事件で死んだのが一人だった場合は懲役何年つてのを病院の人に聞いたの。でも、二人だとどうなるか……正直分かんない」別にそんなことだろうと構わない。奴らの刑が軽かるうが重かるうが大した問題じゃない。

全てがこちらの意のままに動けばそれでいい。

その時、後ろから名前を呼ばれたので振り返ると野竿がいた。ゴミ捨て場にあつたゴミ

の袋が何者かによって破られて中身が散乱する悪質なイタズラがあったらしく、その清掃

と一緒にやつてもらいたいと言われた。菜奈は美化委員で野竿が委員の担当教師であつた

ことから頼まれたのだ。委員会はクラスから男女が一人ずつ何かしらに就かなければなら

ない。2組からは菜奈と蔵川が美化委員になっていた。菜奈が就くと、蔵川が後からくつ

ついてきたのは言うまでもない。今、他の教師と美化委員も借り出されてると聞き、それ

なら行かなければ面目が立たないと菜奈も引き受けた。千鶴も一緒にやるよと言ったが、  
申し訳ないからと彼女は帰した。そんなことをされたら、せつかくの計画が台無しだ。

ゴミ捨て場に行くまでの間、野竿は荒らされた状況を細かに説明していく。緊張のせい  
か、滑るように口から言葉が流れていた。まるで彼がそこを荒らした本人かのように詳細な部分まで語っていた。それはそうだろう、こいつが実際に荒らした本人なのだから。今  
から皆で掃除をすればすぐに終わるから、と野竿は言う。そんな嘘、丸分かりだ。猿より  
下手くそな芝居に付き合い、緩みそうになる気を引き締めた。

校舎裏のゴミ捨て場に着くと、予想どおりに誰もそこにはいなかった。多く積まれたゴミ袋も一つも荒らされてはいなかった。それも予想の範疇だった。ゴミがどうだかなんて  
菜奈を呼び出すための口実にすぎないんだから。当然のごとく、野

竿は作戦が自分の思う  
ままに進んでると思い込み、菜奈は全てを見破った上でここまで来ていた。野竿の息遣いは増していた。落ち着かせようとして、余計に空回りしている。奴は次の展開を待っている。この状況を見て、何も起こってないことに菜奈が何かを発すること。そして、その

思惑にわざと乗っかってやる。「先生、何もないよ」

その言葉を待っていたかのように野竿はゆっくりと顔をこちらに向けた。平生を装っているつもりだろうが、完全に目が据わっていた。これが演技の試験

なら一発で落選だ。も

しも菜奈が何も知らないとしたら、その不自然さで簡単に事態の悪さを察知していること

だろう。「なあ、四宮」

「いつも俺のことを見てるだろう」

「えっ」空気の異変に気づいたフリをする。真顔になり、野竿をジッと見た。

「毎日、俺のことを見ているんだろ？」

「それは……いろいろあったから心配で」

「そうだな、心配してくれるのなんてお前だけだ。他の奴らなんて、言葉を発してるだ

けで何とも思っちゃいない。本当に俺のことを気にかけてくれるのは四宮、お前一人だ

けなんだ」嬉しいよ、と野竿は一步步近づいてくる。それに合わせ、菜奈は一步步後ろへ後ずさる。

「四宮、俺のことが好きなんだろ」

「えっ」掠れたような小さな声を出す。怯えたフリをして、迫ってくる野竿から視線は

外さなかった。

「俺のことが好きだから、そんなに俺を心配してくれるんだろ」

「何言ってるの、先生……そんなじゃないよ」

「恥ずかしがらなくなってい。隠したって、もう分かっているんだよ」

「だから、違うんだよ……そんなふうになんて見てないんだよ」菜奈の背中が

校舎にぴつたりと付く。それでも、野獣と化した野竿は止まらない。涙を瞳に溜めて、弱

々しい声で呟いた。「止めて……先生」

「大丈夫だ。四宮の望むとおりにしてやるから」距離が無いほど

に詰め寄ると、野竿の手の平がそつと左の頬に添えられた。老いの始まりが感じられるざらざらした感触が気色悪かった。

菜奈の肌に触れたことで沸点を超えたのか、野竿は一気に抱きついてきた。初めて味わう犯される感覚に大声を出したくなるが、思いきりそれを押し殺す。もうすぐ、もうすぐ

だから。覆い被さり、まわりついてくる野竿からは言葉にならないイカれた声が何度と伝わってくる。臭い身体や息に嫌悪感を抱きながら我慢を続けた。

その時、貼りついていた圧迫感がいきなりはがれた。視界に光が戻ると、そこには苦い

顔を浮かべる野竿とその後ろから彼を絞める人間がいた。その人間は野竿の顎元をグツと

腕で絞め、あつという間に失神させてしまった。ヘルメットにレザのジャケットとパン

ツにグローブと完全装備をした人間は菜奈の方を向くと、ヘルメットのシールドを開けた。

精悍な瞳を見ると、菜奈は一つ深く頷く。それを確認すると、その人間はシールドを閉じ

て校舎裏の奥の方へと走り去っていった。姿が消えてから1分を時計で数え、初めて菜奈は大声を出した。

最初に来たのは2学年の女性教師だった。ゴミ置き場から近いところに卓球場があるのを思い出し、彼女が卓球部の顧問だったのも思い出した。彼女はそこにある光景を見ると、悲鳴のような声を上げた。それはそうだろう。教師が気を失って倒

れ、生徒が心ここにな  
い状態で血を流していたのだから。制服を乱れさせ、髪もボサボサ  
にし、身体を土で汚し、  
唇を噛んで血を垂らし、それらしい演出をしておいたので彼女は2  
人の状態を確認すると  
逃げるように職員室へ駆けて行った。

きらきらひかる　おそらのほしよ  
まばたきしては　みんなをみてる  
きらきらひかる　おそらのほしよ  
  
きらきらひかる　おそらのほしよ  
みんなのうたが　とどくといいな  
きらきらひかる　おそらのほしよ

空を眺めると、体の中に「きらきら星」を流した。きっと今頃、  
あなたもどこかで流し  
てくれているだろうと思い瞳を閉じた。  
信じてる。あなたの願いは私の願いだと。



### 第3話（前書き）

#### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

### 第3話

絆って何ですか。

見えやすいものですか。見えにくいものですか。

掴み取るものですか。感じ取るものですか。

守るべきものですか。壊すべきものですか。

見つけるものですか。気づけばあるものですか。

生まれるものですか。最初からあるものですか。

強くするものですか。弱くてもいいものですか。

救うべきものですか。見過ごすべきものですか。

綺麗なものですか。汚いものですか。

いつか無くなるものですか。いつまでも在り続けるものですか。

奇跡ですか。妥協ですか。

人間はどうして絆を欲しがるんですか。

人は形あるものを欲しがる種類じゃないんですか。

物だとか行動だとか目に見えるものを求めるんじゃないんですか。

人間は時により、二者の両方を取るのは何故ですか。

右に行く時があれば、左に行く時もある。

どうして、右に行き続けることが出来ないんですか。

選択肢に迷うなんて弱い奴らだ。

いや、選択肢がある時点でそいつは弱い。

私たちにはそんなもの最初からないんだ。

あの日、あの時から決められた直線を進むことしか出来なかったんだ。

その道を迷うことなく進むことが私たちの絆だった。

眠りから覚めると、まだ辺りは闇に包まれていた。夜は好きだ。暗く閉ざされた世界が

好きだ。私自身もその世界に蝕まれているから。この環境が落ち着く。太陽は私には眩し

すぎるんだと思う。月の光が私には心地いい。昼間の大空はどこまでも限度なく突き抜け

続ける気がするけれど、夜空は際限のある気がしてゆとりが持てる。この空を通じて、あ

なたと繋がっている気がする。それが私の心を撫でてくれる。折れてしまいそうになる私の心をここに留まらせてくれる。

「菜奈、寝てないとダメじゃない」部屋からリビングに行くと、菜子からそう諭される。

時計を見してみる、23時38分。2〜3時間は寝ただろうか。20時や21時に眠ること

なんかそうそうないので、仮眠程度の時間しか眠れなかったようだ。

「起きちゃったから。喉も乾いたし」そう言って、冷蔵庫にある牛乳を飲む。あやふや

だった頭の回線がピンとなった気がした。菜奈は家では水と牛乳とお茶しか飲まない。理

由は体に良い、もしくは体に害がないから。単純すぎるが、それで父親は喜ぶ。邪道の方

へ進まず、真つすぐに娘は歩いてると勘違いする。バカだからそう思い込む。母親や千鶴

と2人きりで出掛けた時にはジュースを飲む。喫茶店やファミレスには牛乳やお茶はない

からという名目だが、彼女たちはそれを喜んでくれる。他には見せない面を自分には見せ

てくれてると錯覚する。本当はコーヒーも炭酸飲料もアルコールも飲んでいるのに。どうせ、

みんな視界に映るものでしか人間を判断できないんだよ。だから、こうやってすぐに騙さ

れるんだ。自分が欺かれてるとも知らずに偽物をありがたく受け入れてるんだ。

リビングを見渡すと、ソファに貞男の姿があった。視線はこちらに向いている。「おかえり、パパ」

「傷の方は大丈夫なのか」

「うん、大したことはないよ」

そうか、とだけ貞男は言った。本当はもっと事細かに詳細を聞き出したくてたまらないのだろう。ただ、まだ事件があつてから数時間ということを考えると、そうすることは娘

の心の傷口をほじくるようなものでためらった。何かを言いたげであるのは父親の表情にはつきりと出ていた。それを察した上で、菜奈はあえて無視する。揺さぶることで彼

はまた心の靄から抜け出せずにいなければならない。

全てはこちらの狙いどおり。奏でる音色は悲しみと憎しみを助長させていく。

「事件はまだ終わってないんですかね」書類を片付け、そろそろ帰ろうかというときに牛嶋がポツリとこぼした。彼を見ているが、特別に真剣な顔つきではなく刑事課の薄暗い天井をボーッと眺めている。

「どういう意味や」込み入った内容ではなさそうなので、唐木田は帰り支度をしながら返答した。

「今日の中学校での事件ですよ。病院での連続殺人事件はこのま

ま蔵川親子の犯行で終わりそうな感じだったところに今回の事件です。野竿って教師は蔵川京介に関する周囲からのプレッシャーで情緒不安定になり、犯罪に手を染めました。そこまで大きな事件にはならず済んだのは不幸中の幸いですけど、これであの男の人生はどん底です。世間では忘れられようとしている数多くの殺人事件の一つでしょうが、こうやって周りにいる人間の中では生き続けてるんですね」牛嶋は現実を突きつけられた。彼自身も安里市立病院の事件は蔵川親子で一本化していたからだ。事件の重要度は警察としても彼の中でも薄まっていたのは事実であり、その裏でこんなことが起ころうとは微塵も思っではいなかった。大きな思い違いをしていた。確かに事件そのものに関わった当事者は少ないが、その人間に関わっている多くの人・家族・組織があるのだ。その人たちの中ではこれからも事件を背負っていかねばいけない人間がいる。現に、野竿はその重圧に耐えきれずに自分を壊してしまった。蔵川の一件がなければ、彼が犯罪者になることはなかったのだろう。今までに経験したことのない極限のところに追い詰められ、伸ばしてはいけない方向に手を伸ばしてしまったんだ。そこに自分が無関係ともいえない。もしかしたら、間接的に自分が彼に犯行をさせてしまったのかもしれない。そう思うと、なんとも居た堪れない感情にやられてしまう。

「深く考えるな、若いの」唐木田はちょうど仕舞おうと手にしていた手帳で牛嶋の肩をパンと軽く叩いた。「お前の言うことは当たつとるけどなあ、だからって警察が関係者の全員が全員を見守ってやれるかといったら無理なことや。事件はいくらでも溢れんのに後のことまで逐一対応しとられん。こればかりは自分で線を区切つて、こつから先は関知いたしませんって決めないとな。体がいくつあっても足りんようになるぞ」

お先に、と唐木田は刑事課を後にしていった。

先輩刑事の言葉にある程度に心持ちがおさまった牛嶋も今日は帰ることにした。

翌日、安里市立第一中学校では全校集会が開かれた。そこには野竿や菜奈の姿はない、もちろん。校長からは事件の大まかな経緯と大まかな対応策が話され、生徒たちは静かにそれを聞いていた。全校集会が終わって教室に戻ると、さっきまで湧いてくる。無論に話題は野竿と菜奈のことだ。10分前の体育館での静寂さは事件への胸の痛みではなく、単に話の情報収集のためなんだと悟るのは簡単だった。

事件は昨夜18時半過ぎ、校舎裏にあるゴミ捨て場で起こった。女性の叫び声を聞いた卓球部の顧問が駆けつけると、そこには地面に倒れている野竿と口から血を垂らして視点が定まらないように座り込んだ四宮菜奈がいた。声を掛けてみると、野竿は気を失っている

て、菜奈はネジがはずれたように正常ではなかった。急いで救急車を呼んだが、野竿は失

神していただけで、菜奈も唇を切っただけで大きな外傷はなかった。警察の調べによると、

野竿は蔵川京介の逮捕から心身不安定の状態に陥り、好意をよせていた四宮菜奈に矛先が

向かってしまったようだ。野竿は菜奈が自分に惚れていると思い込んでいたが、そんなの

ただの勘違いでしかない。蔵川の事件が背景にあることを考えると彼も被害者であるとも

言えるが、だからといってこんな卑劣なことが許されるわけがない。野竿は強制わいせつ

の罪で逮捕され、懲戒免職の処分を受けることは間違いないだろう。1年2組の教室では生徒たちがまだガヤガヤと興味本位の話に盛り

り上がっている。四宮

菜奈の身体はどこまで汚されたのか、野竿はどこまで狂ってしまったのか。外野から

はやし立てられる騒音がやかましくてたまらなかった。千鶴は周囲のその言葉たちこそが

汚らわしくて狂っているんだと感じた。これまでよりも身近な存在にこれまでよりも身近

な場所で起こった事件をそんなふうに関心になんかできない。どうして、菜奈にこんな

辛いことが降りかからないといけないんだ。あの時、昨日の帰り際、なんで菜奈を一人で

野竿と行かせてしまったんだろう。私が着いていってれば、こんなことにはならなかつ

たのに。私のせいだ。私のせいで、菜奈に深い傷がついてしまった。そう自分に怒りの刃

を傾けることでしか千鶴は平生を保てずにいらなかった。せめて

自分に責任があるとしておけば、菜奈の傷が和らぐんじゃないかと思い込ませていた。

「失礼させていただきますよ」唐木田と牛嶋は低姿勢で部屋に入ってきた。こういった状況には慣れてるものだとすると、この2人は自分を精神的弱者であると踏まえてるのだろう。高級品や壊れ物を扱うように慎重な様子は狭い一室にピンと張っている。逆手に取れば、こちらがちよつと心労ぎみに俯いてさえいればペースはこっちのものだ。「この度のことは何と言っていいか……まさか、またあなたにこうやって話を聞くことになるなんてね」そう唐木田は息をつく。

四宮家に刑事が来たのは昼の14時過ぎだった。学校を休んでいた菜奈に話を聞くために彼らの方から足を運んだ。昨日は加害者の野竿からの話は聞いたが、被害者の菜奈には心身の不安定を考慮して取り調べは自粛していたから。菜子は菜奈の体調を心配したが、本人が大丈夫と承諾したので部屋に通した。唐木田と牛嶋から見た彼女の印象は典型的な被害者の姿だった。下を向き、目は細まり、覇気がなく、背中を丸めて無気力な様子を捉え、そこに何の疑いも抱くことなどなかった。それで既に目の前の弱者に手綱を握られているなんて思いも寄らずに。今日を日常としていることが、この事件を通常としていることが、この女の子を普通としていることが失敗だとも知らずに。人間を疑ってかかるべき



の警察がこんな初歩的な思い違いをしてしまうなんて、この世界もずいぶん平和になったものだ。

「昨日は眠れたのかな」牛嶋の言葉は捜査への取っ掛かりにも思えたが、その表情には実際に言葉どおりの感情が滲み出ていた。

「いえ、夜中はあまり……さっきは少し眠れましたけど」「そうか。じゃあ、答えるのは辛いかもしれないけどいくつか聞いてもいいかな」

「はい」刑事からの質問に菜奈は言葉を詰まらせながら答えていった。警察の捜査に協力するのは市民の義務だから、と弱々しくも持ちこたえる嵐の中の一本木のように芯を保ち続ける彼女の様子が唐木田と牛嶋は好意的なものを感じずにはいられなかった。こんな小さな身体を内側も外側も泥を塗られたのに折れそうにしっかりと佇む四宮菜奈に尊敬の念すら抱きそうになるほどに。こういった類の取り調べではシヨツクのあまり黙り込む場合や口ごもってしまう場合が多いのに彼女は強かった。その姿にはこういった場を何度と経験してきた唐木田さえ惹かれるものがあつた。

菜奈は昨日の野竿との一連のことを話した。野竿は四宮菜奈は自分に好意を持っていたと言っていたが、彼女はそんなことは全くと答えた。野竿に好意を持たれるような行動を取ったことはあるかと聞かれたが、そんなことはしていないと断言した。精神が病んでいた野竿とすぐ前で気丈に振る舞う菜奈、どちらの証言を信じるかは聞くまでもない。

正常な人間なら悩むことなく四宮菜奈の味方へつくはずだ。そして、ここにいる2人の刑事もその枠を外れてはいなかった。

野竿を絞めて失神させた人間については彼女も視界に入っただけしか把握しておらず、

その中で考えるなら20代の男性ではないかと示唆した。時間帯を考えると近所で誰かし

らに目撃されてしまった可能性もあるが、当時は気が動転していたからと言えば警察も相

違を認めてくれるだろう。当人を追っても本人から名乗りでることはないし、本人まで辿

り着く痕跡は一切残していないので無駄足といえる。被害者を救ってあげたが警察にあれ

これと聞かれるのが嫌でそのまま姿をくらます人間もたまにいる、と唐木田も理解しているようだった。

「では、今日はこのへんで帰ります。おそらく無いでしょうが、もしかしたらまた話を聞くことがあるかもしれません」おそらく無い、と言ったのは菜奈の証言に疑いがないと悟っていたからだ。完全に彼らは彼女の手の上で転がされる結果に終わった。

2人が部屋から出て行くと、菜奈は緊張から解放されて気を落ち着かせることが出来た。

多少の脚色をしたが、警察は全くもって怪しむ気配はなかった。勝利を確信すると、握り

拳を作って上歯で下唇を噛みながらフツと笑みを浮かべた。

見たことか。所詮、大人なんてこんなものだ。

林田千鶴がお見舞いに訪れたのは夏場ではまだ陽の滲みが見えは

じめる夕方の16時半

ごろだった。彼女は部屋に入ってくるなり、急ぎ足で菜奈に駆け寄った。部屋の中じゃあ

急いでも2、3メートルの距離しかないのに。そこまで心配してくれてるということだろ

うが、はつきりいつてウザったいだけだ。

「菜奈あ」そう千鶴は菜奈を抱きしめる。「大丈夫だからね。もう怖くないからね」

「ありがとう……嬉しいよ」菜奈も千鶴の背中に手をまわした。

「ごめんね、私が昨日菜奈を一人で行かせたからこんなことになって」

「そんなことないよ、千鶴のせいなんかじゃないから」自己嫌悪に陥っていた千鶴を逆

に菜奈がなぐさめた。彼女は事件の一報を聞いて以来、ずっと自分に責任を押しつけてい

たらしい。実に彼女らしいといえるが、正直いつて真相が分かっている菜奈にとって今回

の件に彼女のことなどどうでもよかった。勝手に自分を沈めて勝手に落ち込んでればいい。

彼女には嗜好きの学生たちが積もらせていった大げさな偽話が伝わっているんだろうし、

どうせ。真実は野竿に一度抱きつかれただけなんだから、別に皮膚が腐るわけでもないし、

悪玉の病原菌に侵されるわけでもない。お祭り好きが適当に騒いでるだけだ。

何分か、その姿勢を続けていると千鶴もだんだんと落ち着きを取り戻してきた。彼女は

変に正義感が働きすぎる。こと菜奈の事になると、そのシステムは作動しやすい。林田千

鶴は一言で表すのなら弱者だ。髪型も梳かしているだけで、制服も規定どおりのものを着ている。勉強も平均以下、運動神経は音痴で片付けられ、おまけに黒縁のメガネを掛けている。団体の中に入れば、明らかにその集団の足を引っ張ることが請け合いだ。彼女自身もそれは認識していて、よく「私なんか……」とネガティブなことを言い出すから余計に厄介だった。人の妨げになるくせに人の近くにいたがる。嫌われ者の典型のはずの千鶴が学校で浮かないでいられるのは四宮菜奈のおかげといえた。明瞭快活で才色兼備、その両方を持ち合わせる中学生は少ないだろう。菜奈はそれでいて控えめでもあり、他人の反感を買うことなどまずない。むしろ、蔵川京介のように好感をもつのが常といえる。

その四宮菜奈の側にいることで林田千鶴は自分の居場所を確保できていた。菜奈と友達でいることが彼女の鍵であり、それが誇りに近いものを自分に与えてくれていた。こんなに素敵な友達が自分にはいるんだ、というのが彼女自身の自信にも繋がって。だから、この繋がりは千鶴の中で絶対のものとなっている。菜奈が自分に与えてくれるものと釣り合えるぐらいのものを彼女にも与えてあげるには人一倍に彼女のためになってあげないといけない、いつも自分の力になってくれている菜奈の力になってあげないといけない、という思いで。

「寝てないでいいの？」菜奈はベッドで漫画本を読んでいるとこ

るだった。

「うん。かえって、布団にくるまってるといういろいろ考えちゃうから。こっちの方が気が紛れていいんだよ」本当はさっきまで太宰を読んでいたのを漫画に変えたばかりだ。

「ふうん、そういえばそうだね」バカは自分より勝っている人間の行動を疑わないからやりやすい。

千鶴から今日の学校での事件の反応について聞いた。やはり、学校側からは事件の深い部分は隠され、生徒たちはそこに興味を持って様々な憶測を事実のように脚色していた。

まあ、関係のない人間たちはやりたいようにやっていたればいい。

「皆して言いたいこと言っちゃってさ、菜奈の気持ちも考えないで」千鶴はクラスメイトの対応が気に入らなかった。普段は人を疑わない彼女が嫌悪感を募らせている姿は滑稽に思える。彼女の中で一般大衆への正義感を四宮菜奈への正義感に上回った結果、それでいい。

「いいの、皆は直接関わったわけじゃないんだから実感がないんだよ」

「そんなこと言ったって、なんか他人事みたいなんだもん」こんなに憤りを表に出すのは珍しいことは千鶴自身が感じていた。それでもいいんだ、と自分に言い聞かせる。これは菜奈のためなんだから、と。

「私なら大丈夫だから。皆のことは責めないであげて」菜奈は千鶴の手をとって諭すように伝えた。その行動は千鶴の心を奮わせる。この子はあるな目に

遭ったのに、どうして他人のことをそんなにかばえるんだろう。普通の人間ならば、何もかもが嫌になって他人のことなんか蔑んでしまふに違いないのに。おそらく、自分だって同じような目に遭っていたならそうしてしまうだろう。なのに、四宮菜奈は違う。一体、どれだけの優しさが備わっているんだろう。あれだけの事件があっても、彼女の優しさは失われないというのか。同級生を怪訝に思ってしまった自分が卑しく見えるほど、彼女は素晴らしい人間だった。

それ以上、もう千鶴から事件のことについて話はしなかった。話せば話すほど自分が嫌な人間に思える気がした。こういう淵に立たされた時にこそ人間の本性は出るのだろうが、それは全くもって対称的になった。四宮菜奈と林田千鶴の人としてのグレードの差が露呈されたようで仕方なくなり、これ以上に自分をおとしめるようなことはしたくなかった。

3日後、菜奈は安里市立病院に行った。野竿との事件があつてからは初めてだったので、全員が心配してくれた。貞男はこういった事を自分から言うと思えないので、患者から伝わったのだろう。

「もういいのかしら」こうやって外に出ても、という意味で下越は言った。

「はい、気分転換に犬の散歩には毎日出てたから」愛犬のプードルの散歩は菜奈の役割だった。さすがに事件の当日と翌日には菜子が行ってくれたが、一

昨日からはまた菜奈が

行くことにしていた。そして、今日は少し遠出をして病院まで来ることにした。「明日から学校も行きますし」

「いろいろ悩む事はあるかもしれないけど、そんな時は私を頼ってちょうだいね」力になるから、と下越は力強く言ってくれた。これまで数えきれないほどの患者を勇気づけてきたであろう彼女からの言葉は信頼できるものだと思えた。場数や経験による充実というものの重要度を思い知らされる。

「何と言っていいのか……ねえ」それに比べ、福笑いのこの対応の薄っぺらさは笑い出したくなるくらいだ。経験不足ではなく人間の質によるものであるのは明らかに分かりえた。看護婦だったら、もっと嘘でも相手を前向きにさせる言葉の一つでも言えないのだろうか。

「まあ、いろいろあると思うけど……私にできる事があればするから言って」  
下越と同じ事を言ってるのに聞こえ方が違うのは人徳というものだろう。

「ありがとう、気持ちだけ貰っとくからそんな心配しなくていいよ」こう返しておけば、まあ取り合えず安心するんだろう。

翌日、菜奈が登校すると感じた事のない空間があった。周囲は菜奈の姿を捉えては小声で何やらこそこそと会話をしている。クラスメイトだけでなく学校で擦れ違う生徒のほぼ

全員がそうだった。わざわざ他の学年から1年2組の教室に来てはやし立てる心ない奴も

いるし、こちらに聞こえるように下品な言葉を言い捨てる奴もいた。下駄箱や机の中には

性交を希望するイタズラな紙切れが入っているし、男子トイレには

「四宮菜奈が欲しい人

はこちらまで」と菜奈の電話番号ごと落書きされていたらしい。居心地は最悪だったが、

こんなことは初めから分かりきった反応でもあった。このぐらいは上等だし、覚悟の上で来ている。

林田千鶴が登校の時からずっと隣にいてくれたのは助かった。いくら腹をくくっていた

といえど、さすがに12歳には心に刺さる行為が多かったから。想像はしていたけれど、

実際に味わってみると屈辱的な行為だった。感情の針が振り切れて、何人か病院送りにし

てやろうかと思ってしまった。思ったところで踏み留める。こんな子供だましなんかで、

せつかくの計画を台無しにするわけにいかない。

「菜奈は強いね。尊敬しちゃうよ」昼休み、職員室に向かう時に千鶴が本心をもらした。

朝から多くの視線にさらされながら、これまで通りに明るく振る舞う菜奈の姿に彼女はた

だ感心するばかりだった。もしも自分がこんな目になったら、きつと一時間目が始まる前

に逃げるように帰ってしまうはずだ。それなのに、菜奈は全ての圧力に耐えて、なおも笑

顔を浮かべることまで出来てしまう。その内なる強さを目の当たりにし、一層に菜奈を守



つてあげないといけない使命感に駆られていく。

「全然だよ、何回もヘコたれそうになってるし。ホントに千鶴がいてくれるからだって。

感謝、感謝だよ」そう言い、菜奈は千鶴と腕を組んだ。それがまた千鶴の心に火をつけていくのだった。

職員室に入ると、見慣れない後ろ姿に声を掛ける。彼女はこちらを向くと、「あつと、

来た来た」と低めの声を発した。昨日から新しい1年2組の担任として赴任したらしい、

穂村という50代の女性だ。野竿はあっさりと免職になった。警察が野竿の家を調べたと

ころ、無数の女子中学生と女子高生の写真やそういった類の映像物が発見された。しかも、

その写真には安里市立第一中学校の女子生徒のものも多く含まれ、特に四宮菜奈のものが

多かった。本人はそんなものは知らないと否定している、それはそうだ。故意的に野竿の

家に仕込んだんだから、奴のものではないし、奴が知っているはずがない。だが、そんな

言い分を誰が信じるだろうか。ここまで洗い出されてしまえば、もう同情の余地はない。

野竿はただの変態男として盗撮も加えた刑罰を受けて、その後のどうにもならない人生を送っていくだけだ。

生徒を一度だけ抱きしめただけなのに、可哀相に。

穂村という女性は、外見も服装も年齢の通りで母親というより祖母という印象だ。学校

側は野竿とは正反対の教師を選択したのだろうが、穏やかそうで芯も持っていそうな女性

にみえる。このタイプは騙しにくいだろうと思う。良い生徒の印象を植えつけさせておくのが無難だろう。

「どうかしら、気分は」

「はい、大丈夫です」

「何か周りから嫌な事を言われたりしてない？」

「いえ、平気です」あえて、平気ですと言った。本当は嫌な事をされているけれど、私

はそれを我慢しているというさりげないアピールだ。こつやって、穂村にも少しずつ四宮菜奈の上辺を浸透させていく。

「そう。初めは辛いかもしれないけれど、徐々にまた元通りになつていくと思うから。」

相談事があるようなら、いつでも私のところに来なさい」穂村の器の大きさが窺えた。今の言葉に嘘は感じられなかったから。

「はい、ありがとうございます」菜奈は口角を上げ、そう言つて職員室を後にした。

「なんかさ、良さげな先生じゃない？」穂村とのやり取りを隣で聞いていた千鶴も彼女に好印象を抱いたようだ。

「うん、そうだね」味方しておくのがいいだろう。ああいうタイプに足元を見られると厄介な事になりそうだ。

居心地の悪い一日が終わると、部活には出ずに千鶴と帰ることにした。部活に出るだけの気力がなかったわけではないが、ここは帰っておいた方が悲劇のヒロインを演じるには合っているはずだ。予想通りに周囲は自分のことを哀れな女という

目で見ていた。それでいい、馬鹿野郎はそう思うはずだから。私を見下した眼差しで見てる奴らは、それが私の

思うままに動いてることだと知らずに上手になった気味でいるだけだ。頭の錯覚だ、お前らの。私がもっと上にいるとも気づかずに。

「あれえ、奇遇だなあ」気づいた時にはすでに周りを数人に囲まれていた。制服ですぐ

にウチの生徒であるのは分かったが、誰一人として知ってる顔はない。外見で分かるのは

いわゆる不良グループにいそうな奴らということだ。

「俺、君のこと知ってるよ」4人の相手の集団の一人が言ってきた。その言葉の意味も把握できた。

「ほら、先生にイタズラされちゃった子だよねえ」別の一人が言ってきた。やっぱり、

野竿の事件に便乗して悪巧みを働こうとしているようだ。こういう救えないゴミが本当に

いるから困る。やってはいけない事を理解してやる人間。しかも、他人がやった事に乗っ

かるだけの浅知恵で動くだけの人間。どうして、こんな陳腐な奴らにも自分と同じように

赤い血が流れ、同じような権利が与えられているのか分からない。

そんなの平等でもなん

でもない。命の無駄遣いだ。もっと他の生きたいと強く願っている人たちに与えてあげるべきだ。全くもって不平等。

「ねえ、俺らとも良いことしようよ」別のもう一人が伸ばした手が菜奈の右手を掴み、

それをすぐに振り払った。男は怒りはせず、クククツと汚い笑みを浮かべる。「野竿なん

かと遊ぶより俺らと遊んだ方が十倍楽しいよ」そう言い、今度は強く手を引かれた。男の体に無理に引き寄せられると、別の男も後ろから被さるようにしてくる。

「ちよつと、やめてください」千鶴の声の方を向くと、彼女も別の二人に抱き寄せられるようにされていた。異性に対する免疫がない彼女は抵抗すること出来ず、為されるがままという様子だった。ここでは頼りになりそうにない。

「誰かあ！」千鶴が使い物になりそうにないと悟ると、菜奈は大声をあげた。人通りの少ない場所とはいえ、中学生をビビらせるには十分の行動だ。

「見つかったらやべえぞ」目の前の男4人は急に動揺をはじめ、誰からともなく逃げると口にしていく。さっきまでの厚かましさは陰を潜めていたが、女にやりこめられるのが気に入らなかつたのか、男の一人が菜奈を睨むと思いきり平手で殴りつけた。そのまま、捨て台詞を吐く事もなく4人は逃げて行った。

「菜奈、大丈夫？」千鶴が側に来てくれたが、初めての事に彼女も放心ぎみだった。あんなふうに男性に抱きしめられたこともないんだから仕方ない。心配してくれてはいるが、きっと彼女の中では複雑に混乱していることだろう。

「逃げるよ」菜奈は千鶴の腕を取り、ダッシュで走り出した。大声をあげてしまったので、誰かが助けに駆けつけるかもしれない。それはまずい。こちらの意図しない形で注目を浴びるわけにはいかない。あんな最低な奴らのために自分の居場所を下げられはしない。

そう、一心に走り続けた。

5分ほど走っただろうか、小さな公園に辿り着いた。2人とも大きく息が切れていた。

こんなに集中して走ったのは久しぶりだと思う。授業や部活で走るときは多少の手抜きはしているから。

「菜奈、大丈夫？」そう言ってきた千鶴の方が息が切れていた。言葉も途切れ途切れになっっている。

「大丈夫だよ。そっちは？」

「私も大丈夫」

「ごめんね、私のせいで千鶴までこんな目に」

「気にしないでよ。私なら平気だから」やせ我慢で言ってるのは分かった。笑っている

のが作り笑顔なのも分かった。異性とろくに口もきけない人間があるなことをされて平気なわけがない。

菜奈は千鶴をギュツと抱きしめる。「さっき、千鶴を抱きしめたのは私だから」悪い夢にならないよう、そう言って抱きしめた。千鶴はありがとうと言って、菜奈に同じようにした。

「ねえ、さっき私を殴ったの誰だか分かるかな」肩越しに菜奈が聞いた。

静かな空間には静かな時が漂う。テレビもつけておらず、2LDKの部屋には一切の音

も映像も流れない。電気がついてるのは自分の部屋だけ、それも予め明度は落としてある。

静けさは好きだ。余計な汚物は瞳に入らないし、不必要な音も耳に

入らない。湖の魚とは

こんな感覚なのではないかと思う。強い流れの変化もなく、気の赴くままに自分の時間を

過ごしている印象がある。幸せだろう、そんな日々を送れるなら。ただ、自分には違う。

やらなければならないことがある。あの日、あの時から自分へと課せられた使命。それを

全てやり遂げるまでは自分には安住などない。

窓ガラスに映る自分の顔を眺める。物悲しげな様相は周りの夜景と合っていた。まだだ。

まだ、始まったばかりだ。気を確かにもち、そのときを待つんだ。そう考えてるうちに携帯が鳴った。公衆電話からの着信だった。それでも、誰からのもの

のであるかは分かりえた。「はい」

「もしもし、私」その高い声がくすぶりそうな心をさつすりとは撫でてくれた。専門家の

紹介する下手な方法よりもよっぽどこの心を落ち着かせてくれる。

「どうした」

「計画外の事なんだけど頼みたい」

「何を」

「ちよっとさ、やつちゃってほしい奴がいるんだけど」

「誰を」

「安里市立第一中学校、3年3組の伊都」知らない名前だった。

「どうして」

「野竿の件に乗っかってきて、身体を触られた」理由には十分だった。

「分かった」そう言い、携帯をきった。伊都という見たこともない初耳の名前に憎悪が

激しく湧いてくる。目をむいて、パソコンを叩くように打ちながら標的のデータを集めた。

夜、23時28分。標的は繁華街を集団で歩いていた。似通った人間が仲間をつくり、

こんな時間まで共にいる事で友情を育んでいるのだらう。そんなものに興味はない。そんなもの、とつくに捨ててきた。未練は欠片もない。一つきりの繋が

りさえあれば、どんなものもくれてやる。何にでもなるし、どんなこともする。そう、どんなことでも。

1時間後、標的は集団から離れて一人になった。ようやく家に帰るのだらうが、残念な

がら帰路は途絶える。男は一本道をジグザグに歩いている。道には誰もいない。周囲へと

目を配らせるが何一つの視線もなかった。ターゲットを焦点に定めると、跨ったバイクの

スピードを上げていき、そのまま男へ突っ込んだ。人間の感触を携えたまま、止めること

なくバイクを進ませる。ミラーで男を確認する、横たわってピクピク小さく動いていた。

このぐらいでいいだらう。別に殺すつもりはない。

「菜奈……」翌日、教室に入ってきた千鶴が青ざめたよ

うな顔で言った。何が起こったのかという顔をしたが、何が起こったのかは知っている。

何も知らない人間に合

わせて、そうしてみせる。「驚かないで聞いてね」

「何かな」少し机に身を乗り出してみる。興味がある、という姿勢を表す。

「昨日、私たちにちよっかい出してきたグループいたでしょ」

「うん」

「そこで菜奈のこと殴った伊都って人、いたでしょ」

「うん」その名前は千鶴から聞いた。殴られた時は殴り返してやろうかと思っただけ、

思い留まらせた。仕返しの手立てはいくらでもある。わざわざ、その場で返す必要はない。

「その人、昨日の夜にバイクにひかれて入院したんだって」

「えっ、どうして」菜奈は大きく動揺する素振りを見せた。おそらく、千鶴が想像して

いたとおりのリアクションだっただろう。

「理由とかは全然分かんないんだけど、何箇所か骨折してるみたい」症状までは知らない。骨ぐらい何本か折れてればいいかと思っていたので良好の結果といえた。

「そうなんだ・・・何て言ったらいいか、だね」そう千鶴と視線を合わせた。事

故については痛ましいものだが、伊都に昨日あいう目にあわされた事を思えば同情する

こともない。ざまをみる、それに限る。菜奈は心で伊都の不幸をあげ笑った。



## 第4話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

豊永一弥・とよながかずや（完璧な外見を併せ持つて女性からの強い支持も持つ）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

## 第4話

真実は嘘に塗り替えられる。

この世には無数の嘘がはびこっている。

嘘が真実を追い抜き、我物顔で社会の中に潜んでいる。

嘘をつく人間がいる。嘘を思いつくが消す人間がいる。嘘をつかない人間もいる。

真実を隠す人間がいる。真実を隠さない人間がいる。真実を知らない人間もいる。

人は嘘をつき、嘘をつかれる。

自分の嘘はバレてないと思い、つかれている嘘には気づかない。

人は真実を隠し、真実を隠される。

自分の真実は隠しとおし、隠されている真実には気づかない。

結局、自分の都合でしか生きていない。

人は嘘をつく事が好きで、嘘をつかれるのが嫌いだ。

矛盾の連鎖、それがまた新しい嘘を生んでいく。

人は真実を隠したが、真実を隠されるのが嫌いだ。

矛盾の連鎖、それがまた新しい嘘を生んでいく。

所詮、自分の都合でしか生きていない。

嘘と真実の境界線は人それぞれだ。

嘘が己の大多数を占める者もいるし、逆もあるだろう。

嘘のような真実もあるし、真実のような嘘もある。

他人から見れば、その境界線は曖昧でしかない。

本人にしか分からない。嘘と真実なんて、そんな不安定な境目で

しない。

私の嘘を知っている人間は一人しかない。

私の真実を知っている人間も一人しかない。

それでいい、それだけでいい。

一人だけが私を知っていてくれていればいい。

だから、あなたの嘘と真実も私だけに……。

「ごめんね、なんか着いて来てもらっちゃって」右隣を歩く千鶴はやけに浮き足立っていた。声も浮いてるし、顔もほころんでいる。

「いいよ、私も見てみたいから」千鶴の王子様、と言うと彼女は怒ったようにした。実

際に怒ってないのは分かる。ただ、からかわれて恥ずかしさの行き先をそうしただけだ。

彼女はとても分かりやすい。それが長所であって、欠点でもある。

純粹と表現すれば聞こ

えはいいが、正直付け込むのは簡単だ。最近の連続事件で人を疑うこともし始めたが、私

を疑うようなことはない。全幅の信頼を置いている。それが仇になるとも知らず。最初か

ら疑ってあればよかったと嘆いても後のまつりでしかないのに。

今日は千鶴と遊ぶ約束をしていた。期末試験も終わり、1学期も答案返却日と終業式を

残すのみとなっていた。中学から始まった試験は面倒くさいものはあったが、こうした

試験休みがあるのは悪くない。部活も休みになった休養日を有意義に過ごすそうと試験の時

から計画を立てていた。とはいえ、ウィンドウショッピングで店を回ったり、ファミレス

で食事をして喋ったり、少ない小遣いでやりくりする中学生の定番的コースを忠実にこな

したメニューに落ち着いただけだが。

ファミレスでは談笑が常だったが、この日はここ最近で起こった事件の話になった。こ

こ一ヶ月ないほどで、あれだけの事件が身近に起こった。そういえば、近頃あまり心から

笑えてないという話からポジティブな話をしようと提案があがった。すると、千鶴が「実

を言つと」と話をはじめた。彼女の話は好きな人ができた、というものだった。菜奈はそ

の話に飛びつく。あくまで、興味のあるフリだ。彼女の好みは分かっている。顔立ちのい

い細身の男、要はミハーだ。好きな芸能人はアイドルの名前が拳がっていく。自分の顔

を鏡で見ても、とアドバイスしてあげたい。憧れは勝手だが、身分不相応という言葉も

知っておいてくれればと思う。

菜奈は千鶴のまるで彼氏へのノロケのような話を聞いてあげた。

無論、付き合っている

わけもないし、付き合える見込みもないし、相手は千鶴の存在すら把握していない。それ

なのに、ここまでのめり込んで自分のもののように話せるのは一種の才能かと誤ってしま

いそうになるほどだった。よくも一方的な想いでこんなにも話を膨らませるな、と。相手

に行き着くまでに想像で相手を都合よく創り上げてしまい、しまいに想像とのギャップを

感じたりするのだろう。幸せなものだ。

千鶴の話を散々に聞かされた後、菜奈はその人を見てみたいと言

った。千鶴のハートを射止めた王子様を私も見たいと言うと、彼女はまんざらでもない様子でしようがないなあ  
と了承した。別にお前のもんじゃないだろう、とは心の中だけに留めておいた。彼女の気分がよいようにしておく。錯覚をする女の惨めさを教えるのは今じやなくていい。

行き先は安里市立第四中学校、第一中学校からは徒歩で30分の距離にある。築年数の差で四中の校舎は一中よりも新しかった。色合いも単調じゃなく、こうした差を目にする  
と負けたような思い違いが生じてしまう。敷地内に入るのは簡単だった。私服だったのが  
逆に幸いとなり、試験休み中に生徒がふらりと立ち寄ったような印象を与えていたようだ。

目当ての相手は運動場にいた。サッカー部で1年生ながら期待のエース、長身で顔立ち  
もいいというありふれた王子様だった。運動場を囲むネットの裏には練習を見守る女子が  
数人いた。菜奈たちと同じようにしてここまで入って来たようだ。彼女たちの狙いも一緒  
であり、千鶴が以前にここへ忍び込んだ時にもこういった女子たちがいたらしい。

「菜奈、あれっ、あれだよ」そう千鶴が指した方を見てみると、それらしい人物は一発  
で分かった。周りのごく一般的な中坊とは醸しだすものが違っていて、それは体つきにも  
発する気のようなものにも表れている。なるほど、見た目なら10人の8人が9人は心を  
奪われるものだろうと感じれた。千鶴レベルの心ならあっさりと持

っていくはずだ。

「確かに。格好いいね」

「でしょう。ホントに非の打ちどころがないのよお」千鶴の目は完全に奪われていた。

その視線の先で、男はこちらを気にする様子もなく練習に集中している。こうやって女子に見られることには慣れてるようだった。

そのまま、何をするでもない基礎的な運動を2時間見続けた。練習終わり、ネットの裏

にいた女子が名前を呼びかけると男はこちらを見て笑って手を振った。それだけで、千鶴を含めた女子たちは収穫を得たような喜色に包まれていた。芸能人とファンのような関係

に映った。身近な分、より現実的なのがまた効果的になるのだろう。男の名前は豊永一弥、四中にすごいイケメンがいるという噂は流れ流れて千鶴の耳にも

伝わった。恋に大きく興味を抱く年頃の女子たちには恰好の話題になり、千鶴もその通り

に行動を起こした。四中までその噂を吟味しようと出向き、即そこで恋におちたらしい。

既に何人かが彼に告白したが、まだ誰のものにもなっていないようで、それがまた薄っぺら

な女どもの心を泳がせていた。

「どう？ 豊永くんの感想」千鶴の瞳が輝いていた。野暮ったい黒メガネを通して見る  
と濁って映るのが面白い。

「言っただじやんか、格好いいって」どうせ、こう言って欲しいんだろう。四宮菜奈から

そう言ってもらうことで自分の目は節穴じゃないと思ったの  
だろう。

「好きになっちゃいそう？」

「そんなことしないよ。千鶴の王子様でしょ」そう菜奈が微笑むと、千鶴も微笑んだ。

警察署の一室で牛嶋はビデオ映像を眺めていた。再生し、早送りし、首を傾げる連続、

それしかなかった。何度見ても新たな成果はなかった。ないと分かっていながら見て、ない事

に打ちのめされるだけだった。頭をボサボサに掻き、帰ろうと立ち上がると後ろに唐木田

の姿があった。「どうしたんですか、こんな時間まで」

「いや、ちよつと忘れ物をしてな。そしたら、お前の荷物がまだ置いてあったから気に

なつてな」夜の22時40分、この日の仕事はとくに終わっていた。「お前こそ、何を

こんな時間まで見てたんや」

「市立病院での連続殺人事件ですよ。病院の監視カメラの映像を見返してたんですけ

れどね。何も出てきやしません」事件当日の安里市立病院の監視カメラの映像は事件当初

から数えきれないほどの回数を見てきた。そして、そこがこの事件を鍵を握るポイントの

一つでもあった。一つ目の佐藤太吉の事件の日は21時2分、二つ目の野戸平蔵の事件の

日は25時20分。いずれも、犯行時刻と思われる時間帯に監視カメラの映像が途切れて

いたのだ。病院に設置されていた、出入口、新生児室、地下室の監視カメラのうちの計

5箇所の出入り口の映像が遮断されていた。犯人が通過する姿を見られないためにやった

のは間違いないはずだ。5箇所のカメラを停止させたのはどこを通ったのかすら特定せずには推理を難航させるためだろう。これによって、大きな手掛かりになるはずだった映像が期待はずれになってしまった。しかし、これまで同様に腑に落ちないところもあった。

5つのカメラがほぼ同じ時間に遮断された事を考えると、手動で電源を切られたとは思えない。5人の犯人がいてそれぞれのカメラを切った、という説は可能性が低い上にあまりにもリスクが高いといえる。新生児室と地下室の電源は生きていたので同時に故障したとも考えにくい。「一体、どうやって犯人は監視カメラの電源を止められたのが全くつかめないんですよ」

「ああ、そのことが。まだ気になってたんか」唐木田は後頭部をポリポリと掻き、息をつく。解けなかった謎の糸は刑事にとって汚点といえた。そんなことは気にしていたら体がもたないといえど、刑事としてのプライドに引つかかってしまっているのは仕様がな。長く経験を積み、多くの現場を重ねてきているからこそ尚更だ。

「やはり、ハッカーと考えるのは過ぎるんでしょうか」これが犯行をこなすには最もスムーズな行為だった。ハッキングによって5つのカメラを遮断する事が可能なら、誰かに見つかる危険を伴わずに映像を切ることができる。ただ、それは現実感がなくつじつまが合わなかった。蔵川親子にそんな技術があったのか、ということだ。学校の成績は褒めら



れたものではない京介に警備の仕事だけで過ごしてきた築介、あの2人にそれほど知識

があったとはお世辞にも思えない。蔵川の家にはパソコン本体もないし、そういった関連

の本なども一切ない。どう蔵川親子を高くみても、ハッカーであるとは考えられない。

「まあ、その線は無理やろな。あの親子にそんな素質はない」実際に蔵川親子に取り調

べをしても2人はパソコンをしたこともないと言った。嘘ではないだろう。白を切ってる

ようにも見えなかった。あの2人は本当にパソコンのPの字も知らない。

「だとしたら、一体どうやって……」そこがどうしても謎で最後まで解く事が

出来なかった。この事件には別の解答がある気がしてならない。不快な部分がいくつも残

されている。このまま、あの親子に刑罰を科していいのだろうか。現場の証拠品や当日の

アリバイは確かにそう示しているが、何か違うんじゃないだろうか。胸につかえるものが

拭いきれず、厄介にそこに居続けている。

「あの親子が犯人じゃないかもしれないかもしれんとは俺も思ってる。刑事の勘でしかないけどな。

けどな、あの親子以外の証拠は全くない。それじゃ、上は聞く耳も持たん。蔵川親子は犯

人として裁判の判決を受けなきゃならん。理不尽やろうが、今までそんな事件はいくら

でもある。先輩刑事として諦めろとは言えんけど、これ以上に劇的な進展はないやろう」

もしかしたら、あの2人は犯人ではないかもしれない。でも、法律

国家で生きてるからには己の気持ちだけではどうにもならないこともある。他に真犯人がいたとしても、ここまですべて完璧に犯行をしてやらかす人間がここから手を滑らしたと証拠をホイとこちらに零すよ。うなことはない。悔しいのは唐木田も牛嶋も同じだった。

「菜奈、今年もお盆の過ぎあたりに行くからよろしくね」朝食の途中、菜子がそう切り出してきた。何の事を言っているのかはすぐに分かった。四宮家は毎年お盆の頃に富士の別荘に旅行に行くのが恒例行事になっている。貞男は病院に無理をいっても1泊か2泊ぐらいの休暇がせいぜいなので、菜子と菜奈の2人はゆつくりと5日から7日ほどは宿泊していくのが毎年の事になった。別荘とはいってもレンタルだが、3人が1週間滞在するなら充分だ。

「やったあ。楽しい」菜奈は両手を上げて小学生のように喜びを表した。家族旅行をこれだけ楽しみにしてくれれば連れていく側も喜びに満ちる。人形をあやすように可愛がつていた頃に比べれば容姿もだんだんと整ってくるが、精神的にはあの頃と変わらず家族を大事にしているというアピールだ。それにより、両親は娘を変わらぬ愛情で包み込む。娘がどれだけ変わっているとも疑わずに。「パパ、休みもらえるの？」

「どうだろうな、なるべく休めるように掛け合ってみるよ」夏になると学生は休みにな

り、お盆には会社も休みになって病院は混雑する。そこが過ぎれば幾分か楽にはなるが、

副院長というポストもあって僅かなら休日は取れる。まあ、今年に關していえば問題はな

いだろ。あの連続殺人事件で市立病院を敬遠する人も多いはずだ。例年に比べれば、そう難しくなく休暇はもらえる。

「その前に菜奈は合宿があるのよね」

「うん、来月の頭かな」菜奈の所属しているバドミントン部の合宿が毎年長野であり、

菜奈や千鶴も参加することになっていた。合宿といっても、強豪と呼べるチームではないので割と仲良し旅行のような感覚で行っているらしい。

「いいわねえ、菜奈はたくさん旅行に行けて」

「いいでしょ。その代わり、家族旅行は最高に楽しくしょね」菜奈の言葉に両親は

につこりと笑みを浮かべた。

お気楽様、どんなに素晴らしい旅行になるとも知らずに。

「菜奈っ、ニュース、ニュース」期末テストの答案返却日、数日ぶりに1年2組の自分

の座席にいると千鶴が教室に入ってくるなりに目を輝かせて来た。

「四中とウチのサッカ

ー部が練習試合するんだって」

その言葉で彼女の主張したい事は把握した。例の想いを寄せている豊永一弥を見に行け

る口実ができた、ということだろう。「へえ、よかったじゃん。どこでやるの」

「ウチの学校で。5日後の水曜日だって」

「ふうん」

「ふうん、つて。見に行くんでしょ、菜奈も」

これだから自分が見えない人間は嫌だ。他人の意思など関係なく自分と同じ意識なのだ

と思い込む。「見に行かないよ。部活でしょ、第一」

「あつ、そうかあ。しまった」

「ウチで試合やるんでしょ。サボって見に行ったらバレるよ」

「ええつ、どうすればいいの」

こいつは天国と地獄がずいぶんと近くにあるんだな。そんなに行き来してたら疲れるだ

ろくに。その無駄な労力をもっと有効に活用すればいいのに。「手紙でも書いてみれば。」

渡すぐらいの時間なら練習抜けられるんじゃないかな」

「手紙……つて、何書けばいいのよ」

「あなたのことが好きです。好きで好きで夜も眠れません。あなたさえいれば、何もい

りません。私の王子様、つて」

「そんなの書けるわけないでしょ。絶対、嫌われちゃうじゃん」

分かってんじゃないか、嫌われるつて。だったら、高望みしなけりゃいいのに。「せつか

くのチャンスなんでしょ。アプローチしてみようよ。私も協力するからさ」

「でもなあ、私なんか全然ダメだし」

出たよ、ネガティブ。あれだけ盛り上がっておいで、いざ現実味を帯びてくると背中を

向ける。典型的な根無し女だ。「恋してる自分に臆病にならないの。どうなるうとも一生

懸命にやることに意味があると思うよ。それで自信になるし、自分のことが好きになれる

から。応援するからやってみようよ」

「菜奈……」

「大丈夫。かわいいよ、千鶴は」そう言つて、千鶴の頭を撫でてあげた。彼女は菜奈の言葉に強く感動していく。嘘っぱちの言葉なのに。相変わらず簡単な奴だ。

それから千鶴と手紙の文面を練つていった。その間、菜奈は教室をくると見回した。

野竿との事件から時間が経ち、ようやく周囲の目も薄れてきた。とはいえ、事件を知つて

いる人間の自分を見る目は変わらないだろう。これまでは良いクラスメイトという認識を

していたのが自分より人間として価値の劣る女という見方になつているはずだ。一度植え

つけられた印象はそうそうたやすく変わるものではない。おそらく、この学校を卒業する

まではそれが続くだろう。

そう思つておけばいい。物事を上辺でしか捉えられない愚かさにも気づかないまま。

「そう。また今年も旅行に行くのね。いいわねえ」放課後に病院に顔を出すと下越がいたので家族旅行の話をした。

「そういうことなんで、パパにお休みあげてくれると嬉しいなあ」

「そんなこと言われてもねえ。私の一存で決められないから」なあんだあと菜奈が頬を

ふくらますと、子供みたいと下越が笑った。もう何年も変わらない光景だった。市立病院

のスタッフ全員がこうして菜奈を妹や娘のように見ていた。全て菜奈が数年間かけて蓄積

させてきた成果だった。小学生になる前後あたりからここに入り浸るようになり、やがて

父親のような医者になりたいという希望を掲げて多くの医学の勉強に励んできた。病院のスタッフの誰もが菜奈の夢を応援し、彼女からのありとあらゆる質問に丁寧に答えていた。

それにより、菜奈は普通の12歳では知る由もないレベルの医学の知識を手に入れることが出来た。

安里市立病院にすることで、病院の仕組みや構造や時間割から患者への接し方など実践的な内容も多く知りえた。はつきり言って、即戦力として働く自信すらあるほどだった。

「いいなあ、別荘なんて行ったことないよ。金持ちは違うねえ」  
横入りしてきた福笑い程度ならあつさり抜いてやれる。こんな体たらくに負けるなら死んだ方がマシだ。

「金持ちじゃないし。年に一度の贅沢だから」

「そうかねえ。まあ、お土産は期待してるよ」そう福笑いは病棟の方へ歩いていった。

まあ、体たらくには体たらくの価値はある。おしゃべりは口を滑らせやすいから下越

あたりには聞いても答えてもらえないような裏事情もすんなり聞ける。その情報でこつち

がどれだけ残忍なことをしているとも知らずに。

「菜奈ちゃん、また旅行かい」振り向くと、内科医の楽山がいた。30代前半ながら安

里市立病院のエースといえる存在だ。仕事に対して真面目で積極性があり、話すとユーモラスな面もあつて同僚や患者からの人望も厚い。実力もあるが嫌味がなく、貞男も楽山のことを褒めていた。

「うん、今年も行ってきます」菜奈も彼によくしてもらってきた。頼ってきたし、楽山

からも可愛がられてきた。もちろん、どこかに突くべき盲点があるかと疑いながら。結果

は良好だった。男なんて底をほじれば粗が出てくるものだ。

「そうか、正直あの時期に人手を取られるのは辛いんだけどね。でも、年に一度の贅沢

ならしょうがない。俺も小さい頃は父親が長期休暇の時に旅行に連れてってもらってたし、

楽しんでおいで」

「無問題。エースがいるんだから安泰でしょ」楽山が周囲からエースとからかわれてるのを含んだ上での言葉を返した。

「何言ってるのかな、未来のエースが」菜奈が周囲から安里市立病院の未来のエースと

からかわれてるのを含んだ上での言葉を逆に返された。菜奈自身がこのまま勉強を続けて

将来は父親のいる病院で働きたいと言っているからだ。その場に合わせて適当に言ったの

に全員がそれを信じている。貞男も菜子もそれが彼女の夢だと思っている。そんなちんけ

な夢を持つつもりなんか到底ない。私の夢はただ一つ、愛する人と永遠に結ばれる事。そ

のためこれまでに努力を重ね、ようやくそれが形になろうとしている。私の願いに邪魔を

する奴は誰であろうと許さない。どんな報いで以つても罰してみせる。後悔なんてしない、

多くの感情はとつくの昔に捨ててきた。怖いものがあるとするなら、それはこの愛が成就

しない事。今の私が私でいられるのは全て愛のため。この想いが実

らないのなら生きてる意味なんかない。

私が私であるために、この計画を成し遂げてみせる。

夏の暑さが体温にへびりつくように蒸していく。こんな時に根性やら気合いやら言っている奴らの無駄な熱さは嫌いだ。そんな自分に青春を映して酔いしれてる奴らの勘違いはもつと嫌いだ。

学校は終業式も過ぎ、夏休みに入っていた。それを待っていたように日照りの強い毎日が続く、憂鬱に思えた。同時に一つずつ近づいてくる運命の時に身の引き締まる感覚も起こっていく。

夏休みになっても部活のために学校に来る日々が続く。バドミントン部は大抵が中庭での活動になっている。体育館はバレー部とバスケット部、柔道場や剣道場もそれぞれの部が使っている、これらの部の活動の休養日でなければ屋内の施設が回ってこない。こういつたマイナーな部活はメジャーな部活には勝てない。部員数も違だし、本人達の熱気も違うのだから仕方ない。逆にこっちが体育館を占有している方が立場がない。マイナーは小さくそれなりにやっていればいい。元からそのつもりでここに入部したわけだし。オリエンテーションで各部活動を回った時にここなら大して入れ込まなくてもいいだろうと判断して決めた。千鶴は練習がきつくないところがいいと言っていたから、彼女に合わせると



いう口実でバドミントン部にした。上下関係を押しつけられるような全力投球の運動部はうざったいし、教室でせせこましくやるような陰気な文化部もパスだった。

「じゃあ、10分休憩」部長のその言葉を待っていた千鶴が行動を起こした。練習中も終始そわそわしていたのは、この時のためだった。一中と四中のサッカー部の練習試合は校舎の向こうにある運動場で行われている。本当は最初から見学したかったが、部活を放つては行けなかったなのでこの休憩時間に賭けていた。

小走りで運動場に向かうと、試合はすでに終わっていた。5対2、四中が勝っていた。

選手はと探すと、ユニフォーム姿のメンバーがまさに校舎に戻るところこちらに向かってきている。その中に豊永一弥もいた。土にまみれた選手たちの中で彼だけはそれが様になっている。「千鶴、来てるよ」

「どうしよう、私ダメだ」ここまで来て、彼女の腰は完全に引けていた。

「ダメだ、じゃない。手紙渡さない」と

「菜奈、渡してきて」すぐるように見つめられた瞳は泳いでいる。「私じゃ意味ないでしょ。自分で渡さない」とそうこうしているうちに四中の集団はど

んどん近づいていた。千鶴はもう諦めた様子だった。このまま、四中の選手たちが過ぎていくのを眺めるだけでいいように。

「為せば成る、為さねば成らぬ」そのとき、菜奈はその後ろから千鶴を突き飛ばした。

押された彼女はちょうどやってきた選手たちの目の前に飛び出す形

になった。この事態を

どうしよう、と下を向く千鶴。何事が起きたんだ、と立ち止まる四中の集団。時間にして  
みたら数秒だろうが時間が止まったような感覚が生じた。千鶴が菜奈の方を向くと、握り拳

を作って「がんばれ」と口を動かした。それで意を決したのか、千鶴は下を向いたままで

手に持っていた手紙を何も言わず豊永に差し出した。

突然の事だったが、こういった展開には慣れてるのか豊永は事態を理解した様子だった。

出されている千鶴の手紙をそっと抜き取り、うつむいたまま顔を向けていない彼女へ笑顔  
を見せた。「ありがとう」

豊永はそのまま校舎に入っていく、他の選手たちも千鶴をちらりと見ながら彼に続いて  
いった。千鶴は誰もいなくなったのを確認すると、その場にペタリと座り込んだ。真夏の

日光で熱くなっているはずの地面など関係なしに大きく息をつく。

「菜奈あ」

「ごめん、ごめん」菜奈は彼女の元へ駆け寄り、ギュッと抱きしめた。緊張で汗が引いたのか、身体はそれほど温かくなかった。「ああするしかなかったんだよ、手紙渡すためには」

「ホントに心臓飛び出るかと思った」ジャージの体操服の胸のところに体重を預けてきた。その細身の体をしっかり受け止めて、彼女の戦利をいくらかでも称えていった。

「結果よかったじゃん、これで千鶴の想いは伝わるんだから」

「きつとフラれるよお。あんなふうに渡しちゃったし」

下を向いたままで手紙を渡したのをマイナスポイントだと思っ  
ているようだ。むしろ、

プラスのはずだろう。その顔を見せた方がマイナスなんだから。「  
そんなことないから。

ちゃんと読んでくれてるよ」

奈落へ沈むカウンタダウン、開始。

樂山が自宅に帰ったのは夜の22時を過ぎていた。玄関扉を開け  
た時に広がる真っ暗闇  
の世界はいつも気分が萎える。一人暮らしを始めてから10年、毎  
回こんな空しい思いに  
さらされる。リビングの床に適当に荷物を置くと、3人掛けソファ  
に寝転がる。

医者の仕事は結構に辛い。同時に何人も患者を受け持ち、中に  
は生死に関わるものも  
ある。精神面もやられるし、体力勝負でもある。医師不足にともな  
い、仕事の負担も増え  
てきて頭がこんがりそうになってくる。たまに、全て投げ出し  
てやりたい気にもなる。

安里市立病院ではエースと呼ばれ、周囲からの期待も大きい。それ  
は素直に嬉しいことで  
はあるが、自分だって一人の人間だ。調子のいい日も悪い日もある。  
それでも、毎日同じ

ように仕事をこなしていかなければならない。

ふとテーブルの上に置かれた額縁を眺める。そこには両親や祖父  
母と撮った家族写真が

飾られていた。全員の笑顔が輝いて見える。家族はいいものだ、一  
人暮らしを続けてそう

思えるようになってきた。帰りを待っていてくれる人がいれば、こ

の空しい気持ちも違うのだろう。奥さんや子供がいる家ならば、帰ってくるのが楽しみになるのだろう。

そう思い、溜め息をついた。現状を考えれば、そうせざるをえなかった。家族はおろか結婚に結びつきそうな縁もない。この職業は不規則だけに恋愛が難しい。残業はさらにあるし、急な呼び出しもある。相手にはつまらないと感じさせてしまうことが多いはずだ。

自分は家族を持てるのだろうか、そう思い悩む。浮かんだのはお手本のような存在だった。四宮副院長、彼は絵に描いたような温暖な家庭を築いている。娘の菜奈と接していること

で、それは如実に伝わってくる。夫婦仲もよく、あんなに可愛らしい娘が育ち、その子が父親の仕事場に週に何度と遊びに来て、その父親の姿を見て医者になりたいと志している。

こんなに嬉しいことがあるだろうか。きっと、父親からしてみれば涙が出るような理想的な家庭のはずだ。これ以上に何もいらない、現状が維持できれば何も望むことはない。

一体どうすればそんなに素晴らしい親になれるのか、と一度本人に訊ねてみたことがある。

「俺にもよく分らないよ。俺なんか家にいないことが多いんだから、本当に妻と菜奈がしっかりしているということだよ。恵まれているだけなんだ、俺は」  
こう言っていたが、

謙遜しているのだろう。家を空けていることが多い父親にあれだけ愛情を持ってくれているのだから、彼自身に相当な魅力があるのだろう。自分には何が足

りないのだろうか、そ

う悩んでも一向に答えは出てこなかった。

気を取り直して風呂にでも入ろうかと思うと、電話機に留守番電話が入ってるのを示す

赤いランプが点灯していた。珍しいなと思いながら、親からだろうと再生を始める。20

時23分の着信とはじまった伝言は無音の状態が続いた。何事かと気に掛かるが、それは数十秒にわたっていく。

「オマエノヒミツ、シッテルゾ。パソコン、ミテミロ」

その言葉だけを残し、伝言は途切れた。声は細工がしており、性別も年齢も認識できな

かった。単なる嫌がらせだろうか。なら、誰が、何のために。気味が悪くてしかたなかつ

たが、おざなりにもできなくて自宅用のパソコンを開いた。その内容に楽山は雷にうたれるような衝撃を受ける。

メールは「汚点」というタイトルのもと、「2007年、その医者がかねてから通い続

けていた風俗店の当時23歳の女性と本人同意のもとで店外で密接な関係をもつようにな

り、数回の避妊器具なしの性交渉を重ねる。女性が避妊薬を飲んでいるから大丈夫と言っ

たからだ。だが、それは嘘だった。女は男のことを真剣に愛してしまっていた。自分を風

俗嬢としてしか見ていなかった男に妊娠という事実を突きつければ関係は進展すると女は

考えた。結果、医者は女性を妊娠させてしまった。こんな事態など予想もしていなかった

男は狂いたくなるほどに怒り散らした。自らの子を身ごもった女に

対し、罨だ、詐欺だ、と喚いた。男は中絶と関係の解消を強く迫り、女も同意した。別れ際、男は女に手切れ金として300万円を手渡した」と事細かに書かれていた。メールには女性の写真とともに人工妊娠中絶同意書の画像まで添付されていた。

マウスを握る楽山の右手は大きく震えている。全てが彼の事実だからだ。何故だ。どう

して、このことが。頭の中は様々な思考が乱れ飛び、彼の心を蝕んでいく。自分の名誉を傷つける過去を知っている人間がいる。誰だ。一体、誰なんだ。そうか、あの女だ。手切れ金では物足りず、また俺から金を奪ってやろうと脅しにかかっているに違いない。そう

していると、部屋に電話の鳴る音が響いてきた。

受話器の向こうの楽山は呼び出し音のコールの8回目に出た。こちらが黙っていると、

向こうも不審げに黙っている。沈黙の時間が続いていくが、楽山は切る様子はなかった。

いたずら電話ではないと分かっているようだ。こちらの切り出しを待っている。「見て

もらえたかな、メールは」

「誰だ」演劇のセリフのような口調だった。自分をなんとか強くいさせようと無理やり

意気がっているが、そうでもしていないとそこに居られないのだろう。

「誰だ、お前は」

「いいから、メールは見たのかと聞いているんだ」

「ふざけるな、あんなもので俺をどうしようっていうんだ」

「まあ、そう焦らないでください。こっちもあれを公表したいっていうわけじゃありません。あんなの、ただ大っぴらにしたところでこちらに何のメリットもない。だが、先生のことを利用する材料としては十分だ。あなたにはこちらの言うことがいいですね」

「いい気になるな。貴様、どのどいつだ」  
「おやおや、先生はなにか勘違いしている。そちらの方が圧倒的に不利な状況にいるということを忘れないでもらいたい。こちらのさじ加減一つで先生をどうにでもできるんですよ」

「……くそっ」楽山の顔が見えないのが残念だ。きっと、悔しがつていることだろう。

「こちらの言うこと、聞いてもらえますね」  
「何だ。何をすればいい」抵抗は諦めたようだ。それでいい、それが正しい。

計画を告げると乐山はひどく動揺した。「馬鹿なことを言うな。そんなことが出来るわけがないだろう」

「やらないのなら構いません。さっきのメールを不特定多数の人間に行き届くよう送信するのみです」確かに疑いたくなるような計画だが、それに見合うだけの餌はある。

「汚いぞ、そんなことが許されると思ってるのが」だんだんと楽山の声は荒げていくのが分かった。こっちのペース、ということだろう。

「汚い？ おかしなことを言う。汚いのは女性を妊娠させておき

ながら子供をおろさせ

た、あなたの行為だ。そんな汚らしい手で数多くの患者の身体に  
触れている事に罪悪感

を感じませんか。あなたに治されてる人たちは可哀相だ」

楽山は鼻息をつくだけで言い返してはこなかった。それでもう奴  
はこちらの意のままで。

「心配することはありません。計画の実行の手順は全てこちらで  
考えてあります。先生

はただ言われた通りに動けばいいだけだ」それから計画にまつわる  
詳細を告げていった。

受話器の向こう側の楽山は言われるがままにメモを取っていく。「  
言うておくが、誰かに

チクるような低脳な考えを持っているようなら止めた方がいい。警  
察が動き出した時点で

あなたの命はなくなる。これは脅しじゃあない。命と名誉を保ちた  
いのなら、素直に従う

べきだ。なあに、手順のまま動けば失敗することはない。あとは先  
生次第だ。健闘を祈っ

ているよ」全て伝え終えると、釘を刺して電話を切った。こちらを  
疑ってはいたが、思い

のままに操ることができた。医者として人間、弱みを突けばどうに  
でもしてやれる。

ここからが本番だ。復讐の火は赤く燃えたぎっていく。



## 第5話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

豊永一弥・とよながかずや（完璧な外見を併せ持つて女性からの強い支持も持つ）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

## 第5話

私はどうしてあなたと出会ってしまったのだろう。

必然だったのかな。偶然だったのかな。

必然だったとしたら、私たちは生まれた時からすでに狂気になっ  
ていたのだろう。

偶然だったとしたら、私たちは出会うべきだったのかな。

あなたはと思う？

どちらにしても、私はあなたと巡り会ってしまった。

あなたと正しくも歪んだ直線の曲線を歩むことを決めた。

あなたのために。ただ、あなたのために。

時々思う、私の存在は本当にあなたのためになってるのか。

あなたはと思う？

2人が出会わないことを考えたことはあるかな。

私はあるよ、あなたのいない人生を描いたことが。

私は特に意味をもたない日々を過ごし、大事もなく死んでいく。

そんな普通の人生、こっちから願い下げしてやる。

私は今の人生がいい。あなたのいる、この人生がいい。

あなたはと思う？

あなたのことも考えたことがあるよ、私のいないあなたの人生。

あなたは良い学校を出て、良い会社に入って、良い人生を過ごし  
て死んでいく。

そんな普通の人生、過ごせたらあなたは幸せなんだろうね。

ごめんね、あなたの人生をこうさせてしまって。

その代わり、私はあなたに全てを捧げるから。

あなたが望むなら、何人でも誰だろうと傷つける。

あなたが望むなら、何があるうとどんなことだろうと起こしてみせる。

あなたが望むなら、目を背けなくなるような犯罪にも手を染める。私はあなたのためにいる。私はあなたのためにある。

私があなたの道を照らす灯火になる。

7月の最終日、照りかえす太陽は防壁もなく直に降り注ぐ。暑さにはだいぶ慣れたが、それでも暑いものは暑い。こんな天気の中、全身を使って走り回るような部活はどうかしてるし、室内に缶詰になるような部活もどうかしてる。せつかなんだから、適度に運動しておけばいいんだ。そう思いながら、菜奈は毎日のバドミントン部の部活動をこなしていた。

部活終わり、帰ろうと千鶴と歩いていると何やら正門のあたりに違和感が生じていた。

正門を通過していく生徒が次々に左に視線を送っている。何か起こったのかと思ったが、

正門を通ろうとすると理由はすぐに分かった。門の左に四中の豊永一弥がいたのだ。右隣

の千鶴はどうしようと強く反応していた。数日前に不本意な形で彼と接したことが今も心に残ってしまっているらしい。あれで自分と彼との間に引かれた希望は断たれたものだ

と千鶴はしきりに落ち込んでいた。

「千鶴、何も言わなくていいの」もうまもなく正門、ということこ

るで菜奈は小声で促す。

「いいの、このまま行こう」千鶴のこの前までの戦意は喪失していた。もう手を伸ばしても届かない存在、彼女はそう諦めたのだろう。菜奈の体に隠れるようにして歩き、豊永の視線を避けようとしている。

「すみません」その声は夕方前の正門によく響いた。運動部でならしている声は結構に

よく通っていた。菜奈や千鶴はもちろん、周りにいた数人の生徒も彼の声に顔を向けている。整った顔立ちだけでなく、少しパーマがかった黒髪、第三ボタンまで開けた制服の白シャツ、ルーズに履いた紺のズボン、そのだらしなさが見事に様になっている。多くの女子生徒が憧れるのも納得できる格好よさだ。豊永一弥はこちらの方へ歩いてくると、菜奈

と千鶴の前で立ち止まった。「林田千鶴さん」

名前が呼ばれた瞬間、心臓が強く鳴った。どうして自分の名前が彼の口から出てくるのか、意味がさっぱり分からなかった。鼓動が高鳴って、戸惑いを止めることができない。

「……はい」

「話したいんだけど、いいかな」千鶴とは対称的に豊永はあっさりとした様子で落ち着いている。

「話？」会話の先が全く読めなかった。普通に考えれば、豊永が自分なんかに話があるはずがない。何か怒らせるようなことでもしたんだろうか、とまで考えた。目の前の豊永に完全に萎縮してしまっている。

「ここじゃなんだから、どこかで話せないかな」豊永は周囲を一度見渡した。その場にいた数人の生徒が意外ともいえる場面に興味を示し、成りゆきを見ようと立ち止まったままでいる。ここで話をするのは適切ではない、別の場所にしよう、という提示だった。

千鶴は菜奈の方を向く。この状況が飲み込めず、寄り掛かるように菜奈に委ねようとして。瞳が合うと、菜奈は豊永の方を向く。視線が合うと、豊永はどうつもというように軽く頭を下げ、菜奈も同じようにした。再び千鶴の方を向くと、肩をポンとたたく。「行つておいで」

その言葉で千鶴の気持ちは一応決まった。まだよく分からないけれど、意思を委ねた菜奈がそう言ったのだから行つてしまおうと。まごついた心のまま、彼女は流れに乗った。

豊永に言葉なしに頷くと、彼はそれで理解した。「じゃあ」と歩き出すと、千鶴もその後を追っていく。不安そうに振り返る千鶴に、菜奈は「がんばれ」と口を動かして笑顔で手を振った。

「ごめんね、あんなところで待ち伏せしちゃって」豊永一弥は自転車をひきながら右隣を歩く千鶴に言葉をかけた。「一中の1年2組、っていうのしか書いてなかったから」

「いえ、そんな……」自分が敬語じみた口調になっているのは分かっていた。それでも、左隣を歩く豊永と自分がと思うと自然にかしこまってし

まう。

まさか、こんな展開になるなんて思いもしていなかった。彼にこんな形で手紙を渡してしまい、返りがあるとも考えていなかった。いや、本当は返りがあったら嬉しいと思った。

でも、自分なんか豊永一弥から反応があるとは思いきれなかった。願望は願望のまま、

そう心の中に閉まったのに。良いはずの違算をにわかに信じきれず、心内で様々な葛藤が広がっていく。

歩道からは豊永のひく自転車の音が響いてくる。並んで歩く2人の距離が近すぎるのにためらってしまう。あんなに近づきたいと思っていた相手なのに、いざこうなると自分は

何も出来なかった。「ごめんなさい、この前はあんなふうで」

「あんなふう、って？」

「私、すごく緊張しちゃって。だから………あんなふうになっちゃって」

隣からフツと漏れるように笑う声が聞こえた。「そんなこと、気にしないでいいのに。」

俺にああやって手紙とかをくれる子は大体あんなふうになってるから

「そうなんだ」その事実は千鶴の心を和らげてくれた。

「まあ、顔も見ないで渡されたのはさすがに初めてだったけど」

「………ごめんなさい」持ち上げられて、すぐに落とされたようだった。

「ごめん、ごめん。そんなつもりじゃないんだ。その感じがね、とても新鮮に映ったんだ。

純粹そうな子だな、って。あんまり、そういう子って俺の周りには来てくれなくて」

豊永一弥から自分の話が出てきている現実をどこか他人事のように思いつながら、やっとの思いで自分を現実留めていた。なにより、彼とこうして話をしている事が不思議で仕方なかった。菜奈もいない一人きりの状況に心細さは隠せず、今すぐにも逃げ出したい感覚の中にいる。

「それで？ どうなったの？」夜、千鶴から掛かってきた電話で菜奈は興味心を表に出した。結果は分かっているが確認作業、それを友人への心配という形で塗り直す。

「うん。私もね、なんだかよく分かんないの」電話越しの千鶴はまだ結果を飲み込めていないようだ。確かに、納得できてれば大した女だ。

「落ち着いてね、ゆっくりでいいから教えて」そう言うと、千鶴は一つ一つの事柄を確かめ直すように言っていく。

「あの後、私の家まで送ってもらって。その帰り道の間に話してたんだけど、私はもう心臓バクバクだったから全然うまく話せなくて。豊永くんの方から話してくれたのは、私の書いた手紙を読んで、それで会いに来てくれたってことで」

「本当？ あの手紙、効果あったんだね」

「うん。何っていうか、手紙自体は普段豊永くんが他の女子から貰ったりしてるものと

変わりにないらしいんだけど。私みたいな子が珍しかったみたい」

「珍しい？ どうして」分かっていたが聞いた。

「なんか、拳動不審ぽかったでしょ。でも、なぜかそれが新鮮だったみたいで。純粹そ

うに見えた、って」

「へえ、そうなんだ」良いように言っただな、また。

「あとは普通のことしか話してないかも。何の部活してるのか、何の授業が好きとか、家族のこととか」

「でっ、送ってもらったんだ」

「うん」

「その先は」

「その先？」

「送ってもらって終わり？」

「いや……携帯の番号とアドレスを交換して」

「えっ、マジで」

「なんか、信じられないよ。私さ、騙されたりしてないかな」

「騙される、って何を」

「賭けとかされてるんじゃないかな。私のことを振り向かせられるか、とか」

ネガティブもここまでくれば大したもんだ。その否定的な思考が自分自身の陰になって

いると思えないんだろうか。「そんなわけないでしょ。そんなふうに考えないの」

「でもさあ、こんなおかしくないかな。豊永くんが私になんて」

「何もおかしくなんかないから。向こうは千鶴に興味があるんだよ。素直に喜んでいい

んだからね。何でもそう思うの、千鶴の悪いところだよ」

「そうか……そうだね。どうかしてるね、私。素直に喜ぶよ」そう言うと、

千鶴は嬉しそうに豊永との会話を一つ一つ話していった。

「いいなあ、千鶴がうらやましい」ボソッと呟くようにこぼす。

「ええっ、私なんかそんな……」まんざらでない感じだった。それが頭にくる。



「メールは？ もう送ったの？」

「まだだよ、全然。アドバイスちょうだいよ、菜奈」

「了解。良いの、考えよう」それから2人で豊永一弥へ送るメールの文を考えていった。

「どうかしましたか」後ろから看護婦の赤妻に声をかけられ、我にかえた。

「いや、別に」本当はどうかかなりそうだったが、相談など到底できやしない。

「最近、考え事してるの多いですよ。大丈夫ですか」

赤妻に気づかれていいるということは相当に表に出てしまっているのだらう。いけない、

あまりにも仕事に支障をきたしてしまっている。「大丈夫。暑さボケかな、どうも集中力

に欠けてしまつて。こんなんじゃダメだね」今日はもう帰るとするよ、と楽山はやりかけの雑用を途中にしたままで立ち上がった。

「楽山先生、働きすぎなんですよ。仕事に熱が入るのはいいですけど、自分の身体の方をいたわつてあげてくださいね」

「そうだな、医者が身体こわしたら説得力ないから」お先に、と笑みを見せてその場を去っていく。

安里市立病院を後にすると、楽山は大きく息をついた。あの不気味な一件以来、生活に氣力がわかない。何をしても、あの声が頭にこびりついて離れようとしてくれない。

あの女だ。電話越しの声は変声されていたが間違いない。あれだけ詳細な事実、当人のほかに知っているわけがない。どういった経緯の理由かは分からない

いが、今頃あんな過去を引き合いにして脅そうなんて汚い奴だ。それも、あんな大それた計画を。

しかし、あの女にとってメリットのある計画だとはどうも思えない。何か別の経路でもあるのだろうか。誰かしらがあの女を介して俺に計画を持ち込んだ、という。

そのときだった。上着のポケットに入れていた携帯を取ると、またあの変声が届いた。

「先生、どうも」

「何の用だ」

「落ち着かないですね。どうかしましたか」

「うるさい。何の用だ、と言ってるんだ」

「いえ、計画の実行日が近づいてきたので心境でもうかがっておこうかなと」余裕のある様子がまた苛立つ。

「お前に話すことなんかない」

「お怒りのようだ。まさか、計画を断念するなんて言わないでしようね」

「……お前の言うようにやればいいんだろ」本当は怒鳴ってやりたいが、弱みを握られている事がそれをさせてくれない。

「ご名答、分かっているじゃないですか。さすがはエースと呼ばれるだけはある」

「一体、お前は誰なんだ。答えろ」

「残念ながら、こちらにその質問に答える必要はない。あなたはただ与えられた任務を全うすればいいだけだ。成功すれば、あなたの過去は眠ったままになる。それであな

は全てが終わる」電話越しに相手の微かな笑い声が聞こえた。「では、

あとは先生に委ねる

とします。よろしくお願いしますよ」通話が途切れた。

どうして、こんな事に。根源が自分にあるとしても、なんでこんな目に遭わないとなら

ないんだ。風俗嬢に手を出した奴なんて、いくらでもいるだろうに。その中で、なぜ俺だ

けがこんな脅しを受けるんだ。別に、あの女を風俗嬢としてしか見ていなかったわけでも

ない。興味心はあったけど、心もちゃんとあった。子供が欲しくなかったわけでもない。

小さい子は病院でも接してて好きだし、将来的には欲しいと思っている。俺はただ、風俗

の女に手をつけて身ごもらせてしまったという事実が自分の経歴に傷をつけると判断した

だけだ。周囲にバレたら、ここまで頑張って築いてきたエースの地位から完全に陥落する。

そう現実に危惧しただけだ。これは今になって差し出された咎めなのだろうか。それだけ

の事をもつてでしか償えないほど、俺はあのときに罪深い事をしてしまったのだろうか。

これが……これが報いの道なのか。

「葉奈、忘れ物はないのわよね」

「ないよ。昨日、ちゃんと準備したんだから」二泊三日の荷物を積めたバッグをポンと

たたき、葉子ヘアピールする。こういった旅の用意も当日になって慌てることはしない。

前々日までに物は揃え、前日に全てを終えておく。用意周到なところは自然と身についた。

この日から一中の部活の合宿のため、朝は早かった。もちろん、

その分は昨日の就寝の

時間を前にずらす。行動に余裕をもたせるのは当然だ。不必要に急ぐことはしない。計画

はじっくりと進行するものだ。時間がないと慌てるからボロがでる。そんな初歩的なミス

をするほど中学一年生に時間がないわけじゃない。

「パパ、行ってくるよ」貞男はリビングで出勤の支度をしていた。あまり態度には出さ

ないが、合宿といえど一人娘の初めての外泊を心配していると菜子が言っていた。父親の

娘を想う気持ちは哀れなものだ。その娘が父親にどんな気持ちを抱いてるのか知りもしないで。

いいだろう、幸せなら幸せなほど底に落としがある。

「ちゃんと先生の言うことを聞いて、夜更かししないようにするんだぞ」

「分かってるよ。合宿だったって、部活する場所が変わるだけなんだし」今のうちにその

顔を見ておくよ。もう、その良い父親像を繕った顔を見ることはないだろうから。帰って

きた時にどんな顔になってるか、楽しみにしてるよ。「パパは旅行の休み取れそう？」

「ああ、難しいのは難しいけど少しなら取らせてもらえそうだ」

なんだかんだ夏季休暇をきちんと取れるのは貞男の病院への貢献度と菜奈の存在があるからだ。貞男の表向きの

良心的な面に接してる人間たちは彼を良い医者と評価する。そして、小さい頃から病院の

従業員にとって太陽のような存在に菜奈はされてきた。そんな理想的な家族に、菜奈の夏

休みの間に休暇を取らせてあげたいと病院側も毎年特別に短いながらも休みをくれている。

「よかった。これで今年もみんなで旅行行けるね」

「ああ」

「じゃ、行ってくるね」

「行つてらっしゃい」玄關扉の閉まっていく間、貞男の表向きの顔を頭に留めておいた。

さあ、最後のはじまりだ。

「隣、失礼しますね」昼下がり、警察署内の食堂にいた唐木田の背中に牛嶋は言った。

右隣の唐木田はいわしの煮付け定食、牛嶋はカレーライスを食べ歩いて。「唐木田さん、

今は盗犯の手伝いでしたよね」

「ああ、さつきも６８歳のじいさん捕まえたところや。スーパーで生活用品３０００円分で逮捕。聞いたら、常習犯や。あんなもん、３０００円ぐらい買う金持つてるはずやで」

またか、と牛嶋は思った。彼自身、何度もそんな場面に対応したことがある。窃盗は老

若男女がやるが、その世代は扱いにくい。若者は結構に自分が悪かったと謝るケースが多

いのだが、年を重ねるほど非を認めなくなる。「はいはい、私が悪かったですよ」と悪び

れた様子もなく言葉だけを置く。正直、殴ってやりたいが理性で留める。「淋しいんでし

ようね。仕事もしない年金生活の中、かまってくれる相手がいないて」

「そんなんで警察呼ばれたら、たまったもんやないわ」

「そりやそうですね。いくら老人だからって自制してもらわ

ないと、いらない犯罪が増えるだけですから」

高齢者の増加にともない、その犯罪件数も比例していく。心身の後退で抑制がきかないのか、理不尽な老人が多くなっている。困ったものだ。「お前さんは？　どこの応援やつたっけ」

「特殊犯です。今朝、ボヤ騒ぎがありまして。タバコの不始末による出火で、早い段階で気づいたから多少の家具に火がいった程度でした」

「いくつや、そのボヤしたんは」

「65歳あたりだったと思います」

「タバコもちちゃんと始末できへんのか、還暦すぎると。できて当然のことができなさず

ぎるで、まったく。おかげで高齢者の事件や事故は増えるばかりや」

「年はとりたくないもんですね」唐木田へ皮肉っぽく言ってみた。

「お前が言うな」

「すいません」

安里市立病院での薬物混入連続殺人事件の捜査から離れ、唐木田も牛嶋も通常の業務へ

戻っていた。2人ともまだ事件に対する疑念が拭いきれずにいたが、あの事件から何も次の犯行がないところをみると事はあれで終わったという結果に到らざるをえなかった。

夜、長野の山間の高地に建つ宿泊施設の一室で菜奈は窓外に見渡せる夜景を眺めていた。

都会より遥かに瞬く星の画はどれだけ見ても飽きない。自分には持てない輝きをいつ

でも放っていられる金の粒たちが羨ましかった。私は暗闇の中で生

きているのに、あんなふうには煌けない。あの日、あの時、輝くことは諦めた。私は影のある場所にしかいられないんだ。

「どうしたの、菜奈」窓辺で物思いにふける菜奈に千鶴が声をかけた。

「ううん。綺麗だなあって思ってた」

「ホントだよねえ。やっぱ田舎は違うね」千鶴も外の景色を眺めて言った。

バドミントン部の合宿は厳しい決めつけもなく緩いものだった。

勝手な外出は禁止やら

夜は大声を出さないやら、子供のお泊り会のようなルールだ。朝から夜まで20人ほどの

中学生がキャツキヤと仲良しこよしに盛り上がる様は嫌気の差すものの以外の何物でもなかった。

宿でも大部屋に学年ごとに6人から7人が入り、学校のことや男子のことについて

話を咲かせていく。会話は途切れることなく続き、夜中まで終わらずにもない。大浴場

でも裸の付き合いをして、二泊三日の四六時中を集団で過ごすことに圧迫感を覚えずには

いられなかった。プライバシーもない不自由さが心を締めつけ、体に害が及んでいく。

「そうだ。菜奈、豊永くんに送るメール考えてくんない」

「いいよ、いくらでも」菜奈は窓外に向けていた体勢を部屋の方へ向きなおす。

千鶴と豊永一弥が連絡先を交換して3日、聞くところによるとまだお互いの触り程度しか伝えられてないようだ。千鶴の場合、男子とどう接していいかというところから始めなけ

ればいけない。ましてや、それが豊永となれば何を書けばいいのかさっぱりだった。

「普通でいいんだよ。変に背伸びしなくていいの。ありのままの千鶴を見せれば、それでいいから」そう菜奈はインタビューしながら千鶴の携帯を打っていく。

「でも、普通の私なんて自信が湧かないよ」

「そんなことない。千鶴はかわいいよ。何回も言ってるじゃん」

「だって、菜奈の方が私より何倍もかわいいじゃん」千鶴は俯いて落ち込む。

下を向いていると、目の前に赤いものが飛び込んできた。よく見みると、それは菜奈の携帯だった。彼女は写真を撮ろうと、レンズをこちらに向けてくる。

「豊永一弥は林田千鶴がいいんだよ。現に、2人で歩いてる時に私じゃなくて千鶴を誘ったんだから」

確かに、と千鶴は思った。

「それで自信になれるでしょ」

「・・・・・・うん」千鶴の顔が菜奈の方へ向く。

「ほらっ、スマイル」その言葉に笑みを浮かべた千鶴を、すかさず菜奈は携帯で写真に

撮った。「うん、かわいい」

その写真を添付し、豊永へとメールを送信した。

「こんばんは。まだ起きてますか？」

こっちは今日から部活の合宿で長野に来ています。

長野は穏やかで良い意味で田舎な感じで過ごしやすいです。

今は友達の菜奈と星空を眺めています。菜奈はこの前、私の隣にいた子です。



長野は星もたくさんでキレイですよ。

こういうところに好きな人と来れたら素敵だろうな。

その前に恋人がいないと、だよな。

「……………もしよかったら、もつと豊永くんのことを知りたいな」

そのメールを誰が打ったかはすぐに分かった。林田千鶴がこんな大胆な文章をいきなり書いてくるわけがない。書いたのは四宮菜奈、昨日のメールで部活の合宿があるのは知っていた。

「おい、これヤバくねえか」右隣にいた友人が読んでいた雑誌をこちらに向けてくる。グラビアタレントがグラマーな体をねじらせてエロいポーズをとっている。

「ああ、これ結構キてるな」集まっていた友人に合わせて言った。まだ12歳の彼らには水着の女性が最上級の興奮に値するのだろう。こちら、もう裸の女を知っているし、セックスだって経験済みなのに。無論、そんなことは口が裂けても言いはしない。体裁の問題じゃなくアリバイの問題だ。

今日、友人の家に集まって泊まろうと提案したのは自分だ。明日と明後日も別の友人の家に一泊ずつする予定だ。別に友情を深めようなんてつもりはない。四六時中、誰かとも過ごさないといけないなんてうんざりだ。それでも、この3日はそうしないとならなかった。

「ああ、早く彼女欲しいな」誰かしらが言った言葉に全員が共感

する。

「お前は違うだろ。いつでも作れんのに作らねえだけじゃねえか」  
指をさされ言われる。

そつだそつだ、と周りも納得している。

「真面目な子がいいんだよ。控えめで恥ずかしさを持つてるぐらいが」

「いるか、今どきそんなのが」

「いるんだなあ、それが」携帯を差し出すと、受信したばかりのメールを見せた。

「ええっ、お前こつというのがタイプなの」メールに添付されていた写真を見て、全員がまさかといった表情を浮かべている。

「悪いけど、俺はこの子と付き合うことにするよ」誰もが驚きを隠せない横で、豊永は返信を千鶴へと打った。

「メールありがとう。まだ起きてるよ。」

俺は友達ん家に5、6人集まって騒ぎたおしてる。

長野なんて羨ましいな。

星空もさぞかし綺麗なんだろうね。俺も見てるけど、比じゃないんだろうな。

確かに、そういうところに好きな人と行きたいよね。

一緒に夜空を眺めながら散歩でもしてみたいな。

俺も林田さんのこと知りたいと思ってる。

よかったら、今度どこかで会わない？」

楽山は自分を落着けるのがやつとの状態だった。いつも気にしたことのない視線が異様なほど気にかかる。この医局室に飛び交う無数の視線が全て気になり、それが自分へと

向いてるんじゃないかという錯覚に溺れそうになる。誰か自分の異変に気づいてるんじゃない

ないだろうか、誰か自分の心の中にある悪事を見抜いてるんじゃないかとドキドキして仕事が出来ない。

どうして、どうして、俺がこんな目に。あんな人工妊娠中絶同意書なんて、どうやって

手に入れたのか知らないが脅しもいいところだ。あいつだ、あいつのせいだ。あの電話越

しの変声された薄気味悪い奴が全て悪いんだ。そうだ、俺が悪いんじゃない。全てはあ

いつの責任だ。あいつがあんなふうに俺を脅さなければ、俺はこんなことじゃない。そう

思うことで自分の気をなんとか落ち着かせていた。

計画の実行は夜中だった。それが奴からの指示だった。仮眠をとると言って医局室から

離れれば、そう簡単に呼び戻されたりはしない。暗く伸びる廊下を歩くのが普段よりも異

質に緊張する。大きな手術を担当するときですら、こんなにも緊張はしたことがない。そ

れとは全然タイプの違い、心臓の高鳴りが異常なほどのものだった。

副院長室の前に来ると、人気のないことを何度も確認する。部屋の電気は消えている。

四宮貞男が帰宅したのは前もって看護婦に聞いておいた。彼が不意に病院に戻ってくるよ

うなことはない。仕事は家に持ち帰らないタイプなのは知っている。そして、仕事が終わ

ってからダラダラと院内に残っていることもない。どこかで一杯ひっかけたりもしない。

真っすぐに家に帰る。納得できる、あれだけ素晴らしい家庭がある

のだから。なぜ、奴が副院長を標的に定めてきたのかが分からない。彼に他人に責められるような事があるはずがない。奴の目的は全く読めない。でも、俺はやるしかない。副院長には申し訳ないが、所詮は他人よりも自分の人生の方が重要に決まってる。俺以外の人間が同じ境遇に立たされたとしたら、きっと同じ選択をしているにちがいない。俺は間違っていない、間違っせんかいないんだ。そう心内に強く叫びかけ、副院長室の扉を静かに開いた。

部屋の中へ足を踏み入れると、それでもかという静寂が広がっている。その静けさに心を落着けられるようでもあり、襲いかかれそうでもあった。奥にあるデスクの前まで来ると、梁山はグローブを両手にはめて中を漁りだす。小型の懐中電灯のわずかな光で焦りぎみに物色し続けると、目当ての物を発見した。明日から入院することになっている、70歳の肺を患っている女性患者についての情報が。生活などの個人情報から病気に関する処方などの対応策までが書かれている。梁山は用意しておいた、女性患者の情報と酷似したものを取り出す。目の前にある本物とほぼ相違ないが、処方の情報だけを少し変えた偽物だ。

波を打つ鼓動の速度は上昇を続けるばかりになる。これをすれば、どんな事になっせんかいのかは分かっている。それでも、それでも、やらなければならぬ。やらなければ、

俺がどん底へと突き落とされる。俺が落ちるか、他人が落ちるか。考えても結果の見えた

二択だろう。人間、最後は自分を選ぶんだ。

楽山はデスクに偽物を押し込んだ。

翌日の夜23時39分、人間の転落。

3階のナースステーションに点滅する赤い信号は墜落の鐘を意味していた。

「404号室の内浜さん、容態急変です！」

夜勤にいた貞男は現状を飲み込めないまま、女性の一変した姿を目にしていた。まるで悪い夢を見ているような感覚の中、現実の生身の女性を死なせてはいけないと必死に頭と体を動かし続ける。

どうしてだ。一体、何が起こってるんだ。

頭には疑問符ばかりが並び、解決できなかった。今日入院したばかりの患者にこんな強度の異変が起こるなんてない。第一、さっきまで普通に話していたじゃないか。あまりにも急すぎる。こんなおかしい。

あかくようにしているうちに女性は心配停止に陥っていた。夜の病室に鳴り響く単一の音に深い動揺を隠しきれなくなる。ほとんど訳も分からないままに思いつくだけの対応策をとった。

女性は帰ってこなかった。

病室の中、貞男は茫然自失に立ちすくむしかなかった。こんな事は長い医者の中でも経験がない。病気を携えてるとしても、つい先程まで安定していたはずなのに。言葉

もしっかりしていたし、まだまだ元気はあるようだったのに。

何があっただんだ。何も落ち度はなかったはずだ。今日一日の患者への対応を頭の中で振り返らせても、何も原因が浮かんでこない。

確認の意味を込めて、内浜そよのカルテを見直した。そこに書かれてあった内容に我が目を疑う。原因はそのカルテに全て映し出されていた。まさかの事態に、カルテを持つ貞男の両手が震えていた。

警察にある仮眠室は気持ち程度のお粗末な寝床だったが、慣れれば怖いもんでこれがつくりときてしまう。最終電車を逃してしまった牛嶋が寝ていると誰かにボンボンと強引に叩き起こされた。微妙に目を開くと、叩いた相手が唐木田であるのがばやけた画の中で汲み取れた。

「起きろ、新たな収穫かもしれんぞ」唐木田は意気が高揚して目が見開いている。

「何ですか。事件ですか」まだ堕ちたばかりのところで無理に叩かれ、牛嶋は起ききれなかった。

「安里市立病院やぞ」

その病院名に、牛嶋は一気に眠気が飛んだ。「何が起こったんですか」

「今日入院したばかりの患者が亡くなったらしいぞ。あんなのおかしい、と患者の親族から訴えるように電話してきた」唐木田の言葉は勇ましく響く。

「医療ミスでもあったんじゃないか、とな」

諦めようと張ったはずの線はその一報で寸断された。

## 第6話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

豊永一弥・とよながかずや（完璧な外見を併せ持つて女性からの強い支持も持つ）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）



## 第6話

お前は どうして生きてるんだ。

生きてることが恥ずかしくはないのか。

愛する人一人の生命を奪っておいで、よくのうのと生きてられるな。

お前は悪魔だ。大切な人間の生命すら記憶から排除するような人間だ。

そんな奴、この世にいる意味なんかない。

視界に入ると瞳が腐る。身体に触れると菌がつつる。

生きる意味がないのなら居なくなればいい。

だから、私たちがお前を排除してやる。

あの日から復讐は始まったんだ。

全てはあの中から動き出していたんだ。

私はお前を失くす覚悟を決めた。

愛する人のために。ただ、そのために。

時間は長く掛かったけれど、その時が来た。

ついに、ついに、私たちの願いが叶う時が来た。

どれだけの努力と我慢を重ねてきたか分からない。

でも、それが実を結び報われる。

全てが終わったら、あなたと結ばれたい。

あなたの髪に触りたい。

あなたの温度を感じたい。

あなたの手のひらの大きさを確かめたい。

あなたの胸の厚みに委ねたい。

あなたの背中に身をあずけたい。

あなたの瞳に強く見つめられたい。

あなたの匂いを嗅ぎたい。

あなたの肌をこの手でなぞりたい。

今まで耐えてきた分、あなたをたくさん欲しい。

「一昨日の夜、安里市立病院が入院していた患者に誤った薬を投与して死亡させる事件

が起こりました。亡くなったのは内浜そよさん、70歳。病院側の説明によると、内浜さ

んを担当していた医師が本来投与するべきものとは違う薬を指示してしまい、容態が急変

したとのこと。内浜さんは一昨日の昼にこの病院に入院したばかりで、疑問に思った

家族が病院に医療ミスを指摘したところ、病院側がこれを認めて謝罪しました。安里市立

病院では6月に薬物混入による連続殺人事件が起こったばかりでした。ブラウン管を通して

て伝わる全国放送のアナウンサーの言葉が菜奈の心内を奮わせた。二泊三日のバドミント

ン部の長野合宿の最終日の朝、部員全員が朝食を食べるために集まっていた食堂に流れて

きたニュースにそこは騒然となった。小さい頃から通ってきた地元

の病院が二度ならず三度までも思わしくない報道にのつたのだから当然だ。あの病院何や

ってんの、もう行けないよ、潰れるんじゃないの、長野に来ててよかった、と他人事の言葉がいくつも飛んで

いく。その中で、四宮菜奈だけはテレビの画面から固まったように

視線をはずさなかった。

湧き上がる感情を押さえ込むのがやっとだった。

「菜奈、これって大丈夫かな」千鶴が気にかけてきた。気遣って、あえて本質には入り

こまないようにしている。言いたいのは、貞男が大丈夫かということだろう。

「昨日の夜ね、家に電話したときにママに言われたんだ。明日帰ったら大事な話がある、

って」電話口の菜子の神妙な様子で何を言いたいかは分かった。

「ねえ、それって……」

「パパが関わってる、ってことだと思う」菜奈はテレビ画面から視線を外さずに言った。

千鶴はそれから何も話しかけてこなかった。どんな言葉をかけてい  
いか分からず、菜奈の  
手をそつと握ってくる。 知らない優しさだったが、菜奈も言葉はなしにそのままでいた。

「私も君のことは高く買っているのだけどね、今回は事が事だ。周りからもそれ相応の処分がなければ納得してもらえないだろう。処分については追って報告する。それまでは

自宅謹慎だ」院長からの言葉を貞男は何度も頭の中で繰り返している。これだけの大事を

起こしてしまったのだから、と辞意も伝える覚悟だった。医師として、患者の生命を個人

のミスで奪ってしまったのだから当然だと思った。なのに、出来なかった。菜子と菜奈、

家族との温かい生活を思い起こすとしても自制が働いてしまい。患者の命を失くして

おきながら、自分の家庭を壊すことをためらってしまった。情けな

かったが、今ある嫁と娘との生活を留めたかった。

内浜そよへの投与薬を間違えた実感はなかった。確かに正しい薬品名を書いたはずだ。

でも、現実とは違う薬品名が記載されていた。字も間違いなく自分のものだ。だから、自分

が誤って書いてしまったということだ。それでも、現実を受け入れがたかった。どうして

俺はあんなミスをしてしまったんだ。あんな間違いをするような人間じゃないはずなのに。

周囲の反応は冷ややかなものだった。医者にも看護婦にも今回の件を謝罪して回ったが、

誰もがどんな言葉をかければいいんだろうかと模索したまま何も言うことはしなかった。

全員が心の中では自分のことを罵っていることだろう。

何よりも忘れられないのは被害者家族への謝罪の場だ。内浜そよが亡くなった後、親族

から「こんなのおかしい」と医療ミスを指摘された。病院側はどうする対応がいいのかと

考えたが、親族は的確な回答がない場合は警察に調べてもらうと言ってきたので現実を話

すことに決めた。院長とともに被害者家族へ医療ミスを含めた全てを報告すると、親族は

怒りをあらわにして暴言に近い言葉を並べた。仕方ない、それだけのことをしてしまった

のだから。こちらがどんなに頭を下げてでも許されはしないんだ。結局、親族は訴訟も辞さ

ないという含みをして帰っていった。親族たちの顔は今も頭から離れない。きつと、この

先も離れることはないだろう。この罪を一生携えていかなければな

らないのだから。

貞男はベッドに座ったまま、深く溜め息をついた。部屋の窓から外を見てみる、見える

のは平凡な街の景色だ。それでも何度と見返す、今は何もする気にはなれなかった。昨日

帰宅してから、ほとんどこの自分の部屋に居つづけている。自分の部屋なのに、こんなに

いることが珍しかった。これといった趣味もないので自室に籠ることもない。いつも大概

はリビングで家族という。休日も家族サービスに徹している。それが一番の心の安らぎに

なるからだ。自分はそんな家族にも酷いことをしてしまった。昨日は菜子は気を遣って特

に何も聞いてはこなかったが本心は分からない。自分の結婚した相手が人を死なせてしま

った現実をどう受け止めているのか。

コンコン、ドアをノックする音が聞こえた。「うん」と適当に返事をする。インターホ

ンの音が微かに聞こえていたので来客かもしれない。

「刑事さんがお話を聞きたいって来てるんだけど」刑事、という単語に貞男は敏感に反

応した。逮捕という言葉が頭にちらつく。まさか、そんなことはないだろうと思い直す。

しかし、自分のしたことは結果的に殺人となるのでは。嫌な思いが離れず、急に緊張感が

増してきた。「ああ、通してくれ」

「失礼させていただきます」部屋の中へと入ってきた2人の刑事には見覚えがあった。

片方は白髪の老いた刑事、もう片方は黒髪の若い刑事。2人とも会った記憶はある。そう

いう表情をしたのかもしれない。刑事の方から「お久しぶりになりますかな」と言ってきた

た。薬物混入事件の時に病院の方で、と老いた刑事が付け足すとようやく思い出すことが

できた。以前の連続殺人事件の際に病院で事情聴取を受けた刑事だ。特に大きな反応はせず、軽い会釈だけをした。刑事は再び自分の名前を名乗った。老い

た方が唐木田千治、若い方が牛嶋大悟。

話し始めたのは唐木田だった。「いやあ、まさかこんな形でまたお会いするとは思って

ませんでしたよ。病院の方にも少し話を聞きましたけど、あなたは中々優秀な医者だと皆さんおっしゃってました」

反応をしないと、何かを察したように唐木田は一つ頷いて続きを始める。「いくつか、

お聞きしたいことがあります」

「今回の件に関しまして、まだ何かお話されていないことなんかはありますか」

「いえ、全てこれまで話したままです」

「内浜さんに投与するはずの薬をカルテに誤記した、と」

「はい」

「こんな聞き方はあれですが、どうして今回に限ってそんなミスを」

「分かりません。自分では正しく記述したはずなんですけど・・・・間違っていたと  
いうことでしょうか」

「そうですね。では、話を変えます。以前の薬物混入による連続殺人事件の時のことですが、あなたは佐藤太吉の事件の時は病院の副院長室にいたとなっ  
ていますが具体的には

何をしていたんでしょうか」

急な話の転換に貞男は当日の夜のことを思い返す。「その日は……多分、地域

住民との説明会に関する資料を作成していたと思います」

「へえ、副院長はそんなことまでやってるんですか」

「管理職はいろいろやる事があるんです。医者としての仕事だけでなく、病院をどうや

って盛り立てていくかということも考えていかないとけません」

「ほお、そいつは大変ですな」貞男の話に、唐木田はつくづく万年現場の刑事を選んで

よかったなと思った。「次にですが、野戸平蔵の事件の時については仕事には入ってなかったことになってますね」

「その日は夜まで仕事をして家に帰りました」

「寄り道はせずに」

「はい」

「帰宅してから外出した、ということは」

「なかったはずですよ」

「……そうですか、分かりました」

「あの、これは何を聞かれてるんでしょうか」今回の医療ミスについてなら分かるが、

なぜ今になってあの連続殺人事件のことについて聞かれるのか、貞男は不審に思っていた。

「いや、大したことじゃありません。私が個人的に聞きたかっただけです、お気に

せずに」これ以上はいいだろうと思い、唐木田と牛嶋は今日のところは引き上げることに

した。「では、これで失礼させてもらいます」

四宮家を後にすると、唐木田は首をひねった。「これといったもんは出なかったなあ」

牛嶋もその意見に同感だった。「そうですね。何か新しい展開があるかな、なんて淡い

期待を持ってたんですけど」

「そううまくはいかんか」

「でも、これで諦めるわけにはいきません」

「そらそうや。こんぐらいでへこたれてたまるか」四宮貞男が連続殺人事件の真犯人。

今回の事件により、2人はそう新説をたてた。確かに、病院内部の人間ならば薬品を入手することも素人に比べれば断然可能だ。証拠を見つけるのは難しいが、アリバイを崩すことができればそこを突くことが出来る。「四宮貞男の周辺、徹底的に調べるぞ」

「任務の遂行、ご苦労様でした。あなたが頭のいい人間でよかった。約束の通り、写真や書類はあなたに返してあげます。ただ、一応言っておきますが、今回の一件に関して何人たりにも他言は無用です。第三者に知られることがあった時点で、あなたがどうなるかは優秀なその頭で考えてもらえれば分かると思いますけど」楽山が病院での仕事を終えて帰宅すると、このメールが受信されていた。文面のとおり郵便受けには脅しに使われた写真や人工妊娠中絶同意書の入った封筒が入っていた。これで、これで忌まわしい膜から解放される。四宮副院長には悪いことをしたが、やはり自分に勝るものはなかった。今回のことは自分の中にだけ押し込めておけばいい。それで全てが終わるのなら。



いつもなら穏やかな空気に包まれるはずの食卓が重い空気に包まれていた。菜奈が夜に

帰宅すると、そこには今まで通りの温かな四宮家はなかった。淀んだ、何か別の家にでも

いるような感覚だ。荷物だけ置くと、貞男と向かい合うように菜子と菜奈はテーブルに腰

かけた。貞男は髪型も乱れていて、髭も伸びたままになっている。気力というものが抜け

落ちたような父親の姿だった。

そう、その顔が見たかったんだよ。

「菜奈もテレビを見て知ってると思うけれど、一昨日の夜に病院で高齢の患者が亡くな

ったんだ。急に容態が急変しておかしいと思ったが、誤った薬を投与させてしまっていた

ことに気づいた」貞男の声は元氣のないものだった。「カルテを見て愕然とした。やって

はならないことをやってしまった、と」

菜奈は疑いの目で貞男を見る。「やってしまった………つて」

「俺の担当患者だった」貞男は上に視線を向け、また伏せた。「

俺が死なせてしまったんだ」

大きな反応は示さなかった。代わりに、息遣いの不自然さで心の動揺を表した。右隣の

菜子は下を向いたままだった。そこまでの驚きがないことからすると、もう話を聞いてあ

ったのだらう。菜奈は忙しなく視線をキョロキョロさせた。心内の不定さを見せるように

しながら、両親の様子を観察していく。貞男も菜子も俯いたまま、

死んだような目をして  
いる。重苦しい空気の中で掛け時計の力チ力チと鳴る音がいつもの  
何倍もはつきりと耳に  
響いてきた。

「パパは………」最初に口を開いたのは菜奈だった。「パ  
パはどうなっちゃうの」

貞男は視線を上げ、菜奈と目が合うとまた伏せた。「分からない。  
とりあえず、昨日か  
らは謹慎になっている」

「いつ戻るの」

「分からない。もう戻れないかもしれない。院長は俺にいいよう  
にしてやりたいと言っ

てくれたが、正直どうなるか保障はない。人の命を奪ってしまった  
んだから、免職も仕方

ないはずだ。遺族から訴訟を起こされるかもしれない。どの道、か  
なり厳しいことになる

と思う」貞男は申し訳なさそうに一つ一つの言葉を言っていく。今、  
どれだけ無残な境遇

にいるのだろうか。

「そんな………」

「本当にすまない。謝ったぐらいでは許されないのは分かってい  
るが」そう貞男は菜奈

に頭を下げた。菜奈は何も言わずに頭を伏せる。

「ねえ、菜奈」ここまで何も言わなかった菜子が突然口を開く。

「もしかしたら、今回

の事でお父さんは今の市立病院を辞めることになるかもしれない。

それに、菜奈も学校と

かで周りからいろいろある事ない事を言われたりするかもしれない。  
これはまだお父さん

の事がどうなるか決まらなないと分からないけれど、どこか他のとこ

るに引越しをするかもしれない」

「嫌だよ。そんなの絶対嫌だ」菜奈は首を大きく振って言う。「まだ何も分かんないんでしょ。そんなこと言わないで」

「もしかしたら、だから」強調して菜子は言った。

「私、病院にお願いするよ。だって、パパが辞めないといけないなんておかしいもん。」

そりゃ、パパがやったのはいけないことだと思うけど。でも、それでも、それ以上にパパはたくさんの人達の病気を治してきてるんだよ。なのに、今回の一回だけで辞めさせられるなんてあんまりじゃなか」菜奈は強い瞳で貞男に訴えかける。

「菜奈……」

「パパはすごく良いお医者さんだよ。私、これまでずっと見てきてるから分かるよ。」

そんな、みんなに責められなきゃいけないなんて変だよ」

「菜奈……ありがとう」愛する家族からの言葉は何より身に沁みた。どんな特

効薬より効き目は抜群だった。

「大丈夫。私はパパの味方だから」菜奈は貞男の両手をとって笑顔を見せる。隣で見て

いた菜子は12歳の娘に大きな頼もしさを覚えた。この子がいればどんなことがあっても

大丈夫、そう思わせてくれた。

「どうしたの」その言葉に振り向いた瞬間、千鶴は大きく驚いた。ボーンとしてる間に

豊永の顔が自分の顔のすぐ近くに来ていたから。ドキドキする心臓はあまりに素直だった。

「さつきから心ここにあらずな感じだけど」確かに今日は考え事をするが多かった。

菜奈の家にあんなことが起こり、他人事ではなかった。

「もしかして、俺とじゃつまんないかな」

「うん、違うの。全然そんなじゃないから」千鶴は強く首を振って否定した。ダメ

だな自分、とつくづく思う。自分のせいで豊永を不安にさせてしまっている。

今日は豊永一弥の方から誘われた。合宿の時に送ったメールから心の距離が縮まり、一

緒に会いたいと言われたのだ。千鶴にしたら、まさかと思う展開の連続で戸惑いが勝って

しまうのも仕方なかった。どうして自分なんか、と未だに不思議は頭を離れようとして

くれない。菜奈は励ましてくれるが、どうにもそう思わずにはいられなかった。自分と豊

永じゃ釣り合わない、そんなことは重々承知している。こんなデートのようなことまです

る関係なんて周りにバレようものなら何を言われるか怖くなってしまふ。それでも、豊永

がこうして自分を誘ってくれている現実が嬉しかった。この夢のようない時が味わえるの

なら、と思えてしまふ。

「何を考え事してたの」

「うん、友達のことなんだけど」

「どうかした」

「……………ごめん、言えないんだ」貞男の事については菜奈から口止めされていた。

いくら豊永といえど、親友のあまりにもプライバシーなことを口走することは出来ない。

「そうか、分かった」

「本当にごめんね」

「いいよ。デリケートだもんね、そういうの」

「ごめん」

「謝ってばつかじゃん、さつきから」

「ごめん」あつ、と千鶴が言っていると豊永はフツと笑った。それを見て、千鶴も思わず笑ってしまった。

「折角だからさ、今日は楽しもうか」豊永は千鶴の手をとって歩き出す。

「うん」大きな喜色に包まれ、千鶴は笑みを浮かべた。

「ねえ、パパはどうなっちゃうの」数日ぶりにやってきた安里市立病院は空気が違っていた。いる人間、やってる仕事に変化はないが、自分に接する人間の態度がどこか重々しさを感じた。福笑いをはじめ、これまで仲良くしてきたナースステーションの看護婦たちも今回の件に関しては軽い口は挟めない雰囲気だった。

「さすがに今回の事については何も言えないわ。上が決めることだし。もちろん、副院长には残ってもらいたいとみんな思ってるわ」下越が口を開いた。それが素直で無難な意見だろう。

「みんなパパのこと良い医者だって言ってたじゃん。どうしても力になってくれないの。これじゃ、みんなに悪者扱いされてるみたいだよ」菜奈は涙目で全員に訴えかける。それは少なからずそこにいる人間たちの良心を揺らした。今までお世話になってきた貞男が窮

地に追い込まれているのに対し、自分たちはこのまま関わらないように遠くから見守るだけではないのかと。

「そんな、悪者だなんて思ってなんかいいわ。少し落ち着いて、菜奈ちゃん」気が荒くなっている菜奈をなだめようと下越は懸命にする。

「こんなの落ち着けるわけない。みんながそんな情けのない人たちだと思わなかった。

なんで、困ってる時に手を差し伸べてくれないの。仲間も助けようとしてない人たちに他人の命なんか助けられるわけないよ」捨て台詞のように大声で吐き、菜奈はその場を去って

いった。そこにいる看護婦たちには菜奈の言葉が痛いほど刺さった。こういう大事には背

を向けて、ただ病院側の決定を飲み込もうと受け身になっていた自分たちは恥じるべきものだったのかもしれないと。あんなに小さい女の子にそれを諭され、

大人たちは何も言うことが出来なかった。

その菜奈の言葉を誰よりも痛感していたのが用事でここに来ていた梁山だった。まさか、

あの子があんなに声を荒げるなんて。自分とはとんでもない事をしてしまったんだ、と強く

思わされた。何も関係のない、あんなに見本にするべき家庭を壊してしまった。洒落にな

らない。許されるはずもない。だからといって、今から自分がやりましたなどと言えるはずもない。俺はただこのことを誰一人にも言わずに墓場まで持って

いくことしかできない。

計り知れない重圧を背負いながら。

輝く満月は心を奮わせる。10年前のあの日もこんな輝かしい満月だった。あの時の母

親の優しすぎる笑顔が今も頭にこびりついている。そして、あの憎むべき人間の顔が浮か

んでくる。この記憶から抹消してやりたいのに離れようとしない。

自分の中に絶対忘れる

ものか、という思いが共存しているからだろう。いつか必ず復讐をしてやる、母親の無念

を俺が晴らしてやるんだ、そう決めてから自分の人生は大きく変わった。この復讐のため

にほとんどの精神を費やしてきた。気が遠くなるような長い時間だった。それでもこうし

てこれたのは全てが恋先のおかげだった。彼女が支えだった。彼女の想いが支えだった。

彼女の想いを叶えるためになら何にでもなれた。

携帯が鳴ったのはその時だった。着信が誰からかはすぐに分かる。

「もしもし、私」その高い声に心は洗われる。自分の好きな、よく通る可愛げのある声

は昔から変わらない。

「どうした」

「旅行、明後日から行くことになったから」その言葉の意味するものは分かりえた。

「ああ、分かった」

少しの間が空いた。「大丈夫………だよね」  
「何が」

「ううん、単なる最終確認」

「ああ、問題ないよ」

「そうか」また少しの間が空く。「ねえ、絶対成功させようね」  
「当然だ」

「全部終わったら一緒になれるんだもんね」

「ああ、やつとだ」

「うん、やつとだよ」これまでの長かった時間を噛みしめるような言葉だった。2人だ

けにしか分からない、この10年というあまりにも長い時間。多くを我慢し、多くを犠牲にし、ただ一つの目的のために奔走した時間。

電波はそこで途絶えた。その瞬間、急に実感めいたものが湧いてくる。あと3日で全て

が終わる、と思うと強い意志が胸に芽生えてきた。これで過去は終わり、未来が始まる。

2人の新しい未来が始まるんだ。

「わあ、キレイ」目の前に広がる新緑に菜奈は大きく両手を広げて息を吸い込む。都会

に比べると風も強く、陽射しも綺麗で温かく夏の時期にはもってこの場所だ。「パパも

ママもおいでよ」

娘の久しぶりの本物の笑顔に両親も自然と笑顔が生まれる。「待つて、すぐに行くから」

四宮家の毎年恒例の富士への家族旅行は予定を大きく前倒しした。例年なら8月の下旬

あたりになり、菜子と菜奈が五泊ほど滞在する間に貞男が休暇を取れる間だけ来るという

流れの中、今年はお盆の前にこうして来ることになった。貞男があいう事になり、家族

で家にいる時間が怠慢になりはじめたからだ。毎日家にこもりきりになってしまった貞男

のために、と早めからここに来ることを決めた。運よく別荘側も空きがあつたので、長期



で予約をして今日訪れることにした。

「ホントにキレイねえ、お父さん」

「ああ、そうだな」貞男にもようやく穏やかな顔が見えた。

「パパが最初から来るなんて久しぶりだよな」

「そうね、初めてじゃないかしら」

「そうだったかな」

「そうだそうだ、いつも私とママで家族分の大きい荷物を持ってくるんだよ。パパは

後から自分の一泊か二泊分の着替えだけ持ってくればいいんだもん」

「ああ、そういえばそうかもしれないな」

「今年はお父さんにもたくさん荷物持ってもらわないとね」

「そうそう、これまでの分たくさんだからね」

「そんなには持てないよ」家族に温かな笑みが戻る。一家団らんといえる時間がやっと

訪れた気がした。

「さて、さっそく買い出しに行かないとね」

「みんなで行こうよ。散歩がてらに」

「そうね、みんなで行きましょうか」

「ママ、夜ごはんはカレーだよ」

「はいはい、分かってますよ」しょうがない子ね、と菜子はつぶやいた。この時間が長

く続けば、と心から思った。それが大きく崩れる時がすぐ近くに來ていることなど知りもせず。

翌日の朝8時、パジャマからラフな格好へ着替えた菜奈は貞男と散歩へ出掛けた。菜子

が朝食の用意をしている間に朝方の富士を2人で散歩するのが毎年の恒例だ。遊歩道や道

になってないようなところも練り歩きながら富士山を近くに眺めた

り、森林浴をしながら

散策を楽しむ。これが何ともいえず気持ちのいいものだ。

「パパ、元気出してね」散歩も終盤に差し掛かった頃、菜奈はポツリとつぶやくように言った。

「んっ」

「気にしないで、っていうのは違いかもしないけど。でも、パパはパパの仕事を一生懸命やってるんだから」

「ああ、ありがとうな」娘の言葉はなによりも力になる。病院の同僚から菜奈が看護婦たちへ大声で自分のことを訴えかけてくれたというメールが来た。本当に父親思いの良い娘だな、と改めて実感した。こんなに素敵な娘に対して自分は障害になっってしまったている

と思うとやりきれない気持ちになり、同時にこのままではいけないんだという強い意識も持たせてもらえた。「いろいろ迷惑かけると思うけど、ごめんな」

医療ミスをした内浜そよの親族から安里市立病院へ正式に訴訟を行うことが決まった。

こうなってしまうては、自分の居場所はあそこにないも同然だろう。新しい病院を探さな

ければいけない。いや、こんな医者を雇ってくれるところなどあるのだろうか。開業とい

うことも視野に入れないといけないのかもしれない。ならば、そんな大金をどうすればいいのか。まだまだ、考えることは山のようにあった。

「私とママのことはいいよ。パパのやりたいようにやって。私たちはそれに着いていく

から」菜奈は笑顔を見せて言った。「この前は嫌だっって言っただけど、

引越しもうがな

いよね。パパが医者を続けられるところならどこでもいいよ」

「菜奈・・・・ホントにすまん」涙が出そうになるほど嬉しい言葉だった。これ

だけの事件を起こし、恨まれても当然なのに菜子も菜奈も自分を怪訝にはしなかった。こ

の数日、家族というものの有りがたみをこれでもかと味わってきた。本当に素晴らしい家

族に恵まれたと思う。献身的に支えてくれる妻に何があるうとも信じてくれる娘、何物に

も変えられない宝物だ。この2人さえいてくれれば頑張れる。またやり直せる。

「あつ、パパ、リスがいたっ」菜奈がなにやら樹海の方を指して言っている。

「ごめん、見てなかった」辺りを見回すがリスらしきものは見えなかった。考え事をしていた見逃してしまったらしい。

「あっちだよ。今、走ってっ」そう言い、菜奈は樹海の方へと入っていく。

「おい、危ないぞ」貞男も菜奈の後を追ひ、樹海へと足を踏み入れる。

「おかしいな。確かにいたのに」菜奈はリスが走っていったと思われる方向へどんどん進んでいく。

「菜奈、リスはもういいよ。戻ろっ」貞男が諭すが菜奈は一向に元の道へと戻る気配がない。

「大丈夫、絶対いるから」そう言うと、戻るところか樹海の奥の方へと歩を速めていく。

「おい、菜奈。もう戻らないとまずいぞ」貞男の言葉に耳を貸す

こともせず、菜奈はた

だただ歩き続ける。リスなんか関係ないように無数の木々や葉の散らばる樹海の中へひたすら突き進んでいく。

「菜奈、いい加減にしなさい。リスなら今度また見ればいいだろ。このままじゃ、2人

とも迷ってしまうぞ」強めの言葉で叱るように言い放ったが、そんな言葉など聞こえてい

ないように菜奈は歩を止めない。何かに取り憑かれてるようにザツザツと落ち葉を踏みつ

けながら前に歩いていく。後ろを振り向いてみる。もう元の歩いてきた正規の道は見当た

らないほど遠くに来てしまっていた。明らかにこのままでは危ない。「菜奈、いいから戻るんだ」言葉を聞きいれようとしない菜奈を

力ずくで振り向かせようとすると、逆に思いきり掴みかかれた。体が宙に浮き、軽くなる。気づくと、落ち葉

の上に投げ飛ばされていた。叩きつけられ、少しの痛みが生じる。何が起こったんだと体

を向き直すと、目の前にあるはずのないものがあつた。そんなはずはない、と目をつむり

開いてみると同じものがそこにあつた。倒された貞男に向けられていたものは拳銃だつた。

それを手にしているのは他ではない菜奈だ。あまりにも信じられない光景に言葉が何も出てこない。

菜奈は不敵な笑みを浮かべ、首を傾げる。「様が無いな、四宮貞男」

目の前で何が起こっているのか、貞男にはさっぱりだった。理解をしろと言っても無理

だろう。

「分からないよねえ。そりゃそうだ。愛する娘に銃を向けられて納得する奴の方がどうかしてる」菜奈はフツと笑い、下唇を舌で舐める。

何だ。何なんだ、これは。悪い夢でも見てるのか。でも……・間違いなくこれは

現実だ。「どういふことなんだ、一体」

「どういふこと？ おかしなこと言うね。あんたが今見てるままだよ」

見てるまま、俺は樹海の中で倒されて娘に拳銃を向けられている。「何なんだ、それは。」

おもちゃか何かか」

「おもちゃ、か。まあ、そう思いたいのは分かるけどね」菜奈は持っていた拳銃のシリンドーをスイングアウトし、裏側を見せる。カートリッジらしきものがきちんと装填されていた。「悪いけど、全部実弾だから」

貞男は体が固まったように動けなかった。あの菜奈がまるで別人のようにいる姿が全く飲み込むことができなかった。「どうして……どうしてなんだ」

「どうして？ 自分の胸に聞いてみなよ」シリンドーを本体に戻し、ハンマーを起こす。

あとは引き金を引き絞れば銃弾が発車される。「忘れたなんて言わせない。私は、私たちはずっとあの日の傷を背負いながら生きてきたんだから」

今までに目にしたことのない菜奈の鋭い眼光に睨みつけられ、貞男は精神的に追い込まれていく。額からはいつからか汗が滲んでいた。「傷？ 傷って何だ」

貞男の言葉に菜奈は絶句したような表情を浮かべた。歯を軋ませ、怒りを募らせていく。

左手を握りしめ、拳銃を握る右手に力が込められる。「ふざけるな。私たちがどんな思いで今まで生きてきたと思ってるんだ」

貞男には菜奈の言葉の意味が理解できなかった。今回の医療ミスの事を言ってるのかと

思ったが、もつと何か以前の出来事を言っている気がした。「私たち、ってどういうこと

だ。菜子も一緒ってことなのか」

菜奈はもはや啞然となっていた。いくらなんでも、こんな答えが返ってくるなんて思い

もしなかった。「何も……何も覚えてないんだな。こんな奴のためにどうして私

たちが苦しまないといけないんだ」

「菜子と菜奈に俺が悪いことをしてしまったのか？ 何があったのか教えてくれないか」

「教えてやるよ、いくらでも」菜奈は振り向き、無数の木々に向けて言う。「ねえ」

何を言ってるのかと思ったが、わずかに見えるほど遠くの木の下から人影が動いた。そ

れはザッザッと落ち葉を踏みつけながら近づいてくる。貞男に緊張感が走る。やがて、そ

の人物の体や顔がはつきりと眺められるようになった。幼い少年だ。菜奈と同じくらいの

年齢に見受けられる。少年は菜奈の隣で立ち止まり、同じように鋭くこちらを睨みつけて

きた。身長は高く、顔立ちもとても整っている。

ただ、貞男にその少年の記憶はなかった。一度目にしたら忘れないうちであるうっすら顔の顔

だが、全くもって知らない。「君は誰だ」

貞男の言葉に少年と菜奈は顔を見合わせる。2人が知り合いであるのは間違いないよう

だ。「何も覚えてないみたいだよ、この人」

「そうか……いい身分だな」少年が初めて口を開いた。

その年齢からすれば珍

しいくらいに低い声だった。何かを諦めたような瞳といい、妙な落ち着き方は不気味なほどだ。

「なら、思い出させてやればいい」

少年は貞男に近づき、身をかがめて同じ視線になる。少年は死んだような瞳をしていた。

人生に疲れきったような、人間の最期のような瞳でこちらを強く見つめてくる。金縛りに

あったように、その瞳に釘付けにさせられた。「俺の名前を教えるよ」

「豊永一弥だ」その名前は貞男に衝撃を与えた。自分がどうして今こんな状態になっ

ているのかを把握するには充分だった。過去の記憶から抹消した、二度と思い出すはずのな

かった名前。

「何で、どうして、何で、どうして」身体は震えだし、呻くような声を漏らしながら頭

を抱え込む。忌まわしき過去が蘇り、心を蝕んでいく。呼吸は乱れ、現実からの逃避をは

じめていく。

「ようやく思い出したようだな」眼前で壊れだす貞男を目にし、ようやく気を落ち着け

ることができた。そうだ、もっと苦しみ。俺がこれまで味わってきた分、存分に苦しんでみる。

「あああ、可哀相に」後ろから近づいてきた菜奈が豊永と同じように身をかがめる。2

人は檻の中の動物でも眺めるようにこちらを見ている。「まあ、一人だけ何も知らずにのうのうと生きてきた報いだけど」

貞男は何も言葉を発することが出来なかった。いきなり目の前に現れた豊永一弥、その豊永と娘の菜奈がお互いを知り合っている。その現実はどう頭を働かせようと理解不能にしかない。

「あらら、本当に何も分からないんだね」菜奈は左手を豊永の右手にからめる。その手を頬にもっていき、愛おしそうに摩った。「自分の娘は頭も性格もいい、口の挟みようもない出来た子供だと思ってんでしょ。そんなもん、嘘に決まってんのにさ。真実を知らず

に綺麗なものだけ見て育とうなんて都合のいい考え方だね」  
「真実なんて汚くて見苦しいだけだ。お前だってそうだ。お前は誰より汚らしい、見苦しい。お前の作り出した真実にどれだけ苦しめられてきたか」豊永の言葉は震えるようになっ

ていた。貞男を睨みつける眼差しはより鋭くなっている。怒りが込みあげてくる豊永の体を宥めようと菜奈が抱きしめる。そして、唇に強く口づけた。貞男は目の前で起こる光景に気が振れそうだった。愛する娘の豹変ぶりを受け止められず、鼓動は早まるばかりになる。止める、止めてくれ、とキスを続ける豊永と菜奈に言いたかったが言葉が口から出てこない。夢なら本気で覚めてくれ、そう願うしかなかった。



「私たち、愛し合ってるんだ」唇を離した菜奈は貞男を一瞥し、口角を上げて言った。

「これが真実なんだよ」

貞男はもはや何もすることができなかった。何の抵抗もできず、ただ目の前で起こって

いく事物を飲み込めないままに記憶に刻むしかない。涙目になり、荒くなる呼吸で不定に息を吸っていく。

「その顔が見たかったんだよ」菜奈は瞳を見開き、不気味な笑みを浮かべながら貞男の側で言い捨てる。「気持ち悪いんだよ、お前」

貞男の心は凶器で壊されたように砕かれた。詳しいことは理解できなかつたが、愛する娘に裏切られたことは分かりえた。衝撃に耐えられず、涙が流れてくる。

「お前のせいだ」菜奈は見開いた目で貞男を睨みつける。感情を吐き出すように何度も

その言葉を浴びせたおした。「お前のせいだ」

「お前のせいで私たちの人生は台無しだ」菜奈は左手を握りしめ、今すぐにでも貞男を殴ってやりたい衝動をなんとか抑える。立ち上がり、豊永と視線を合わせると拳銃を手渡して去っていく。

貞男はただ去っていく菜奈の後ろ姿を追うことしかできなかった。やがて、菜奈はここ

まで歩いてきた道へと消えていった。何か繋がっていた線がプツリと途切れた。豊永の方

へと視線を向ける。彼は静かな瞳でこちらを見ていた。「どうして・・・どうして、こんなことを」

「どうして？ 理由は分かるだろ」豊永は視線を外すことなく言い捨てる。「あの日から、お前のことを忘れたことは一度もない。お前に復讐するために、ただそれだけのために俺は生きてきたんだ」

「そして、それは今日果たされる」豊永は右手に持っていた拳銃を貞男に向ける。「この日を待ち続けてきた。菜奈とともにだ」

「何でだ。何で、菜奈が」

「菜奈は俺の味方だ。あの日からずっと。そして、お前は敵なんだ。俺の敵であるお前は、菜奈の敵だ」そう言うと、拳銃を貞男のこめかみに構える。

「お前はこの世で最も

信じていた菜奈に裏切られた。当然だ。お前は俺の最も信じていた人を奪ったんだから。

この罪は生命を引き換えにすることでしか償うことは許されない」

貞男は何も言わなかった。その代わりに精悍ともいうべき目を豊永に向けていた。

「裁きを受ける」豊永は引き金をグツと引ききった。銃弾の放たれた音は新しい世界へ向けた祝砲のように聞こえた。

きらきらひかる おそらのほしよ  
まばたきしては みんなをみてる  
きらきらひかる おそらのほしよ

きらきらひかる おそらのほしよ  
みんなのうたが とどくといいな  
きらきらひかる おそらのほしよ

騒ぐ胸のあたりを掴むと、体の中に「きらきら星」を流した。き  
つと今頃、あなたもど

こかで流してくれてるのだろうと思ひ瞳を閉じた。  
私たちの願いは叶えられた。

## 第7話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

豊永一弥・とよながかずや（完璧な外見を併せ持つて女性からの強い支持も持つ）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

## 第7話

母さん、聞こえたかい。

俺が母さんの仇を討ってやったよ。

四宮貞男、母さんの命を奪った憎むべき相手だ。

どんなにこの日を待ち侘びたことか。

あいつの恐怖に怯える顔を見せてやりたかったよ。

あいつを初めて目にしたのは10年も前のことだった。

母子家庭で育てられてきた家に成人の男がいるのは違和感以外の何物でもなかった。

あいつはいつもスーツを着ていた。

仕事に行く前だったのか、帰りぎわだったのか。

母さんはあいつが来ると、背広を受け取ってリビングへ案内する。まるで、新しい家族でも出来たかのような喜びようをしていた。

母さんはあいつを友達と言っていたけど、そうじゃないことぐらい3歳の子供にも分かっていたよ。

あいつはたまに女の子を連れてきていた。

菜奈、女の子はそう自己紹介した。

母さんがあいつと2人きりになってる間、俺はいつも菜奈と遊んでいた。

同年年だったから気も話も合った。

どんな話をしていたかと聞かれても全く思い出せないけれど。

菜奈と遊んでる時間はとにかく楽しかった。

でも、その時間は長くは続かなかった。

母さんはあいつに捨てられたんだ。

別れ際の口論は幼い俺や菜奈にも充分理解できるものだった。

去り際のあいつの険しい顔、菜奈の淋しそうな顔が今も頭に焼きついている。

あの日から母さんの心は荒れていった。

やり場のない怒りを閉まったまま、いつ破壊するか分からない爆弾を抱えてるように。

この人は壊れてしまう。そう気づいていたけれど、小さかった俺にはどうすることも出来なかった。

母さんは自ら命を絶った。

富士の樹海、母さんがあいつと出会ったところだった。

あいつは葬式には来なかった。

当然だ。自殺の原因になった人間がどの面さげて遺影に合掌できるんだ。

あいつが、四宮貞男が母さんを殺したんだ。

憎かった。どんなことをしても罰をくだしてやろうと思った。

四宮貞男の死の翌日、葬式は安里市立病院から遠くない場所にある葬儀場で行われた。

親族、友人、病院関係者、過去に世話になった患者など多くの人間が弔いに訪れていた。

喪主を務める菜子は終始うつむいたまま、隣にいる菜奈もそれを映したようだった。

弔問に来る人間は誰もが貞男の死を悲しんだ。こんな事態になるなんて予想もしていな

かったから。いくら内浜そよを死に至らせてしまったとはいえ、自らが死を選ぶことなど

考えられなかった。彼のような仕事に誠実な人間なら、これから多くの患者を救っていく

ことで償いを果たしていくのだろうと考えるのが普通といえた。

「多いですね、弔問客」葬儀場から少し離れたところから中を眺めていた牛嶋が言った。

被害者の葬式に顔を出すことは少なくないが、この人の多さは四宮貞男の生前の人柄を表しているのだろう。

「医者は接する人間も多いからな。こんなもんやろ」唐木田はどこか無気力に呟く。例の連続殺人事件について、最有力と思っていた人間の死に動揺は隠せなかった。これから貞男の化けの皮をはいでやろうと捜査を進めていたのに、まさかこんな結果になるうとは。

事件が起こったのは昨日の朝8時56分、場所は富士の樹海の中。銃声を聞いた付近の散歩客が現場に行くと、頭部から血を流して倒れている四宮貞男が発見された。頭部は左右が貫通しており、右手に握られていた拳銃によるものとされた。衣類から遺書が見つかったため、自殺によるものと断定された。警察が現場に着くと、娘の菜奈が泣き叫んでいたのが印象的だったという。事情聴取によると、貞男は菜奈と散歩に出掛け、少し離れた時に樹海へと入って命を絶ったようだ。

「話、聞きますか」事情聴取は富士の警察で行われたため、自分たちも直接話が聞きたいところへ来た。

「いや、今日は止めとこう。あの様子じゃ、まともに話は聞けん」菜子と菜奈の生気の

欠けた様相を目にし、その場を後にした。

「どうしましろう、これから」貞男を犯人ではないかと疑っていた2人に今回の一件は大きすぎた。あの医療ミスから連続殺人事件へと繋がる線を手繰りよせようとしていた矢先の出来事だ。一報を受けた時はまさかと心に穴を開けられた。これで、事件の解明はより難しいものになってしまった。

「分からんよ。どうなるんやろうな」唐木田は持っていたタバコに火をつけ、溜め息まじりに吹かす。煙とともに事件に対する気力まで飛んでってしまいそうだった。

「そうか、そんなことに……」豊永一弥は事態の詳細を千鶴から告げられ、やり場のない感情を押し込める演技をする。事件については昨日の二ユースでも取り上げられていたが、それ以上の内容を聞くことができてホッとした。四宮貞男は自らが犯してしまったミスを苦に自殺、それが警察や世間の判断となった。

復讐は完成された。母さんの無念をこの手で晴らしたんだ。

「菜奈が可哀相だよ。おじさんの気持ちも分かるけど、家族を置いて自分だけなんて勝手すぎると思う。残される方のことも考えないと」今日の葬式で菜奈の顔が忘れられない。体中の力が抜けていて、立ってるのがやっとという状態だった。それなのに、自分は彼女に何もしてあげることが出来なかった。それらしい慰めの言葉を言ってるだけで、彼女自身の助けにはなれなかった。それが悔しくてたまらなかった。



何が友達だ。こういう

ときに支えてあげられなくてどうする、と心内に何度も投げ掛ける。

「そうだね。俺のところも両親がいないから、置き去りにされた者の気持ちは痛いほど

分かるよ」豊永に両親がいないのは聞いていた。父親は彼が生まれてから早くに離婚し、

それ以来会ったことはない。母親は事故で亡くなったらしく、ずっと祖父母の家で育てら

れてきた。祖母も病気で亡くなり、今は祖父と2人で暮らしている。

「うん……ええと」言葉が出てこなかった。菜奈と同じ傷を味わっている豊永

に掛ける言葉が浮かばない。両親もいて何不自由なく過ごしている自分が何を言っても無

駄なんじゃないか、と思うと考えつく全てが適さない気がした。そんな自分がまた嫌にな

る。大切な人が痛みを抱えているのに何も出来ない。

「いいんだよ、そのまま。下手な言葉を並べられるより、何も言わずに側にいてくれ

る方が心強いんだから」豊永は千鶴の肩に手を回す。手のひらが肩にポンと乗ると、千鶴

はビクツと反応しそうになった。豊永の方を向くと、いつもより近くにある彼の顔がこち

らを真つすぐに見つめている。その視線に耐えられず、千鶴は顔を逆に背けてしまう。そ

れ以上に豊永が踏み込んでくることはなかったが、千鶴は胸の高鳴りを抑えられなかった。

「まさか、3回もこうして話を聞くことになるとはね」ご愁傷様ですと唐木田が言くと、

菜奈は軽く頭を下げた。ファミレスの窓際の角の席に腰掛けた3人

にウエイトレスが飲み物を持ってくる。オーダーは全員がアイスコーヒーだった。

四宮貞男の死から一週間が過ぎ、唐木田と牛嶋はようやく菜奈から話を聞くことができた。3日前にも四宮家を訪ねたが、そのときはまだ話せる心境じゃないと断られている。

目の前の四宮菜奈は生命力の弱い小動物のように縮こまり、父親のことを引きずっているのだなと推測できた。最初に会ったときは普通の女子学生という印象だったが、2度目、

3度目とどんどん薄い人間になっている。

「体調はどうか」

「何だろう……体は元気なんだけど心は元気じゃありません」息をつき、菜奈はアイスコーヒーに手を伸ばす。

「そりゃそうだ。あんな事があったんだから」牛嶋は慎重に話を進める。菜奈を傷つけないように言葉は選ばないといけない。しっかりしてるといっても、

まだ12歳の子供だ。

大人の何気ない一言に傷を負ってしまう未熟な年頃である。「お母さんはどうだろう」

「ママはまだダメみたいです。家事はするようになったけど、それでも日に何回かはソ

ファに座ったままボーッとしたりします。考え事をしてるんじゃない、何も考えたくないって感じで」菜子はその日から無為に時間を過ごしていた。

最初の数日は2人とも

自分の部屋に閉じこもったまま、外に出る気も起きなかったのデリバリーで食事も済ま

せていた。ここ何日かはようやく菜子も家事をこなし、菜奈も勉強

をしたりとゆつくりと生活を戻していつている。

「お母さんと会話はしてるかな」

「ほとんどしてないかも。犬の散歩に行ってくるとか、買物に行ってくるとか事務的なものぐらいです。パパの話はしないようにしてるから、なんだか会話自体をしないようになってる気がします」

「そうか、まだ時間は掛かりそうだね」牛嶋の言葉に菜奈はうなずく。心の傷が癒えるまでには長い時間が必要になるだろう。今が夏休みでよかった。周囲と交わることは一度置き、自由な時間を持った方がいい。本当は菜子にもこうして話を聞きたいところだが、もう少し待つべきだろう。

「じゃあ、お父さんの話を聞いてもいいかな」

「はい」

「最初に、事件があった時の一連の事を聞かせてほしい」

菜奈は呼吸を整えるように大きく息をつき、塞いだ記憶を呼び起こすように一つ一つの言葉をたどしく言いこぼしていく。「あの日は8時ぐらいからパパと散歩に出掛けました。散歩は家族旅行の時には毎日欠かさずやっていて、私たちが歩いてる間にママが朝食を作ってるっていう流れで。それで、あの樹海の辺りの道を歩いてる時にパパが立ち止まったんです。どうしたんだろうと思ったら、貧血かもしれないって座り込んでしまって。とりあえず日陰のある樹海の方へパパを動かして、水を買ってこようと思ってその場を離

れました。歩いて5分くらいのところにお土産屋があっただんで、そこで水を買っている時

に銃声が聞こえたんです。何があっただろうと思ったんですけど、パパがそんなことに

なってるなんて思いもしなかったからそのまま水を買って戻ったら人が10人から20人

集まっただけ。誰も樹海の方には入っていかずに歩道にいたんですけど、それがさっきま

でパパがいたところで。一気に青ざめて、頭の中が真っ白になって。それでも心配で樹海

に入っていくと、奥の方に人が倒れてました。見るのが怖くて足が震えてたけど、これは

パパじゃないんだって自分に言い聞かせて覗き込んだら………パパでした」

四宮菜奈は淡々と話していったが、感情の変化は表情で分かりえた。グツと堪え、気丈

に振る舞っていた。「ありがとう、話してくれて」

少し時間を置いた。高まった菜奈の感情を落ち着ける時間。その間、牛嶋と唐木田が何

ということもない話を続けていた。牛嶋は安いワンルームのマンションに住んでるらしい。

仕事柄、家には寝に帰るだけという日も多くて高い家賃を払ってまでグレードを上げる気

にはなれないそう。同い年の恋人がいて、仕事でデートをすっばかすこともあるが理解

してくれている物分かりのいい女性のような。唐木田も安いワンルームのマンションで暮

らしているらしい。若い頃に家庭を持ったことがあるが、物分かりがいいとはいえない人

で不規則な刑事の仕事に着いていけず別れたそう。もう結婚する

気はないようで、何が

何でも一人で生きてやると断言していた。

「そういえば、菜奈ちゃんも恋人はいるのかな」

「いませんよ」菜奈は即答した。

「そんなもん、こんな子供におるわけないやろ」唐木田が割り込んで茶々を入れる。

「時代が違うんですよ、唐木田さんとは。今の子は小学生の時から両想いで付き合ったりしてんですよ」

「小学生が付き合って何すんのや。早すぎる。そんなん、日本はダメになるぞ」

「頭固いですねえ。もっと柔軟になんないと、捕まる犯人も捕まりませんよ」

「うつさい、ボケ」牛嶋と唐木田のやり取りは新鮮だった。師弟関係というものがはつきりと出ている。こんな関係、自分にはないなと菜奈は思った。それが少し羨ましくあり、

壊してやりたいとも感じた。

「いけないいけない。そろそろ話を元に戻そう」テーブルの上のアイスコーヒーが全員

空になった頃、牛嶋が本題に戻した。「質問してもいいかな」

「はい」

「ええと、まず当日に散歩していた道っていつものルートなのかな」

「はい、たまに新しい道に行ったりもするけど大体は同じです」

「お父さんの様子にいつもと違うところはあったかな」

「いえ、謹慎になってから元気はなかったけど特別変わったところはないと思います」

「貧血で座り込んだ時、お父さんはどうだった」

「顔色が悪くなつて、今は朝でも暑いし日差しもあるから体調

が悪くなったのかなって思ってた」

「お父さんはそういうことはよくあるの」

「いえ、いたって健康です。でも、謹慎になってからは家に閉じこもってることも多かったですから」

「それで、君が水を買に行っている間に樹海の奥の方へ行つて自ら、ということだ」

「……はい」菜奈の瞳は虚ろに下を向いていく。そこに触れられるのは傷口をなぞられる感覚なのだろう。

牛嶋は息をつき、また間を置こうとした。「飲み物、おかわりはあるかな」

「いや、大丈夫です」

「そうか」牛嶋はそこから今度は菜奈について聞いていった。なんてことはない今どきの

中学生の生活というものについての軽い質問程度の。勉強のこと、友人のこと、クラス

メイトのこと、先生のこと、家族のこと、将来のこと、全て上辺に触れるくらいに聞いて

いった。彼女が父親のような医者になりたいと夢を話したときには家族の絆を感じられた。

理想的な家族がそこにはあり、貞男の自殺に疑問すら生じた。

「あと少しだけ聞きたいことがあるんだけどいいかな」

「はい」

「お父さんは医療ミスの一件から神経が衰弱してるような節は見られなかったかな」

「元気はありませんでした。だけど、基本的にはいつもどおりの優しいパパでした」

「言動や行動に不可解なことがあったりはしなかったかな」

「いえ、あまり仕事のことを家で話したりもしなかったから」

「じゃあ、今回の事は家族にとってはいきなりということだったんだ」

「はい、多分独りで全て抱え込んでしまってたんだと思います。少しでも打ち明けてく

ればよかったのに……」菜奈は瞳をつぶり、そこに力を込めていた。やりきれ

ない思いを自分の中に押し殺しているようだった。

牛嶋は配慮してワントempoを置いてから続けた。「もう一つ聞くけど、お父さんが持つ

ていた拳銃について心当たりはあるかな」

「いえ、全く」

「普段から銃とかの類に興味を持っていたりとかは」

「聞いたこともありません」

「そうか……。ありがとう、これで終わりだ。いろいろ聞いて悪かったね」どう

やら、これといった特別な情報には行き着けなさそうだ。「唐木田さん、何かありますか」

牛嶋の隣で腕組みをして会話を聞いていた唐木田は姿勢を直して口を開いた。「じゃあ、

ちよつくら聞かせてもらいます」

「あなたが銃声を聞いて戻った時、10人から20人が集まっていたと言ってたけど。」

その中に知ってる人間がいたりはありませんでしたか」

「分かりません。正直、顔まで意識して見てなかったです」

「ほな、お父さんはよくパソコンを使う人でしたか」

「はい、仕事場でも家でも必ず使います。書類を作ったりする時に必要だから」

「手紙とかもパソコンで打ったりしてませんでしたか」

「いえ、見たことないです」

「そうですか」唐木田の目は完全にベテランの刑事のものになっていて。相手を洞察して奥底を読み通すような力強いものだった。「最後に一つ、お父さんは周りの人間や患者から恨みをかうようなことはありませんでしたか」

「パパはそういうことはありません。周りからも信頼されていたし、患者さんにも親身になって接していました」

「なるほど」そう言うと、唐木田は息を一つついた。「以上です。今日はお呼び立てしてすいませんでした」

「いえ、ご協力できることならいくらでも」そう言い、菜奈は頭を下げた。

ファミレスを出て牛嶋と唐木田と別れると、菜奈は明らかな嫌悪感を募らせた。刑事のあの質問の内容は貞男の死を自殺と断定してるものではなかった。疑いを持つてるのかもしれない。あれは自殺ではないんじゃないか、と。

「どうして、あんな質問したんですか」菜奈と別れた後、牛嶋は唐木田の質問の詳細を訊ねた。

「何がや」

「まるで、四宮貞男は他殺だって言ってるようでしたけど」

「かもしれない、ってことや」

「根拠は」

「別にありませんよ。でも、四宮貞男が自分で頭を撃った瞬間を見た人間がおらんのや

から自殺は100%とは言えん。可能性がある、ってことや」

「パソコンについて聞いてたのはどうしてですか」

「遺書や」四宮貞男の遺書、現場に置かれていたのは確かにパソ



コンで打たれたものだ

った。医療ミスによる一件で医者としての自信を失い、命をもって遺族に謝罪したいとい

う内容だ。彼の真面目な人柄が伝わる文章といえた。「普通、ああいうのは手書きと決ま

つとるやろ。最期の言葉は自分で書いた手紙で気持ちを振り絞るもんや。なのに、四宮貞

男の性格からしたらえらい淡泊な別れ方と思わんか」

「そう言われれば」確かに、彼の人間性からすれば一つ一つの言葉を丁寧にしたためて

いく手紙が想像しやすい。「でも、他殺となると今までの俺らの考えに合わなくなる気がします」

「そうやな」唐木田の眼光が強まるのを牛嶋は感じた。「一から考え直す必要があるかもしれない」

「今日は楽しいな、すつごく」千鶴の声は浮いてるように上ずっていた。天にも昇りそうな気持ちを静めさせるのに必死になるほど。

「ああ、そうだね」隣を歩く豊永が微笑むと、千鶴は自然と笑顔になる。こんな幸せがあつていいのだろうか、と心配になつてしまふ。

デートの誘いは豊永の方からだった。これまでは部活終わりの帰り道で会つて話すこと

ぐらいだったが、休日に会おうと誘われた。嬉しくてたまらなかつた。8月も下旬になり、

夏休み中に何かしらの進展があればと思っていた千鶴にはまたとな

い思い出になれた。  
デート場所は最寄り駅近くにあるアミューズメントスポットだつ

た。本当はもつと遠く

がよかったけれど、豊永の選んだところを否定することはしない。

自分の希望よりも彼の

選択の方が間違いないはずだ。

買物をしたり、食事をしたり、ゲームをしたりするうちに辺りはもう暗くなっていた。

自宅から離れてないこともあって、夏休みの遊び場には知っている顔がいくつもあるのが

恥ずかしい。学校の同級生とも何度か擦れ違い、その度に隠れなくなるような思いだった。

何度か視線が刺さる気もした。豊永と自分のような人間が歩いてるのだから仕方ないだろ

う。それでも、もう卑屈になるのは止めにしたかった。こんなイケてない自分でも、豊永

はそんな自分を選んでくれたのだから。自分に自信を持つと、と心を強くした。

「私ね、あんまり自分のこと好きじゃなかったんだ」夜20時前、家まで送ってくれる

という豊永と帰り道を歩きながら千鶴が話し出した。「ううん、どっちかっていうと嫌い

だったかも」

「そうなんだ」豊永は終始千鶴のバッグを持ってきていた。オシャレなアイテムなん

か持ち合わせていないので、姉のものを借りてきたものだ。デートに何を持っていけばいい

のかさっぱり分からなかったので、一応にとたくさんの物を詰め込んで重くなってしまう

ったのに何も言わずに持ってくれた。

「見た目もよくないし、勉強も分からないし、運動音痴だし。人に褒められるようなこ

とって何もないの。だからね、いつつも菜奈の横にピッタリくっついてた。菜奈は可愛いし、勉強もレベル高いし、運動も出来る。私にないものを全部持ってるの。菜奈を見てる

と眩しくて、あんなふうになれたらなあってずっと思ってた。でも、私には無理だった。

何をやってもドン臭い子っているでしょ。私はそのタイプだから。自慢できることって言

ったら、菜奈が親友だってことだもん」千鶴は弱い部分を吐き出すように語っていった。

「今は豊永くんもだよ」

「俺が？ 自慢になるのかな」

「なるよ。豊永くんは女子の憧れの的じゃん。そんな人とメールしたり、放課後に一緒に帰ったり、こうやって横を歩いてるのが不思議でしようがないもん」

「そんなことないさ。俺も嫌なところあるし、普通だよ」

「それこそ、そんなことないよ。私に比べれば、そんなの大したことないもん」千鶴は

小さく深呼吸をする。本題に話を進めようと決意した。「あの時ね、豊永くんが一中の前

で私を待ってくれてた時、あれからの事が全部他人事みたいな感じだったの。豊永くんが

私なんか、ってずっと思ってたから。でも、そう考えるのは止めた。今は毎日を素直に

受け止めよう、って思ってる」千鶴はその場に立ち止まる。豊永も3歩進んだところで止

まり、後ろを振り返った。

「好きです」体中の全ての感覚を口元に集めるように言葉を押し出した。「豊永くんの

ことが好きです」

千鶴は豊永に近づき、キスをして逃げるように走り去った。全力で駆け抜け、自宅まで着くと一直線に自分の部屋のベッドにダイブした。あまりにも思いきり過ぎた自分の行動を戒めるように胸に見えない針が刺さっていく。痛いぐらいに動く鼓動を抑えるのに必死になり、自分自身を苦しめていく。

豊永は直立のまま、こちらを見ているだけだった。それでいい、返事はまだ聞きたくない。フラれるにしても、この余韻に浸る時間は欲しい。変わるかもしれない、豊永と一緒にいられたら。菜奈にはなれなくとも近づくことはできるかもしれない。

「今までの事を一回整理してみます」警察の物が溢れるデスクの上に牛嶋は一連の事件の捜査メモや写真を置いていく。それらを新たに一つにまとめるべくパソコンのソフトも立ち上げてある。「始まりは安里市立病院の薬物混入連続殺人事件とします」

「6月13日、夜21時頃に肺がんで入院していた佐藤太吉が重度の薬物数種類を含ませた点滴を投与されて容態急変のち死亡。その3日後、6月16日、夜中25時頃に胃がんで入院していた野戸平蔵が同じケースで死亡。病院内の出入り口にある監視カメラはその前後の録画を停止されています。施錠されていなかった夜間用の出入り口には常に警備員がいたため、ここからの侵入は厳しい。有力とされたのは病院

の内部にいた人間。し

かし、二件目の野戸平蔵の病室に被害者のものではないキーホルダーが残っていました。

そこから持ち主の安里市立第一中学校の1年2組の蔵川京介を割り出し、父親である築介

とともに逮捕。事件当日に病院の警備員をしていた築介の協力があれば、実質どの出入り

口からでも侵入が可能という理論からです。ちなみに、現在も2人は容疑を否認し続けています」

「これがなあ、どうも引つ掛かるんや」唐木田は自身の見解を始める。「取り調べでも接したけど、あの2人はとてもあんな犯罪のできる人間とは思えんどっからどう見ても、

普通のそこらにいる親子や。学歴も大したことないし、あれだけの薬物を入手して使える

だけの知識があるはずない。動機もない。金に困ってたわけでもないし、人間関係でいざ

こざに巻き込まれてる様子もない。そう見れば、あの親子を犯人とする方がおかしい」

「次の事件に行きます。6月26日、夕方17時頃に安里市立第一中学校の校舎裏で四

宮菜奈が1年2組の担任である野竿から強制的なわいせつ行為を受けます。行為そのもの

としては、体を抱きしめられた程度のところで20代男性とみられる人物が助けに入って被害は最小限に食い止められました」

「これも謎や。四宮菜奈を助けに入った人間は未だに名乗り出る気配もない。単に注目

を浴びるのが嫌いな人間かもしれんが、あの子の微かな記憶以外に

何一つの情報もない」

「次の事件に行きます。8月3日、夜23時頃に安里市立病院に当日入院したばかりの内浜そよが容態急変で死亡。担当医師である四宮貞男が投与すべき薬物を誤記したことに

よる医療ミス。病院側はこれを認めて遺族に謝罪しました。遺族は訴訟を起こしましたが、

四宮貞男の自殺の後にその意思を汲み取って現在は金銭による和解に動いています」

「ここがおそらく最大のネックや」

「どういうことですか」

「本当に医療ミスなのか、ってことや」

「まさか、意図的につてことですか」

「俺らはハナから最初の事件が蔵川親子の犯行であることに疑問を持ってた。そして、

途中から四宮貞男に疑いをかけた。薬物の知識もあるし、手に入れる方法もあったはずや。

四宮菜奈が襲われた事件についても、娘のこととなれば説明はつく20代っていう、あ

の子の記憶もおぼろげなものでもある。ただ、四宮貞男が一連の事件の犯人なら、どうし

て自ら医療ミスを起こして自殺までする必要があんねん」

「はい、その通りです。ただ、それ以外に容疑者は思いつかないのが現実で」

「ここは特定の人間じゃなくて、仮定で考えてみるで」唐木田はおもむろにパソコンに

容疑者Aと打つ。「一連の事件の容疑者を仮にAとする。Aの最終目的が四宮貞男の命と

したら、これまでの事件も説明がつく。Aは四宮貞男を苦しめるがために病院の患者に手

をかけ、娘にも手をかけた」

「確かに。それなら、四宮貞男に恨みを持つ人間の犯行ということになりますね」牛嶋

は唐木田の説が有力でないかと思った。「引き続き、四宮貞男の周辺を当たった方がいい  
つてことですか」

「ああ、俺は今のところはこれが最も説明のいく流れや思う。だが、あくまでこれは仮

説でしかない。もしかすると、この犯行はまだ途中の段階で、この先も続いていくのかも  
しれん。そうなったら、四宮貞男もまた犯人の中では通過点にしか  
すぎない」

「そうか、そうですね」

「とりあえずは今出来ることをする。四宮貞男についての捜査を  
続行。病院関係者や担  
当患者を過去まで調べあげるぞ」これは長期戦になるかもしれない。  
唐木田はそう睨んで  
いた。

地元から2駅離れた漫画喫茶に菜奈はいた。人目を避けるために  
はこれぐらい離れた場  
所でない则会えない。この漫画喫茶も今日初めて訪れた。もう来る  
ことはない。たまたま  
自分はこの周辺に用があり、その帰りに寄り道をしただけ。それだ  
けのこと。

17番の個室を指定されると、そこには行かずに25番の個室に  
直行する。誰の視線も  
ないことを確認し、中に入る。「お待ちせ」

「いや、待ってないよ」中にいたのは豊永だった。部活終わりの  
ようで、肌が程よく黒

く焼けている。「用って何かな」

豊永が腰掛けていた1人用ソファを譲ろうとすると菜奈は断り、豊永の膝の上に座った。

密室でのこれだけの密接度にやや感情は昂ぶる。「この前のやつ、どうなったのかなって思ってた」

ああ、と豊永は一つ間を置く。「まだ言っていない」

「どうして」菜奈は上から視線と言葉を投げる。「千鶴にはつきり別れを言うように、って私言わなかったっけ」

「ああ、言ったよ」

「もう計画は終わったんだから、千鶴との関係を保つ必要はない。さつさと別れちゃえばいい。そうでしょ」

「ああ、その通りだ」

「なら、どうして言っていないのかな」豊永の深意を覗くように菜奈は目線をそらさずに

見つめる。「まさか、情が湧いたなんて言わないよね」

「そんなことはない」

「キスされたから」

その言葉で菜奈がどういふつもりで探りを入れてるのが分かった。あの時、菜奈はどこからか自分と林田千鶴のやり取りを見ていたということだろう。

告白されたことも、

キスされたことも、一部始終を。

「ム力つくんだよね、あの女。変に色気ついちゃってさ、自分を何様だと思ってるの。」

本気で一弥となんとかなると思ってんだろうな。自分の立ち位置ぐらいわきまえろ、って

言ってるやらないよ」菜奈は少し感情的にもなっていた。千鶴が豊永



にキスまでするとは予想していなかったから。

「落ち着けよ。もう過ぎたことなんだから」

「一弥が可哀相だよ。あんな汚い唇つけられて、汚れが移っちゃう」菜奈は右手で豊永

の唇を軽くさする。「綺麗にしとかないと」

何度か口づけると、感情が高鳴ってるせいで湧き上がるものがあった。それをなんとか

制御し、矛先を怒りにした。「ねえ、あの女さ、ヤツちゃってよ」

菜奈の言葉の意味はなんとなく理解できた。「いいけど、友達じゃないの」

「友達？ あんなの、一回もそんなふうと思ったことないよ。それに、私に友達なんか

いない」菜奈は豊永の髪を柔に撫でながら言った。「私には一弥しかいないから」

そうか、と豊永は納得した。「俺も菜奈だけだ」

9月1日、新学期の初日は夏休みを引きずってきたように暑い一日だった。復讐という

大きな成果をあげられ、新しい扉を開けた夏に満足している。これからの未来は愛のために生きていく。そのために多くの犯罪に手を染めてきた。

「菜奈、おっはあ」校門の手前で声をかけてきた千鶴は笑顔だった。偽りの関係に迷い

こみ、迷ったことにも気づかないでいる。幸せな奴だ。これから何が起こるかも知らずに。

私たちの未来にお前はいらない。だから、この視界からいなくなってもらおう。

「おはよう、千鶴」菜奈もいくらかの笑みを見せた。千鶴の中では、菜奈はまだ貞男の

死を背負ったままで苦しみから逃れられないでいることになっている。それなのに、自分

だけ豊永と幸せになろうとしている。いい気なもんだ。友情なんて見せかけで、所詮一番

にかわいいのは自分自身なんだろ。

「あれっ、おかしいな」千鶴が下駄箱で何やらキヨロキヨロ探し物をしている。

「どうしたの」何を探してるのかを知らながら菜奈は訊ねる。

「上靴がないの。一昨日の部活のときはあったのに」

「持って帰ったんじゃないよ」

「そんな面倒なことしないよ。何で無いのかなあ」

「誰かが間違えて履いてっちゃったんだよ、きっと」

「えええ、弱ったなあ」参った様子の千鶴を後ろから眺めながら、菜奈は口角を上げた。

私のものに手を出した罰だ。たっぷり痛めつけてあげるよ。

## 第8話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

豊永一弥・とよながかずや（完璧な外見を併せ持つて女性からの強い支持も持つ）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

## 第8話

母さんの葬式の翌日、俺は祖父母のもとへ預けられることになった。

故郷を離れる前に、この風景を覚えておきたいと家の周辺を散歩した。

田んぼが多く、少し歩けば高くそびえる山がいくつも並んでいる。良い意味で田舎だった。この場所が好きだった。離れることが嫌だった。

そう物思いに耽っていると、前から小さな女の子が歩いてきた。数メートルのところまで来ると、それが菜奈だということが分かった。

驚いた。何故、ここに彼女がいるんだと。

もつと驚いたのは彼女が一人でここまで来たことだった。

彼女の家がどこにあるかは知っている。

まだ3歳の女の子がたった一人で来れる距離では到底なかった。電車を乗り継ぎ、たくさん歩き、多くの時間を使わないとならない距離だ。

どうしてと聞くと、一万円札を父親の財布から盗んだと言われた。どうしてもおばさんと一弥くんに謝りたくて来た、と。

ごめんなさい、と彼女は頭を下げた。

菜奈のせいじゃない。きっと、彼女は父親の代わりにここまで来たのだらう。

そんな彼女の思いに大きく心を動かされた。

祖父母のもとへ引越してから生活は質素なものだった。

生活は年金でまかない、学費は顔も忘れた実の父親が払ってくれ

ていた。

生活のリズムは全て祖父母に合わせた。

俺はここに厄介になってるだけ。いるだけの存在だと己に言い聞かせた。

ここを選んだのはあくまで復讐のためなんだ。

祖父母の家は四宮の家から歩いて45分ほどの距離、それが決めた手だった。

それから、俺は四宮貞男を陥れるためだけに生きる人生を始めた。奴の行動を監視し、復讐の計画を立てていった。

祖母は9歳の時に他界し、いつからか祖父も体が弱くなり家に籠りきりになった。

そんなこと、俺には関係ない。

始業式の翌日、昼休みが明ける前にとトイレに行っている間に事は起こっていた。1年

2組の教室に戻ると、4〜5人の女子が千鶴の机を囲うように立っている。何かをしてる

のは分かったが、正面にいた背の高い女子の背中では詳細は見えなかった。軽いざわめきが

あり、「二度と近づくんじゃねえぞ、いいな」という強い捨て台詞とともに女子の団体は

教室から去っていく。どれも目にしたことのない顔ばかりだった。

他のクラス、もしくは

他の学年の団体なのだろう。

何があったのかと千鶴の机に向かうと、そこには悲惨な画があった。五限目のために用

意してあった彼女の地理の教科書やノートがケチャップまみれになっている。一本分を丸

ごとかけられ、教材どころか机のいたるところが赤く染まっていた。あまりの非情な光景

に千鶴は顔を下に背けている。怒りや泣きたい気持ちを抑え、なんとか正常を保とうとしている。

菜奈は掃除用具入れから雑巾とバケツを持ち出し、千鶴の机を拭いていく。やられた本人がそれをするのは惨めすぎる。他の人間がやってあげれば、まだ報われる。「教科書と

ノート、もう使えないね。こうしちゃおっか」

教材をバケツに漬け込み、水びだしになったよれよれの物をゴミ箱に捨てる。「大丈夫

だよ。教科書は見せてあげるし、ノートも後で私のをコピーとるから」

その様子を目にするしかできなかった千鶴は親友の心遣いに大きく心を揺らされた。

彼女の大胆な行動が救いになった。「菜奈……」

「あつ。新しい教科書も買わないとね。帰りにどつか寄らないと」

菜奈は目の前の親友

に起こった無残な光景に全く動じなかった。それどころか、適切といえる対処をしていく。

本当は彼女自身、四宮貞男の事で深い悲しみにいるはずなのに。どれだけ彼女は強いんだ

ろうか。それに比べて、自分はなんて小さいんだろう。こんなに近くににいるのに、いつも

菜奈は遠い存在に思えてしまう。

「千鶴」菜奈の呼びかけに振り向くと、彼女は隣で明るく爽やかな笑顔を見せてきた。

「スマイル、スマイル」

「うん」千鶴はようやく不器用に笑った。

四宮家に上がると適度に冷房が効いていた。外から来たばかりの

唐木田と牛嶋には少々

物足りないくらいだった。が、ずっとここで過ごしている菜子にとってはこれが適温なのだろう。

リビングに通されてソファに腰掛けると、飲み物を用意してきます。と彼女はその場

を立ち去る。周りを見渡してみると、彼らの性格に沿ったようにしつつくないインテリア

が散りばめられていた。4LDKの物件を家族のそれぞれの部屋と客間に割り振ってるよ

うで、普段は客間を夫婦の寝室にしているらしい。貞男は仕事、菜奈は学校の物が多くて

部屋をうまく使っているが、菜子是一部屋を埋めるだけの物がなくてスペースが余ってし

まっているようだ。そうこうしているうちに菜子は3人分の麦茶を持って現れた。「こん

なものしか出せませんがよろしいでしょうか」

「いえ、気を遣われなくて結構です」対応はなるべく丁寧にした方がいい、と決めた。

貞男の死から3週間も経ち、ようやく菜子の話を聞けることになった。精神がやっと安定

になったばかりで、またいつ不定になるか分からない。相手の首根っこを掴むような泥く

さい聞き込みは好ましくないだろう。「いくつか質問させてもらいます。が、ゆっくりでい

いので答えていってください」

はい、と菜子は身構えた。取り調べと聞いて、リラックスは出来ないのだろう。彼女に

は警察が貞男の死の当日に取り調べを行っている。その時の印象から、そう構えてしまう

のだろう。一度植えられたものを払拭するのは難しい。そういえば、

自分たちもこの家に

来るのは3回目だが、家族3人それぞれに聞き込みに来ていることになる。菜子に警察で

受けた取り調べとリンクさせてしまうのも仕方ないのかもしれない。

「最初に、事件があった時の一連の事を聞かせてください」

菜子はすぐには喋りはじめなかった。記憶の一つ一つを紡いでいく作業は彼女にとって

辛いものなのだろう。ゆっくりと頭の中で整理を続け、言葉にしていく。「あの日は7時

半あたりに起きました。その後に彼と菜奈も起こしました。私は朝食の準備を始め、その

間に彼と菜奈は散歩に出掛けて。富士に毎年旅行に行くと毎日そういう流れで、あの日も

そうでした。いつもなら1時間ほどで帰って来るんですけど、なかなか帰って来なかった

ので心配してたら電話がかかってきて。事件のことを聞いてもあまりに現実的でなかった

ので病院に行くまでは何かの間違いなんじゃないかと思い続けてました。実際に彼の変わ

りはてた姿を見て、本当のことなんだと認識しました」

四宮菜子は時折目をつむりながら話していた。愛する者の亡き姿を思い出していたのか、

思い出してしまった残像を消そうとしていたのか。彼女を悲痛な思いにさせてしまってる

のは感じた。「ありがとうございます。では、いくつか聞かせてもらいます」

「当日、旦那さんの様子にいつもと違うところはありませんでしたか」

「いえ、特には」

「彼は亡くなる前に貧血になっていたそうです。日頃からそういうことはあるんですよ」



うか」

「そういったことはありません。医者ですから健康には気を遣っていました。確かに、

謹慎を受けてからは元気がありませんでしたが、常時そういうことではありません」

「医療ミスの一件から元気がないと言われましたけど、具体的にはどういう変化があつたんでしょうか」

「なにか、ネジが抜けたようでした。仕事に多くの神経や時間を注いでましたから、そこがポツカリと抜けると精神的な部分でもそうなってしまふんじゃないでしょうか。事が大きかったので、あまり突っ込んだことはせずに今は時間を置こうと見ていました」

「言動や行動に不可解なことはありませんでしたか」

「いえ、どちらかというと何もせずにただ時間を過ごしていました。殻に入り込んでし

まうように。口数も減り、部屋にこもてるが多かったです」  
牛嶋は息をつき、麦茶を一口飲む。「彼が持っていた拳銃について、何か心当たりはありますか」

「いえ、何も」

「普段から銃とかの類に興味を持っていたりとかは」

「全く、何も知りません」

そうですね、と牛嶋はつぶやく。菜奈と同じく菜子も重要な手掛かりを握ってはいない

ようだ。「これで終わりにします。ありがとうございました」

隣に座っていた唐木田に話を振ろうとしたが、その前にもう話していた。「最後に

一つ。旦那さんが周りの人間や患者から恨みをかうようなことはあ

りませんでしたか」

「無かったと思います。仕事の話は家ではあまりしませんでしたけど」

分かりました、と唐木田はうなずく。「失礼させていただきます。今日は家まで押しかけてすみませんでした」

四宮家を後にすると、唐木田は大きく息をついた。「これってもんは出なかったなあ。

何か出てくれれば、って考えは甘かったみたいや」

「やっぱり、四宮貞男は自殺なんですかね。僕らの思い違いなのかも」移ったように牛

嶋も息をつく。こうやって、警察の出した結果に背くような行動をすることが無意味なん

じやないかと思えるくらいに捜査に進展はない。

「そんなこと言うな、若いの」唐木田は怒りを示すような声をあげた。「自分の信念を

信じられんようになったら刑事も終わりやぞ」

「はい、そうですね」牛嶋は先輩刑事の檄に背筋を伸ばした。

「その傷、どうしたの」豊永は千鶴の右の膝にできていた傷を見つけて言った。まだ作

られて間もないと思われる痛々しさがあ、血の流れたであろう赤い滲みがあった。

「なんてことないの。体育の授業の時に走ってたら転んじやってホントにドジなんだ

よね、私って」笑いながら言ったが、心は逆だった。本当は廊下を歩いてる時に向こう側

から歩いてきた女子に足を出されて転ばされた、とは言いたくても言えない。二学期にな

ってから続く嫌がらせの理由が分かっているからだ。それは他でも

ない、今ここにいる豊

永が原因だった。彼に想いを寄せている女子は多い。その女子たちが寄ってたかって千鶴

に攻撃をしているのだ。これまで特定の彼女を作ってこなかったはずの豊永の相手がなぜ

林田千鶴なのか、と。これが手の届かないような美男美女のカップルならば諦めもつくの

だろうが、自分よりも見劣りする女が隣にすることが女子たちの心にわだかまりを残して

しまった。まだるい千鶴を目にしていると「なんで、この女に」と、痛めつけずにはいら

れなくなってしまうのだろう。毎日数回かのイジメを校内外で受けるようになった。

「ちゃんと手当てはしたの」

「うん、菜奈が保健室まで着いてきてくれた」菜奈はイジメられる場面に居合わせると

相手に立ち向かっていつてくれる。自分が臆病で内に閉じこめてしまふ言葉をしっかりと

吐き出す。保健室では菜奈に「やられてるんだから千鶴も反抗しないと」と強めに言われ

てしまった。そんなふうにしてるから相手に軽く見られてしまふんだ、と。

「そんなのすぐ治るよ。ほら、俺もサッカーで生傷がたえないから」

「ああ、そうだね」

街灯と通り過ぎる車の照らす光の中を歩く。走りすぎていく車の音はあるが、歩道には

人通りも少なく静けさを感じる。デートはまだ1回しかしていないので、こうして放課後

に一緒に帰ることがほとんどだった。夜に歩くのは慣れたが、隣に

豊永がいるのは未だに慣れない。

「ねえ、この前のことなんだけど」

その言葉に体の中でドクンと波打つものがあつた。この前、という単語が意味するものはすぐに分かりえたから。この前のデートの時に自分が言った事、ということだろう。

「もう少しだけ考えさせてもらってもいいかな。部活やってるからさ、いつもこんなふうにしか会えないでしょ。これからそうだと思うんだ。それって付き合うつていえるのかな、って感じて。もうちょっと自分なりに答えを出したいんだ」曖昧な言葉だとは思つたが、これでいいだろう。適当なことを言っておけば、彼女は引つ掛かる。

「うん、分かった」

「悪い、ホントに」

「ううん、私のことは気にしないでいいから」

それから10分ほどで2人は別れた。豊永が2つ先の角を曲がるまで千鶴は手を振っていて、彼もそれに応える。その角を曲がったところで掛けられた声は白けた様子だった。

「私のことは気にしないでいいから、だって。健気だねえ」そこにいたのは菜奈だった。その言葉からして、さっきまでの千鶴とのやり取りを聞いていたのだろう。

「あれでよかったのかな」

「いいよ。あの子は何も疑いやしないんだから」

「菜奈のこと、ずいぶん信頼してるみたいだけど」

「うざっただけなんだよね、ああいうの」菜奈は息をつき、腕

組みしながら嫌そうに答える。「馬鹿正直な人間が素直に生きていくとどうなるか、思い知ればいいんだよ」

「ああ、もう22時ですよ」刑事部の壁にある昔ながらの古い掛け時計を眺めて牛嶋は言いこぼす。髪を掻き、あくびをすると目の前にある膨大な資料に嫌気すら覚える。安里

市立病院の職員と関係者と患者のデータだ。四宮貞男が着任してからの20年ほどのもので、患者も彼が担当した中で主な人物だけを対象としたが充分すぎる人数だった。通常の業務もこなしながら、合間を縫ってこなす作業はいたく時間が掛かる。何度とめげそうになったが、止めるわけにない。警察はもう唐木田と牛嶋しかこの件を追っていない。自分たちでなんとかするしかないのだ。刑事としての信念といえは聞こえはいいが、単なる身勝手な行動かもしれない。「どうしますか。今日のところは帰りましょうか」

「お前は帰ってもいいぞ。俺はキリのいいところまでやってくから」唐木田はこちらに目もくれず、眼前の資料に向き合っていく。長くやっている刑事の執念にも似た経験に若手は感服するのみだ。男の目から見れば学ぶべき姿だが、女の目から見れば彼から去っていくのも仕方ないのだろう。

牛嶋は結局、持ちかけたスーツの上着をまた椅子に掛けなおして座った。気合いを入れようと頬を手のひらで叩き、デスクの端に寄せた資料を取り出す。

先輩刑事の職人魂を見

せられて帰るわけにはいかない。「俺ももうちょっとだけやってこ  
うかな」

「別にこつちに気を遣わんでもええぞ」

「いえ、急にやる気が出ただけです」

四宮貞男の医師としての経歴の中で今回のような目立った医療ミ  
スは見受けられない。

仕事には誠実な人間で患者はもちろんのこと職員や関係者にも怨恨  
を持たれるどころか信

頼の厚い医者だったといえる。職員に話を聞いた中でも彼に否定的  
な意見はなく、将来的

には院長になるであろう人間だったという意見もちらほらあった。  
誰もこんな事態になる

など想定していなく、彼がこんな重大な医療ミスを犯したことが信  
じられない、あまりに

真面目に受け止めすぎたのだらうという同情的な言葉が多かった。

「唐木田さん、ぶっちゃけ今回の事件をどう見えますか」ふと思  
いついたように牛嶋は  
手を止めて言った。

「どう、って何やねん」

「唐木田さんの中では今のところ誰が怪しいと思ってるのかな、  
と思いますして」

「ふうん、ちなみにお前はと思うとんねん」

「俺は……病院の職員じゃないかな、と。今回の一連の  
犯行が同一犯によるも

のだとしたら、それが最も考えられるし。でも、何の根拠もありま  
せん。これだけ追って

きてるのに何の決定的なものも掴めてない」5つの事件の中で3つ  
が病院内で起こったも

のであることからそれがスムーズな考え方だった。しかし、これだ

け大胆な犯行を続けて  
いるのに何一つの落ち度も残していないとは相当に周到な計画の下  
で行われたものなのだ  
ろう。

「まあな、それが素直な考え方やろ」唐木田も最初はそう思っ  
ていた。いや、そうして  
しまえるのなら楽にできるのが正直なところだった。ただ、今回の  
犯人はそんな一筋縄に  
いつてくれる相手ではない。二転も三転も考えを変えていかなけれ  
ば、おそらくその人間  
に辿り着くことはないだろう。

「唐木田さんの見解は」  
「今回の事件は実に難解や。俺の刑事人生においても一番か二番  
を争うレベルになる。」

この犯行を考えた人間はかなり頭のいい奴やろう。ずいぶんと用意  
周到に練られた計画と  
いえる。俺らはよく頭をこらさないと犯人の思うツボになってしま  
う」最初の事件から3  
ヶ月が経つ。世間的にはもう過去の事件として記憶の片隅に追いや  
られてるかもしれない  
が、そうさせてはならない。犯行からして犯人はよほどの思いを抱  
いていたに違いない。  
ならば、こちらもそれに劣らぬ執念を持たなければ相手は見えてこ  
ないはずだ。「最初の  
2つの事件からや。犯行当時に監視カメラが故意的に停止されたこ  
とから犯人はいずれか  
の出入り口から侵入した。窓から侵入した形跡はないことからそれ  
が有力といえる。夜間  
用の出入り口には警備員がいるから侵入は無理に等しい。とすると、  
残りの4つの出入り

口からということになる。ここから病院内に入るためには絶対的に必要なものがある。鍵

がないと入れない。つまり、犯人は病院の鍵を手に入れることのできる人物や。これは患

者やたまに来るぐらいの関係者にははつきり言って難しい。職員か警備員か、ということ

やろう。もしくは、犯人は最初から病院内にいた。そのカモフラージュとして監視カメラ

を操作したともいえる。この場合、どの人物には犯行は可能といえる。病院から出て行く

だけなら鍵はいらんからな」

唐木田の熱弁は続く。「その次の四宮菜奈が学校で襲われた件に關してだが、よくよく

考えるとおかしい。犯人が野竿ゆう教師からあの子を助けた例の奴としたら、謎が多い。

犯人は野竿が四宮菜奈を襲うことを予め知っていたとしか思えない。そうでなければ、あ

の場所にいるのはどうしてや。四六時中、四宮菜奈を張ってないとあの場面に遭遇するの

は至極難しい。あれは本当にたまたまあそこに居合わせただけの人間が助けただけなのか

もしれんが、それにしてもヘルメットをしてグローブまで着けてるなんてちよつと考えら

れん。私は見られると困ります、言うてるような格好や。野竿と犯人に接点があったとも

思えるが、野竿に取り調べたかぎりではそれはない。あの男は精神的にやられていた。い

つ神経が触れるかも分からん状態なのに他の人間の綿密な計画に乗るだけの余裕なんか到

底ない」ということは、犯人は四宮菜奈を張っていた人物というこ



とか。その過程で野竿が彼女に暴走する場面に出くわし、自ら彼女を助けた。どうして、四宮菜奈を助けたのだろつか。四宮貞男に恨みを持ち、安里市立病院の患者を殺した犯人なら彼女が野竿の手にかけられるのはむしろ願ったりなのでは。犯人は彼女が苦しむ姿を望んでいるはずだ。なのに、リスクを取ってまで彼女を救った意図とは何なのだろう。四宮菜奈を痛めるのなら、他の人間ではなく自分自身でなければ気が済まないということなのだろう。だとしたら、なおさら犯人と野竿に関係性はないといえる。この事件もまだまだ謎は深い。

「その次の四宮貞男の医療ミスの件や。事件当日に入院したばかりの患者に異変、原因はカルテに書かれてあった投与薬物の誤記。四宮貞男の意見は、間違った薬物名を書いた記憶はないが自分の無意識のうちにそう書いてしまったのだろう。実際にカルテを読んで患者に薬物を投与してしまったのは安里市立病院に入って1年目の新人の看護婦。カルテを読んで、記載された薬物に全く疑いを持たずに投与してしまった。これが四宮貞男を陥れるための犯行だとすると、考えられるのは投与薬物の欄を誤記した偽のカルテとすり替えたということやろう。これが出来るのは、正直病院の職員としか思えん。安里市立病院のカルテを手に入れ、偽のカルテを作成し、四宮貞男のいない間に本物と偽物を入れ替えることが出来て、誤記された薬物を疑うことなく投与する新人看護

婦がその患者の担当で

あることを知っている人物。こんなもん、職員以外におるわけない」  
なるほど、確かにそ

うだ。唐木田の意見は事件の的を突いている、と思った。

「最後は四宮貞男が銃身自殺した件。あれもおそらくは犯人は彼を着けていたのだろう。

四宮貞男が独りきりになるチャンスを探し、朝の散歩の時に運よく娘が離れた。その機に

近づき、樹海の中へと連れ込んで自殺のように見せかけて殺したんや」犯人の執念を感じ

られた。そこまでして四宮貞男を狙った人間とは一体。

一気に喋りとおした唐木田はデスクにあった缶コーヒーをグツと飲み干した。「まあ、

あくまで俺の見解や。これが正しいっていう証拠はない」

「唐木田さんの話を聞くかぎり、犯人は病院の職人と考えられま  
すね」

「そうやるな。それが1番考えやすい」

「犯人の標的が四宮貞男なら、一連の犯行はすでに終結されているということですか」

「四宮貞男が狙いならそうやる」唐木田は遠くの掛け時計を眺めている。時計は22時

20分を指していた。「薬物連続殺人事件の時のアリバイがなく、  
四宮菜奈の強制わいせ

つの事件と四宮貞男の銃身自殺の時に病院で仕事をしていない職員  
の中にいる」

牛嶋は唐木田の見解を重要な推理だと感じた。彷徨っていた迷宮  
の中の事件を現実へと

引き戻してくれる大きな前進だ、と。「その線で探ってみましょう。  
よ。絶対、何かしらの

情報が得られるはずですよ」

おい、と目の色が明るくなっている牛嶋に唐木田が呼びかける。  
1枚の資料を彼に渡す。

「医療ミスのカルテや。病院の人間と筆跡鑑定してみい」

「はい、分かりました」牛嶋の声は強く聞こえた。

1年2組の教室に甲高い笑い声が響いた。見てみると、4人の女子が水色のホースや錆

びれたバケツを手にながら笑っていて、それを奥にある掃除用具入れに投げ込んでいく。

何が起こったのか予測はついた。イジメもそこまでエスカレートすると周りは笑えない。

笑っているのはやっている当人たちぐらいだろう。そう思いながら、菜奈は心の中で笑い続ける。

彼女は次の授業には現れなかった。どこにいるんだろうか。まだトイレにいるのか、そ

れとも校内のどこかに隠れるように身を潜めているのか。どっちだろうと知ったこっちゃ

ない。逃げ回ってないで、自分のことは自分で解決すればいい。

それが出来ないような人間だからそんな目に遭うんだよ。

結局、彼女は三時限目と四時限目に来なかった。よくそんなに何もせずに時間を潰せる

もんだ。昼休みに林田千鶴はようやく2組の教室に姿を見せた。髪の毛から制服からまだ

濡れたままで湿っている。顔を伏せたまま負のオーラを全開にして千鶴はこっちに来了た。

左隣の自分の席に座ると、彼女はこちらを向いて細い声を発する。

「菜奈、帰りたいんだ

けど一緒に帰ってもらってもいい」

「いいけど………具合悪い？」

「うん、ちよつと」

具合が悪いんじゃないじゃなくて水をかぶって寒いだけだろ、身体的な具合じゃなくて精神的な

具合が悪いんだろ、と言つてやりたい。「分かった。帰ろうか」

帰る支度をしている間もいくつかの視線が向いているのが気になった。荷物をまとめて

教室を出ようとする、その中の1人がこちらに聞こえるぐらいに意図的に音量をあげた

独り言を発する。「あああ、陰気臭いのがいるとこつちまで萎えるんだよねえ」

無視しようとしたが、向こうは気がすまないのか続けてきた。「何か言えつつんだよ、口があんなら」

さすがに我慢ならないところだった。菜奈は強く言葉を投げつける。「ちよつと、言いすぎなんじゃないの」

はあつ、と白を切るように相手は笑いながら言う。「ごめん、独り言だから気にしないでよ」

「千鶴に水かけたんでしょ。謝んなさいよ」

「はっ、何の事かさっぱりなんですけど」

「とぼけないで。あんた達でやったんでしょ」

「うわっ、ひどくない？　なんか証拠でもあるんですか」

菜奈は押し黙る。証拠はない。千鶴は水をかぶってるし、奴らは掃除用具を持つてはい

たが、その場面を目撃したわけではない。

後ろを振り返る。千鶴はまだ顔を伏せたままだった。あれだけ野次られてるのに、まだ

自分の中で怒りを押し込めている。お人好しなんかじゃない。人を良くし続けてるうちに

怒る勇気を失ってしまったただけだ。優しさでもない、ただの根性無しだ。

ねえ、と相手グループの中の誰かが言った。「菜奈さ、なんで千鶴なんかと一緒にいんのさ」

表向きの四宮菜奈には愚問だ。利用するため、という裏の面は押し殺す。「友達だからに決まってるじゃん」

「なんでさあ、こんな子と友達なの。絶対、損してるよ。菜奈、もつと良いやつらと同じグループになった方がいいよ。なんならさ、ウチらんとこに来なよ」

菜奈は何も言わず、千鶴の手を取って教室を出た。そのまま何も言わずに歩き続ける。

あまり良い雰囲気とはいえない。そんな状況に千鶴は次第に不安になってくる。こういう

時なら大概は優しく気遣いの言葉をかけてくれるはずなのに今日は違う。菜奈は何を考え  
てるんだろっ、と知りたくてたまらなくなる。

「菜奈」痺れを切らして千鶴が声をかける。学校を出てから、もう結構な距離を歩いていた。

「なあに」前を歩いていた菜奈は立ち止まって振り返る。優しい顔はしていない。どちらかといえば、不機嫌な顔に見える。

「怒ってるの」率直に訊いた。

「別に。怒ってないよ」明らかに怒ってる言い方だった。菜奈が怒りをあらわにしてるのは何回か見たことがある。理不尽なことがあったり、湿った雰囲気になると出やすい。

今は何に対してなんだろう。自分をイジめてる人間にだろうか、イジめられてる自分に

だろうか。前者であってほしいけど、後者な気がする。落ち込んだりしてると菜奈は笑顔

で励ましてくれるが、あんまりジメジメしているとこうして怒られる。いつもは頭を撫で

てくれるけど、たまに背中を叩かれる。

「菜奈はどうして私と友達になってくれたの」

「何それ。どういうこと」

「私、よく下向いてるし、勉強できないし、運動できないし、見た目も良くないし。私は

菜奈というプラスになれるけど、菜奈は私といってもプラスにならないでしょ。正直、他

の女の子と一緒にいる方が菜奈にはいいんじゃないかって何度も思ってきたもん。どう

して、いつも私といってくれるんだろうって」心の底を素直に吐露した。これまで何度と思

ってきた不相应さを。

「そんなふうには思わないですよ。私はいつも千鶴といたいから一緒にいるんじゃない。それ

で充分でしょ。プラスとかマイナスとか言っただったら、私は2人だけでいるだけでプラスに

なれるんだよ。変に考えないですよ」菜奈は強く投げ捨てるように言葉を吐き出した。千鶴

に対し、嫌気を示すほど真剣に言い捨てた。「いい加減にしてよね。そんなふうには言っ

ただたら、ホントに他のグループに入るから」

菜奈は千鶴を突き放し、早歩きで帰っていつてしまった。千鶴は何も言い返せず、菜奈

を追いかけることもできずに立ち尽くす。自分の卑屈さが嫌になる。

いくらイジめられて

腹が立っていたとはいえ、たった一人の親友まで怒らせてしまった。ああいうことを彼女が好まないのは分かっていたのに。

思えば、菜奈は病院の連続殺人事件の時も野竿に襲われた時も貞男の医療ミスや自殺の

時も乗り越えてきた。抱えきれないほどの悲しみに駆られるはずなのに、それを仕舞い込

んで笑顔を見せてきた。そんな菜奈の強さに比べたら自分なんて弱々しい。イジめられて

も受け入れるだけで、菜奈のように立ち向かう勇気などない。それどころか、抱え込んだ

気持ち彼女に吐き出してしまった。菜奈と自分じゃ釣り合わないことなど百も承知だ。

それでも、彼女は自分と友達でいてくれてるんだ。林田千鶴という人間を理解した上で一

緒にいてくれてるんだ。なのに、そこを掘り下げるのはタブーのようなものだ。傷つけて

しまった、菜奈を。どうしよう。

「千鶴ちゃん、君の嫌な話を聞いた。学校や登下校で女子からイジメられてる、ってい

う話だ。しかも、その根源が俺にあるっていうことも。正直、何て謝ったらいいか思いつ

かない。俺のせいで君がそんなひどい目に遭っているなんて。君をイジメてる奴らが腹立

たしい。でも、それを知りもせずに普通な顔をして君と会っていた自分自身も腹立たしい。

君がどんな事をされてるのかも聞いた。耳を塞ぎたかった。ただ、それは出来ない。そう

させてしまってるのは俺なんだから。これ以上、君がそんな事をされていくのは耐えられない。だから……何も言わずに別れてもらいたい。こんな決断はしたくなかったけど、こうなってしまった以上はしょうがない。俺が側にいる事で君を傷つけてしまった。全ては俺の責任だ。何の罪もない千鶴ちゃんをこんな状況に追い込んでしまった事、本当に申し訳ないと思ってる。俺の事は嫌いになってもかまわない。それだけの事をしてしまったんだ。これから、もっと知り合っていけたらと思ってたのに。こんな別れ方しかできなくてごめん」

菜奈が去った後、立ち尽くしていたときに来たメールだった。豊永からの別れのメール。千鶴がイジメられてる事が人づてに伝わり、苦渋の決断をしたという内容だった。頭の中が真っ白になり、もはや何が起こってるのかも把握しきれない。立て続けにいくつも訪れてくる不幸に体が付いていけず、受けつけぬよう拒んでいく。信じられない。信じたくない。信じない。そう自身に植え付けていく。それで何の現実の変化もないことは分かりながら。多様に入り混じる感情に思考をこじらせて、千鶴はただそこに立ってるのがやっとの状態だった。

気がつけば、辺りはすっかり暗くなっていた。夜の20時前。早退はしたが、家に帰ら



ずに図書館で時間を潰した。知っている人間のいるところにはいたくなかった。学校ではイジメられ、菜奈とはケンカしてしまい、豊永にはフラれてしまった。図ったかのように続いた出来事に頭の整理は追いつかず、一人になる時間が欲しかった。本は適当に選び、中は開いているが全く読みもせず、怪しまれないように定期的にページをめくることだけは意識した。数時間と考えはしたが結論は自分の弱さに行き着く。林田千鶴がもつと出来のいい女だったら、豊永一弥との関係でイジメられたりもせず、それによって菜奈や豊永が離れていくこともない。所詮は自分のせいなんだ。全て、出来の悪い自分のせいなんだ。

その時だった。急に強い力に引き寄せられる。俯いて歩いてる隙に、誰かが突然後ろから襲ってきた。真後ろにいたのでどんな人間かは分からなかったが、抱きしめられたときの腕の感覚と身長差から男性であるのは感じれた。回りきらない頭の中に「犯罪」という文字だけが鮮明に浮かぶ。恐怖が体全身を一瞬にして包む。声を張り上げようとしたが、ショックでうまく出てこない。後ろから胸のあたりを力強く締めつけられて苦しくなる。身の危険を最大限に感じ、なんとかしなければと必死にもがく。男の腕が少しずれた隙に息を深く吸い込もうとすると、口を何かで封じられた。息ができない、苦しい、と思った。数秒後には意識が飛んでいった。

きらきらひかる おそらのほしよ  
まばたきしては みんなをみてる  
きらきらひかる おそらのほしよ

きらきらひかる おそらのほしよ  
みんなのうたが とどくといいな  
きらきらひかる おそらのほしよ

獲物を仕留めた満足感に身を奮わせると、体の中に「きらきら星」を流した。きつと今、隣にいるあなたも流してくれてるのだろうと思いきや不意に笑みを浮かべた。

人間には決められた枠組みがある。それを破った者には容赦なき制裁を加え、身をもつて叩き込む。

## 第9話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

豊永一弥・とよながかずや（完璧な外見を併せ持つて女性からの強い支持も持つ）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

## 第9話

菜奈とは年に数回だけ会っていた。

友達と遊びに行くといえはいくらでも内緒で会えたが、それはしなかった。

知っている人間に2人の関係がバレてはならなかった。

計画の進行の妨げになることはしなかった。

菜奈もそれは了承してくれている。

四宮貞男が憎いと告げると、彼女は「私も」と言ってくれた。

俺があいつへの復讐の計画を告げると、彼女は「協力する」と言ってくれた。

本当にいいのか、と聞いた。

あいつは私の好きな人の母親を奪った、殺してやりたい、と言ってくれた。

それから、孤独に生きる選択をした俺に支えが出来たんだ。

四宮貞男を消し、四宮菜奈と生きる未来を選んだ。

菜奈は相棒という言葉以上の働きをしてくれた。

誰より四宮貞男の近くにいる人間として、あいつを徹底的に近辺からマークした。

医学の勉強をし、病院内にうまく潜り込んでくれた。

医師や看護婦の情報、患者の情報、薬物の情報、病院の構造、全てが計画に役立った。

俺の計画は菜奈なしでは完璧にはなれなかっただろう。

彼女がいなければ、きっと俺は幼稚な殺人犯になっていたはずだ。警察にすぐ尻尾を掴まれるようなやり方しか思いつかず、あっさり御用となっている。

おそらく、それはそれで良しと思っていたんだろうけれど。

刑務所生活になろうとも過去の傷を抱えたまま生きるより根源を断ち切った方がマシだ。

でも、今は違う。

菜奈に生きる希望をもらえた。彼女と歩く未来が俺の最良になったんだ。

そのためには計画を完全にする必要がある不可欠になった。

実行までに数年を要することになってしまったが、全ては未来のためだ。

愛する人と手を取り、一歩ずつ歩む幸せな日々のために。

その邪魔をしようとする奴がいるのなら、どんな手を使っても退いてもらう。

「昨夜晩、安里市内の自動車工場に女性が倒れていたのを従業員が発見しました。女性

は市内の学校に通う女子高生で、衣服が脱がされた状態で見つかり、何者かに後ろから襲

われたと供述しており、警察は詳しい捜査にあたっています」報道番組で伝えられるニュ

ースを菜奈は睨むように見つめていた。また安里市ですか、一体どうなってるんですか、

とキャスターたちが口を揃えて最近の安里市で続く事件に辛口ともいえる持論をぶつけて

いく。市長も責任を取るべきだ、新しい市長に交代した方がいい、などの外的な意見を

持ち上げる馬鹿すらいた。市長が変わったぐらいでどうにかなるわけないだろう、お前も

いっそ痛めつけてやろうか、と心の中で噴火させる。外野の人間に内野の人間の感情など

分かりはしない。無差別なんかじゃない。全てに意味があって為さ

れてるんだ。

「早く犯人が見つかってくれるといいわね」菜子はダイニングテーブルに入れたばかりのコーヒーを2つ置く。食欲がないから朝食はいららないと言うと、コーヒーぐらい飲みなさいと用意してくれた。菜子自身も貞男の死から食欲は落ちたままだった。今も最愛の夫の死を大きく引きずっていて、家事はこなせるが気力そのものが満ちていない。菜奈も父親の死に対し、表面上は傷を負ってる演技を続けていた。元気のない部分を取り繕ったり、空元気なところも見せたり、菜子への気遣いも忘れずに目を向けた。彼女を見ていると、少なくとも心苦しさが生まれたりもする。貞男への復讐は同時に何の罪もない彼女に心痛のかぎりを与えてきた。菜子はまったくの被害者だ。元々の貞男の不倫においても彼女は今も何も知らない。最愛の夫が他の女に走り、あげくにその女を死に至らしめたなんて思いもしてない。そして、目の前にいる娘がその女の息子とともに復讐を果たしたなど微塵も。

それでいい。あなたは何も知らないことが最も良い。

「ええ、林田さんは諸事情により、しばらくお休みすることになりました。自宅で静養していますが、人に会える状態ではないのでお見舞いも控えて欲しいとのこと」安里市立第一中学校1年2組の教室は静まりかえっていた。担任の穂村の言葉に全員が昨日の事件をリンクさせる。詳細は隠した発言だったが、それを今朝の報

道と重なるのは容易な

ことといえた。この事実はまだたく間に学校内外に広まっていくだろう。千鶴をイジメて

いた人間はどう思うだろうか。おそらく、彼女に手を掛けていた人間のうちの誰かしらに

よる仕業ではないかと疑うはずだ。そんな恐ろしいことをするなんて、私はそんなつもり

で手を出していたわけじゃなかったのに、豊永一弥に気にいられたことへの腹いせで軽く

痛めてやろうと思ったただけなのに、どうしてこんな事件にまで発展してしまったんだ、私

も林田千鶴へのイジメを盛り立てたことで少なからず加担したことになってしまうのだろ

うか、彼女をこんな目に遭わせてしまったことに一握りでも関わったのだろうか、と危惧

を覚える。そして、そんなはずはない、勝手に事が荒立ってって一人のとち狂った人間が

犯罪に手を染めたただけだ、私は悪くない、と自分の中で自身を正当化させる。大きくなり

すぎた事の重大さに気づき、人は現実と対面することを拒む。向き合えもしないなら、そ

んな現実を作るんじゃない。受け入れられないのなら、そんな現実を作るんじゃない。

穂村が去った後の教室は千鶴の話で騒がしくなった。事件についてのこと、それに対する

推測が飛び交っている。菜奈のところへ直接聞きに来る者もいた。ダイレクトに聞きは

せず、「千鶴、大丈夫かな」と間接的に。面倒くさいから間接的に返答する。

昨日、千鶴に水をかぶせた女子グループに目をやる。一様に不安

げな表情を浮かべて話

している。まずいんじゃないやねえ、調べられたらどう答えるの、なんか罰とか受けるのかな、

とイジメが調査された場合の懸念をしている。大丈夫だろ、適当なこと言えばいいんだよ、

ウチらはそんな悪いことしてねえって、と自身を正当化していく。つまらない人間だ、と

例にならった反応をする女子たちに菜奈は息をつく。

「ってか、お前らがやったんじゃないやねえの」「男子のグループがその女子グループに言い投

げた。こういう心ない言葉をこの状況で投げられる人間もいるものだ。

「はあっ、ふざけんじゃねえよ」当然、女子グループは怒りをもつて反論する。次第に

言い合いになり、お互いに引かない状況が続く。周りのクラスメイトは見て見ぬフリだけを。幼稚な奴らだ、勝手にやってろ、と菜奈は教室を出た。

「どうなってるんだ、これは」事件の概要を何度も見返し、牛嶋は肩を落とす。予想外

の事態といえた。一連の事件は四宮貞男の死をもって終わったんだと推測していたのに。

これは全く別件で起こったものなのだろうか。いや、違う。被害者は四宮菜奈の親友だ。

真夜中に犯行を決行し、現場に証拠も残さない周到さを見るとただの変質者とは思えない。

まだ事件は続いているということか。これからも続いていくということなのか。

事件は昨夜に起こった。林田千鶴が図書館から自宅に帰る途中に何者かに背後から襲わ



れ、口を塞がれて気を失った。気を取り戻した時には発見現場の自動車工場にいて、着衣は全て脱がされていた。被害者の陰部には少量の性液と血液が付着しており、行為は為されたものと判断された。性液は犯人と思われるもの、血液は被害者のものだった。経験のない被害者に強引な行為をしたため、出血したものだろう。あまりに残忍な犯行だ。

現場を見た後、林田千鶴が運ばれた安里市立病院に牛嶋と唐木田も向かったが、とても話を聞ける状態ではなかった。異性はもちろん、同性でも知らない人間には拒絶反応を示していた。身体は軽く震えていて、微かに言葉にならないような声を漏らしている。側にいた両親と四宮菜奈が必死で彼女を宥めていた。調査も女性の捜査員が時間を掛けてようやく行くことができた。犯人については、後ろにいたから詳しくは分からないが体つきから男性であると答えた。それ以外の事は、すぐに気を失ってしまったので何も知らないとのことだ。現場には指紋がなく、捜査は難航すると思われる。

「いや、逆にこういう考え方もあると思う」唐木田は氣力をなくす牛嶋の背中を叩くように強めに言う。あくまで推理の一つとして、と前置きをして独自の見解を話した。

「現場に一切の指紋がないのは反対におかしいと思わんか。場所や物に付いたものなら拭き取るとしても、被害者の体にも全くないなんて変や。相手の体に触れることなく性行為

なんかできるんか。かといって、体にある指紋を全部拭き取るなん

て困難きわまりない。

どこに付いてるかも知らんし、下手に体に触ってたら被害者の目が覚める可能性もある。

最初から指紋なんか付けてないと思えるのが妥当や。だとしたら、余程に練られた計画と

いえる。そして、犯人はかなりの頭脳明晰な人間や。こんなもん、馬鹿には出来るわけがない」

唐木田の力説は尤もだった。頭の中にある犯人像は才人に変わっていく。「そうですね。

じゃあ、鍵になるのは被害者に付着していた性液になりそうですね」  
違う、と唐木田はきっぱり否定した。牛嶋はその言葉の意味合いを理解できなかった。

「どういうことですか」

「これだけの犯行をやったのける人間が被害者の体に出した性液を残してくはずない。

気づいてないわけない。忘れていたわけがない。そうやしたら、あまりに間抜けすぎる。

同じ人間のやったこととは到底思えん。となると、考えられるのは・  
・・・・」

「犯人のものではない、ということですか」割って入るように言った当人の牛嶋が唾を

飲み込んだ。奇怪ともいえる飛びぬけた考えだと思えた。ただ、確かに才人といえる犯人

には疑わしき落とし穴とも思える。犯人にとっての落とし穴が逆にこちらの落とし穴なの  
かもしれない。「でも、犯人のものじゃないとしたら一体誰のもの  
なんですか」

「さあな。考えやすいとしたら、犯人には共犯がおってその人間  
のものやってことか。

いずれにしろ、性液が犯人のものでないなら解決はかなり難しいことになる」唐木田は齒を軋ませ、強い眼光を放つ。犯人の思うがままになり、やりきれない思いが込み上げる。尻尾を捕まえてやりたいが、その姿は全く読み取れない。四宮貞男から調べを進めても今も決定的なものは見えてこない。警察をあざ笑う犯人が浮かぶ。打ち消したくてたまらなくなる。絶対に捕まえてやる、と信念を強くさせる。

放課後、部活には出ずに千鶴のお見舞いに行った。もう病院は退院し、自宅に戻ってる  
と聞いて助かった。安里市立病院には貞男の事があった以上、顔は出しづらい。相応の事情でもなければ足を運ぶことはないだろう。それで構わない。四宮貞男がいなくなった今、あの病院にも用はない。

千鶴の事件で連絡があつたのは昨日の夜中に差し掛かる頃合だった。病院に向かうと、千鶴はベッドで掛け布団を頭の上まで覆い被せていた。誰の声も聞きたくない、全てを遮断させてしまいたい、そんな様子に見えた。暴力は振るわれてなかったが、陰部からの出血があつた。それがどういう意味なのか、悟るのはさほど難しいことではない。千鶴の母親と2人で邪魔にならない程度に声を掛け続けた。心をこれ以上に痛めないように配慮を  
して言葉を並べた。それにより、事件に関することを聞きはできたが霞むような声だった。

結局、病院を後にしたのは陽が見えた頃になった。病院に行ったの

は貞男が亡くなつてからは初めてで、職員に会うのも葬式以来になる。夜勤には福笑いはいなかったが、下越と楽山の姿があつた。2人とも貞男が亡くなつた後の生活を心配してくれた。下越のそれは本物で、楽山は嘘だ。楽山の目は泳いでいた。自分の仕出かしてしまつた事により、貞男が命を落とすにまで至つたことに心の整理ができていないのだろう。きつと、この先一生その思いを独りきりで携えながら生きていくことになるはずだ。そんなこと、知つたことじゃないが。

千鶴は部屋のオレンジのベッドにいた。上半身は起こし、窓から見える景色を眺めていた。何を眺めてるんだらうか。多分、瞳に映るものを見ているだけだらう。今は何も物事を考えたくない。流れる雲のように気持ちよく漂いたい。そんな思いで心の中を空にしているのだらう。

「気分はどうかな」千鶴はゆっくりとこちらを向き、コクリとなずいて質問に答える。

「千鶴の好きなプリン買ってきたよ。一緒に食べよっか」駅前にあるケーキ屋で買ってきた2人分のプリンを袋から取り出し、片方を差し出す。千鶴はそれを受け取って食べた。デザートのおショップではなく駅前のチェーン店で、ケーキではなくプリンを好むあたりは彼女らしい。食欲はないと母親から聞いていたが、こういうものは食べれるようだ。事件

自体には触れないように話を始める。「昨日はごめんね。私が言い

すぎたと思う」

「そんなことないよ。悪いのはこっちだよ」千鶴の言葉はゆっくりだった。視点もはっきりと定まっておらず、体全体の力が抜けてしまっている。ただでさえ人間として劣っているのに完全に弱りきっている。

「ううん。あれからずっと謝ろうと思ってたんだ。申し訳ないことしたな、って」

「謝るなんて、そんな……私も不安だったの。菜奈が私から離れてっちゃう、って」

「そんなのあるわけないじゃん。私はいつまでも千鶴の友達だよ」菜奈は千鶴の両手を取り、グツと力を込める。

「ありがとう。嬉しいよ」千鶴は涙を流して喜んでいた。感点も弱くなってるので涙腺

も脆くなっている。鼻水まで流してしまい、千鶴も菜奈も笑ってしまった。今の状況でも

笑うことができるほど、千鶴には菜奈が大きな存在だった。豊永にフラれてしまった今、

また菜奈は家族以外で唯一心を許せる存在に戻ったのだ。

まさか、その人間が自分をやった犯人なんて思いもよらないだろうに。まあ、大好きな

豊永一弥にもやってもらえたんだから充分だろ。

翌日、安里市立第四中学校の校門には明らかに青春の二文字が似つかわない影が伸びていた。放課後、サッカー部の部活を終えた豊永はその2つの影に気づきながら校舎からの道を歩いている。髪は練習で走り回っているせいでボサボサになり、

制服の上半身は第三

ボタンまで開けた白シャツの間から良い具合の筋肉が見え隠れし、ショルダーバッグを肩

に掛けながらポケットに手をつ込んで雑に歩く姿はあまりに様になっっている。豊永を目

当てにする女子の姿もちらほらいる。林田千鶴との関係が明るみになると人数は減ったが、

その方が彼にはやりやすい。ただ、彼女の事件と既に別れた事実が明るみになれば、また

その人数は増えていくかもしれない。2人のスーツ姿の男はこちらを見据えている。目的

は分かっている。こちらが全てをお見通しなのを向こう側は知らない。完璧にやり遂げて

みせるよ、菜奈。

「豊永一弥さんですね」校門にいた2人の男にそう訊ねられる。

片方は若い細身の男で

片方は老いた小さい男だ。

「はい」豊永は不審そうに2人を見る。この3人は初対面のはずだ。

「私たち、こういう者です」若い方の男が警察手帳を出した。「少しだけ話をさせてい

ただきたいんですが」

「話、ですか」まだ豊永は厳しい表情を崩していない。

「なあに、簡単なことしか聞きません。そんな重く捉えなくていいですよ」老いた方の

男が横入りしてくる。こういったことには慣れてる印象を受けた。

豊永は2人の刑事に着いていくことを了承した。連れてこられたのはファミレスで、3

人は一番奥の座席に座る。何でも頼んでいいと言われたのでコーラを注文した。刑事はま

ず自己紹介をした。若い方が牛嶋大悟、老いた方が唐木田千治と名乗る。林田千鶴の事件

に関し、彼女の関係者を調べていたところ豊永に至ったと説明を受けた。「君と千鶴さん

は交際しているというのは本当ですか」

いいえと豊永が言うと、刑事の表情が微妙に変化した。「実は一昨日に別れたんです。

別れようというメールをこちらから一方的に送ったんですが。まさか、あの後にあんな事

が起こるなんて……」豊永は大きく息をつき、顔を伏せる。その様子に、刑事たちは心痛ぶりを察知した。「別れるというメ

ールはいつ頃に送ったか覚えてますか」

「詳しくはアレですけど、昼過ぎぐらいだったと思います」

「どういう返信が来ましたか」

「返信はありませんでした。おそらく、そういう心情にさせてしまったんだと思います。

それを考えると、今でも心苦しいです」

「よければ、何で別れを切り出したのか教えてもらっていいかな」

「彼女がイジメられてるという話を聞いたんです。それも、俺と付き合ってるというこ

とが理由だつて。それを聞いて居た堪れない気持ちになって、彼女をそんな目に遭わせるのならと決断しました」

林田千鶴がイジメを受けていたことは調査で把握していた。それも、学校内だけでなく

他校の生徒からも。理由が目の前の豊永一弥との交際であることも知っていたが、本人と

向き合ってみると女子生徒の嫉妬が生まれるのも納得できた。良く仕上がった外見だった。

男なら、自分がこう生まれていればと照らし合わせなくなる。「なるほど。じゃあ、彼女

が普段から男性に狙われるような節は何かありましたか」

「いえ、そういうことは無いと思います」

「彼女を見ていて、何か不信に思うような点は」

「ありません」

そうですか、と牛嶋は質問の流れを止めた。「最後に、事件のあった一昨日の夜に何を

していたか教えてもらえますか」

解けてきていた豊永の表情がまた締まる。アリバイを聞かれていることに不信感を募らせる。

「心配しないでください。これは全員に聞いているものなので、別にあなたを疑ってる

というわけではありません」

牛嶋の言葉によやく豊永は納得する。「部活をして、19時あたりに家に帰りました。

それから家にいました」

「家にはあなた以外に誰がいましたか」

「親戚のおじいちゃんがいきました」

豊永一弥が親戚の家で暮らしているのは知っていた。一応、事前に彼については調べて

ある。両親を幼い頃に失い、親戚に育てられている。義理の祖母も亡くなり、今は義理の

祖父と二人暮らし。その祖父も体を弱くしている。「おじいさんは何をしていましたか」

「自分の部屋で寝ていました。体が元々弱いので基本的に部屋にいて、夜になるともう

布団に入って寝てしまします」

豊永のアリバイを示す内容ではなかった。それでも、牛嶋と唐木



田は最初から彼を疑っ

てはいない。形式的に聞いているだけだ。「分かりました。以上になります」

その言葉で豊永はフツと緊張を解いた。ボ口を出すことはなかった。ここまできて、そんなヘマをしやすい。警察をあざむくぐらい楽なことだ。

翌日も捜査に進展はなかった。関係者や現場周辺の聞き込みはすでに終わってる。証拠

が何も残されていないことから、上の人間たちは迷宮入りを示唆している。正直、解決の糸口さえ見えないお手上げ状態だ。

「このままお蔵入りしそうな空気がプンプンしますね」

「させてたまるか。意地でも首根っこ捕まえたるわ」牛嶋の諦めがちな言葉に喝を入れるように唐木田は言い放つ。とはいえ、この状態から逮捕まで結びつけることにどれほどの逆転が必要かは理解しているつもりだ。こんなことは言いたくないが、難しいというしかない。

「この鑑定も決定打にはなりませんでしたし」牛嶋がそうデスクに置いたのは例の四宮貞男の医療ミスの際のカルテだ。以前に依頼した筆跡鑑定の結果はグレーだった。白でも黒でもなくグレー。本人の筆跡である可能性もあり、そうでない可能性もあるという曖昧な内容だ。本人のものとはいいきれない書ではあるが、違うものとしたら極限と評価できるほどに似せて書かれたものらしい。瓜二つという表現がピッタリと当てはまる、というほ

どの。安里市立病院の職員の筆跡とも調べてみたが、誰のものとも一致しなかった。ここ

には期待をしていただけに落胆も否めなかった。またふりだしに戻された感覚だ。走り出

す気は満タンなのに、いつになってもスターターは開始をしてくれない感覚。

唐木田は大きく息をつく。「俺、明日休むわ」

「どうかしたんですか」

「なんか、いくらやっても進まんしな。ここらで一回休憩挟むことにするわ」

牛嶋もその言葉には納得した。「そうですね。最近は一連の事件に一辺倒でしたから。

良い機会かもしれませんね」

「ああ、何も考えんとぐっすり眠らせてもらうわ」

「夕方ぐらいまでいきますか」

「何歳や思ってたんねん。そんなにようさん眠れるか。せいぜい昼過ぎまでや」

お互いに笑い合う。こんな穏やかな時間は久しぶりかもしれない。「昼過ぎに起きて何しますか」

「そうやなあ、テレビ見ながら真っ昼間からビールがええな」

「オヤジじゃないですか」

「オヤジや、文句あんのか」

また何気ない会話に笑い合う。なんだか、無性に幸せな時間に見える。「ありませんよ。」

唐木田さんの好きにしてください」

「おお、好きにさせてもらうわ」

「つまみは何にしますか」

「枝豆に決まっとるやろ」

「いいですねえ。なんか、俺もビール飲みたくなってきたな」

「飲んだらええやん。彼女に注いでもらえ」

「いや、何も気にせずにとらふく飲みたいんですよ。仕事の前の日は缶一つって決めるんです」

「そんなん気にせんと飲めよ、若いの」

「じゃあ、俺もそろそろ休もうかな」

「お前も近いうちに休んだらええわ」

「はい、そうさせてもらいます」少しの間が生じ、牛嶋がポツリと呟いた。「この事件

が解決したら、美味しい酒が飲めるでしょうね」

「・・・ああ、とびっきりのが飲めるで」唐木田は新たに犯人逮捕への執念の火を燃やした。

翌日、牛嶋は夜の深い時間になってから現場周辺での聞き込みをはじめた。現在、21

時24分。20時から1時間以上にわたって続けている成果は今日もない。林田千鶴が

当日の夜に図書館を後にしたのは20時前、自動車工場で見えなかったのは21時22分。

犯行はその間に行われた。その時間帯に近辺にいたかもしれない人物を狙ったの捜査だっ

たが、あいにくこれといった証言は得られていない。やはり、あれだけ巧みな犯行を成し

遂げる人間に付け入る隙などないのだろうか。警察は踊らされるだけで、犯人の思うがま

まに事は進んでいくのだろうか。「誰がさせるか、そんなこと」

とはいえ、もう犯行時刻は過ぎている。今日のところはそろそろ引き上げようと思い、

向かいから歩いてくる男性を最後にしようと歩み寄った。「すいま

せん、少しだけ話をさせてもらっていいでしょうか」

男性は50代と思われる、小太りで身長も低かった。全体的に野暮ったい感じのよくいる

タイプといえた。こちらに不信感を見せてるが、いきなり夜道で声を掛けられれば誰でも

そうなるだろう。警察手帳を見せ、4日前に起きた事件について調べると言うと言男性は

早くに理解してくれた。

「そうだ、言いたいことがあったんだよ」男性は前のめりに牛嶋に話し出す。「見たん

だよ、俺。犯人らしい奴をさ」

牛嶋は目を見開いた。飛び上がりそうになるほどの驚きだった。

「本当ですか、それ」

「本当さ。別に嘘なんか言わねえよ」男性はマイペースに話を続ける。「ただよ、事件

のあった日とか次の日とかは警察や報道の人間がいくらかいただろ俺が見たなんて言い

出したら、警察に連れてかれて根掘り葉掘り聞かれそうだし、報道にもカメラ何台も向け

られて答えさせられそうで嫌だったんだよ。だって、犯人捕まってるねえんだろ。そんなの

して、テレビとか映ったら犯人から狙われそうじゃねえか。自分を犠牲にしてまで言うの

は気が引けたんだよ。だから、ここは仕事場までの道んだけど遠回りして通ってたんだ」

「教えてもらえませんか、その犯人らしき人物について」牛嶋はすがりつく思いだった。

教えてもらえないなら強引にでも、と思っていた。

「俺、取り調べとかインタビューとかはごめんだぞ」

「分かってます。大丈夫です」この男を逃してはいけない。この男は我々の救世主になるかもしれない。「話してもらえますか」

「じゃあ……分かったよ」男性は渋々といった感じで話しはじめた。それは事

件を進展させるどころか逆転させるほどの証言だった。牛嶋は男性の言葉の一つ一つに胸を躍らせ、確かな手ごたえを感じていく。

話を聞き終えた牛嶋はすぐに自動車に乗り込み、夢中で走らせた。こんな思いは久しぶりだ。この一連の事件が始まって3ヶ月以上、手詰まりの状態が続いていたが遂に殻は破

られた。この線なら、きっと大きな成果を得られるに違いない。高鳴る気持ちの中、車は目的地へと向かっていく。

「もしもし、牛嶋です」目的地へ到着すると、車を出る前に唐木田へ電話を掛けた。

「おう、どうした」

「実はとびつきりの報告があります」牛嶋は浮かれていた。それは電話越しの声にも読み取れた。

「なんや、結婚でもするんかい」

「しませんよ。まだまだ先です」

「そんなら、どないしたんや」

「驚かないでくださいよ。多分、驚くでしょうけど」そう言い、牛嶋はさっきの男性の

証言の大枠を話した。話の大事な部分はあえて話さず、わざと大まかにだけにした。

「それ、本当にか」唐木田は予想通りに大きく驚いてくれた。それはそうだろう。これ

まで苦戦ばかりだったものに、活路が見い出せる光が届いたのだから。「でっ、そっから

犯人は割り出せそうなんか」

「そこまでは分かりませんが、多大な情報を持つててであろう人物に辿り着きました」

うやむやな感じに言ったが、牛嶋はその人物こそ犯人であると確信に近いものを既に抱いている。

「誰や、それは」

「内緒です。唐木田さんには」牛嶋は答えをはぐらかす。

「阿呆。この期に及んで何を言うんや」唐木田は当然に答えを聞きたくてたまらない。

「これから任意で引つ張ります。警察で詳しく追求するんで、唐木田さんも来てもらえますか」

「ああ、行くに決まってる」

「それまでは誰かは内緒にします。実際に見てみて、また驚いてください」

「阿呆者やな。さっさと言えや」

「せつかくのスクープですから。もう少しだけ独りきりのものにしたいです」これが

正直な気持ちだった。これだけの情報を手に入れた自分に浸りたいのだ。自分が見た情報

でもないし、それで自画自賛するのもおかしいかもしれないが中々ない気分にあと少し揺れていたい。

「つたく、勝手にせえ」唐木田もここは折れた。牛嶋の気持ちも分かるところがある。

自分も新米に近い頃はこのレベルの手柄を手にしたときは溢れるほどの喜びがあったもの

だ。その重要人物が誰かは気になるが、あと数十分でどうせは分かるのだから若いものの

優越感に乗っかってやることにした。

「はいはい、勝手にさせてもらいます」

「それより、お前一人で大丈夫なんか」

「任意同行するだけですから。大丈夫ですよ」

「そうか。ほな、今から警察に行くわ」

「はい、じゃあ後で」牛嶋は笑顔で電話を切った。

携帯に表示されている時刻をしてみる、夜21時57分。今日は部活の後に千鶴の家に寄ったので遅くなってしまった。バドミントンの部活は居心地が悪かった。貞男の一件で

菜奈には学校で風当たりの強い毎日が続いている。誰が何を言うわけではないが、全員が自分に関わり合いを持たないようにしてるのははっきりと感じられる。これまでは千鶴が

いたから2人で行動できたが、今は孤立に近い状態だ。気に掛けてくれる人間はいるが、

上っ面の付き合いを前提としたものばかりだった。深い関係になると、もしかしたら千鶴

のようになってしまうんじゃないかと馬鹿げた話すらある。四宮菜奈に関わると不幸にな

るんじゃないか、と。そんな噂まで飛び交えば、そりゃ誰も近づきたくはなくなる。構い

やしないよ。別にこっちもお前らなんかとの関係を望んじやいないんだから。これまで、

勉強も運動も人間性も言うことのない四宮菜奈を理想的に見ていた奴らの手のひらを返す

ような態度の変化は面白くすらある。人間なんて、所詮はその程度

の繋がりなんだ。築きあげたものなんて、ある日にポツキリと根本から折れるもの。脆いのさ、人間同士の関係程度。だから、薄っぺらなくつもの関係はいらない。一つだけの確かな関係を私は強く欲する。

「四宮菜奈さん」夜道を歩いていると、家のそばで不意に名前を呼ばれた。振り返ると、そこにいたのは意外な人物だった。スーツ姿の若い男に見覚えはある。事件の捜査の一環として何度か話を聞かれた。名前はたしか牛嶋大悟。いつも一緒にいる唐木田という老いぼれの刑事はいなかった。単独の行動、それなら尚更どうしてここにいるんだ。晴らしきれない疑念を携えたまま、菜奈は緊張を体中へと行き渡す。何をしに来たかは知らないが、若い刑事がどうにかできるわけではない。

「何でしょうか」表面上は通常の四宮菜奈を作っているが、裏側では臨戦態勢に入っていく。何の用があつて、こんな時間にここまで来てるんだ。単純な内容でないのは汲んで取れる。そんなの明日にでも回せばいい。夜遅くに他人の家の近くで本人の帰りを待つてゐるからには多少なりの内容があるのだろう。一体、お前はどんな力ードを持ってるんだ。こつちには痛くも痒くもないものか、それとも心臓を突いてくるようなものか。どっちでもない、勝つのは私たちだ。

「少しだけお時間もらえませんか。手間は取らせないんで」「はい。じゃあ、家にあがってください」



「いや、よかつたら2人で話がしたいんですよ」

牛嶋の言葉に菜奈は不審げな表情をする。「2人で、ですか」

「その方が君にとつてもいいと思うんだけど」

やけに強気な顔をしている。やはり、こいつは何かを握っている。何だ。何に気づいたんだ。

菜奈は牛嶋に連れられ、近くにある公園へ移動した。中規模の広さで、子供たちが特に

不自由はなくどんな遊びでもやれるぐらいの大きさはある。見たところ、他の人間のいる

気配はない。ここなら、会話が誰かに聞かれることはなさそうだ。

牛嶋が公園の中心あた

りで止まると、一定の距離を置いて菜奈も足を止める。牛嶋がこちらを振り向く。柔らかな

な表情を心掛けているが、本当は睨みつけてやりたい。

「君にはお父さんの件とかで何度か話を聞いたね」

「はい」

「俺は君に同情していたんだ。信頼していた病院での数々の事件、担任の教師に襲われたり、父親の自殺、親友のレイプ、次々と身の回りで不幸が起こっていった」

菜奈は何も言わずに流して聞いた。そんな話じゃないだろ、お前がしたいのは。最終的に辿り着きたい話の終着点に行けよ、と心に思う。

「この事件は絶対に解決しなければならない。こんな残忍で悪質きわまりない犯罪者は

捕まえて裁かれなければならない。そう信じて、ここまで捜査を続けてきたんだ」牛嶋は

スーツの胸ポケットから写真を取り出す。それは紛れもなく菜奈の写真だった。「だが、

君には同情の余地はなかったようだ」

「この、君の写真をとある人に見てもらったんだ。その人は4日前の午後21時前、会社帰りに林田千鶴の事件があつた自動車工場の近くを歩いていた。その時にボツクスカーから2人の人間が工場内で荷物を運んでいる光景を見ていたんだ。どうしてこんな時間になつたらしいが、何か時間外に届けるものでもあつたのだろうと気にしなかつたらしい。でも、事件の報道を見たときに「もしかすると」と疑いが生じた。犯行時刻や発見場所が一致したんだから、そうも思うだろう。あの時の2人が犯人で、あの荷物が被害者だったんじゃないか、ってね」

牛嶋の言葉がその場かぎりの嘘でないことは読み取れた。間違いなく本当の証言だろう。

まさか、見られていたなんて。周囲の動向には気を配っていたはずなのに見落としていたなんて不覚だった。

「まさか、っていう顔をしてるね。おそらく、完全な犯罪を確信していたんだろうけど、思わぬ落とし穴だったか」

敗北、その言葉が頭に出てくる。こんな形で終結することになるなんて。数年もかけて築きあげてきた執念はいとも簡単に崩れ去ってしまうものなのか。それも、こんな若僧の

刑事にしてやられるとは。菜奈は目の前の牛嶋に極度の苛立ちを覚える。してやったりという表情さえ浮かべる牛嶋をこれでもかと睨みつける。

「それが君の本当の顔か。真面目で清純な女子中学生なんかじゃ

ない、実の親にまで手をあげる残酷な犯罪者だ」

どう言われようが構わなかった。そんなもの、何年も前に自分の中に刻みつけたものだ。とつくの前から沁み込んでいる。

「これから君を警察に連れていく。一連の犯行についてや共犯者について、洗いざらい喋ってもらうよ」牛嶋は写真をポケットに戻し、菜奈に歩み寄る。

睨み続ける菜奈の視線の強さを感じる。相当な悔しさがあるのだろう。ここまで警察を欺き続けてきた犯人がこんなまだ子供といえる子だとは信じがたくはあったが、これが現実なんだと思いこませる。

「君が犯人だと知ったら、警察の人間たちも虚をつかれるだろうな」その時、鈍い音が鳴った。牛嶋の体が硬直したように止まり、目が丸くなる。異常信号

だと思うには簡単だった。牛嶋の顔が歪み、呻き声とともに菜奈の眼前に倒れ込む。背中には長めのナイフが刺さっている。その後ろから姿が現れたのは豊永だった。獲物を仕留

める狩猟者の眼光の鋭さの中に苦い表情も見える。豊永も急速の事態に対し、即決の行動

を起こさなければならなかった。事態の大きさに対して決断の期限はあまりに短いもので

あり、彼自身も心構えが不十分だった。こういった展開になることも常に計算して動いてはいるが、いざそうなってみると気持ちの整理をつけるのは難しい。それでもやらないと

いけない。菜奈を守るためには気持ちの整理なんてどうでもいい。心内が煩雑になろうと、

多少精神がやられようと構わない。

菜奈は俺が守る。菜奈が俺を支えてくれたように。

「お前が……共犯者か」倒れている牛嶋が力を搾り出すようにして振り向き、

豊永を確認した。信じられないといった顔をしている。それはそうだろう。警察からしてみれば、豊永など疑いを向ける対象外の人間だったはずだ。牛嶋は荒ぐ呼吸を繰り返しながらポケットから携帯を取り出す。上司にでも連絡するのか、証拠写真を撮ろうとしているのか。

「菜奈、逃げろ」豊永は牛嶋の手を蹴り上げる。携帯が向こうへと転げていく。「いいから早く行け」

豊永の強い言葉に、眼前での出来事に釘付けになっていた菜奈は正気に戻る。なんとか冷静になろうとし、事態の深刻さを受け止める。豊永の精悍な目つきに視線を合わせると菜奈は全力で駆け出した。

菜奈の姿がなくなるのを見届け、豊永は倒れ込む牛嶋に目を向ける。砂利道に這いつくばったまま、必死に進んでいる。逃げようとしているのではない。逃げても簡単に追いつかれることぐらい分かっている。牛嶋は豊永に蹴り飛ばされた携帯に向かっていている。その間には赤く滲んだ道ができている。出血はかなりのものだ。おそらく、意識は不定となつていているに違いない。刑事の意地が、それでも目の前の犯人を見過ごせないと力を振り絞っていく。豊永はあっさりと牛嶋に追いつき、携帯をさらに遠くへ蹴

り上げた。諦めたのか、牛嶋は力尽きるようにその場に崩れる。歯を強く噛み、悔しさを全開に表す。

「さつき、犯人を知ったら警察の人間も虚をつかれると言ったな」牛嶋を見下しながら

豊永は話しはじめる。牛嶋の瞳に強い光はもうなかった。後はくだばるのを待つのみ、という状態になっていた。「ということは、警察は犯人を知らないということだな」

牛嶋は何も答えない。答えられない。痛恨の極みだった。菜奈のことは誰にも話していない。後で全員を驚かせてやろうと思ったばかりに取り返しのないことになってしまった。まさか、こんなことになるとは思っても寄らなかった。こんなことなら唐木田に話しておくべきだった、と思ったところで今頃どうにもならない。せつかく手にした犯人逮捕につながる情報だったのに、今すぐそこに当人がいるのに。牛嶋には全てが無念にかなれなかった。

「よく分かんが、どうせ手柄を独り占めしようとも思っただろう。下手な考えは起こさないものだ。まあ、若輩者にしてはよくやったよ」そう言い、豊永は牛嶋の背中に刺さったナイフを深く押し込む。血の滴るナイフを体から抜くと、豊永もその場を走り去った。

きらきらひかる おそらのほしよ  
まばたきしては みんなをみてる

きらきらひかる おそらのほしよ

きらきらひかる おそらのほしよ  
みんなのうたが とどくといいな  
きらきらひかる おそらのほしよ

胸に手を当てて高鳴る鼓動を確かめると、体の中に「きらきら星」を流した。きつと今、

私を救ってくれたあなたも流してくれてるのだろぅと思ひ夜空へ手を合わせて祈った。

絶対にこの絆を失うわけにはいかない。どんな手を尽くしても守り抜いてみせる。

## 第10話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

豊永一弥・とよながかずや（完璧な外見を併せ持つて女性からの強い支持も持つ）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）

## 第10話

たまに夢にうなされる夜がある。

私たちは四宮貞男を抹消して新しい生活を手に入れた。

なのに、私たちの前には次から次へと中傷する人間が現れる。

お前らは人殺しだ。お前らは犯罪者だ。お前らの愛は本当の愛じゃない。

そうやって、言葉の暴力で私たちを取り囲んで痛めていく。

そんな奴らを私は一人一人切り刻んでいく。

私たちは人殺しだ。犯罪者だ。でも、これは本当の愛なんだ。

歪んでるかもしれない。背いているかもしれない。それでも、間違っただけじゃない。

私は彼のためなら何だって出来る。彼も私のためなら何だって出来る。

お前らみたいな言葉だけ威勢のいいものなんかじゃない。

私たちはそれを本当にやってのける。たとえ、どんな困難を伴おうとも。

これがお前らにやれるのか。やれるもんならやってみろ。

愛する人間を苦しめる者からどんな手を使ってでも守ってみせろ。そう叫びながら目の前の薄ら笑う人間たちを切り刻んでいく。

起き上がると、汗を垂らしながら現実になんか戻される。

両手を見つめてみる。汚れない、綺麗な手をしているのに無性に腹が立った。

こんな綺麗なものの刃物で切りつけてやる、と凶気が目覚める。

その寸前で我に返る。自虐で身を傷つけることの事の先に気づく。周りは父親の喪失に気が触れてしまった哀れな少女と自分を位置



づけるだろう。

違う、そんなんじゃない。

私はただこの血の一滴も付いていない両手が嫌なだけだ。

あなたはその両手をどれだけ汚してしまったんだろう、と思うと。

雨が降っていた。唐木田は自分の心情を映したように思えたが、すぐにそれを否定した。

こんなものじゃない。今、心内にとどろく感情はこの程度の雨なんかじゃ表しきれない。

それに、悲しさや空しさだけではない。燃え盛る炎のように湧き上がる怒りは抑えるのがやっとなんていえた。

牛嶋大悟の葬儀に出席した唐木田は彼の遺影を眺めながら多様な思いに揺り動かされる。

相棒を失った悲しみ、それを信じきれない空虚感。犯人に対する殺意さえ覚え、震える手

はコントロールがきかなかった。あの時、なぜ容疑者のところへ一人で行かせてしまったのか。そう思うと、やりきれなくてたまらなくなる。

牛嶋からの電話をもらってから唐木田はすぐに警察へ急いだ。ここまで苦しませてきた

犯人に大きく近づける人物。もしかすると、犯人本人かもしれない。その姿を早くこの目

で見てみたかった。そう来たものの、一向に牛嶋は戻ってくる気配がなかった。どうした

ものかと携帯に電話してみるが応答がない。次第に不安が唐木田に訪れる。そんなことは

考えたくなかったが、彼の身に何かが起こったのではと考えざるをえなかった。唐木田は

車を飛ばして牛嶋を探し続けた。どこにいるか検討もつかなかった

が、病院や学校など思

いづくかぎりの場所を回った。そして、一報を耳にして再び病院へ駆けつけた。彼はもう

息を引き取っていた。背中を刺されたことによる出血が死因と聞き、一連の事件の犯人に

よるものだと唐木田は断定した。最悪の事態を起こしてしまった。自分が見殺しにしたよ

うなものだ。犯人への怒りと自分への憤りで体が震えてくる。自分のせいで若い生命を潰

してしまった。どうせ奪うんなら、この老いぼれのをくれてやるのに。なぜ、これからの

人間の未来が絶たれないといけないんだ。どう嘆こうとも目の前の遺体は何も返してくれ

なかった。しばらくして、牛嶋の恋人も姿を見せた。その泣き声は一つ一つが唐木田の胸

を突き刺していく。それを全て受け止めようと思い、最後まで病室を離れはしなかった。

許さん、絶対に許さんぞ。これだけの犯行をしながら、捜査を及ぼした警察にまで手を

かけた。もはや、この手で犯人を捕まえなければ牛嶋を含めた被害者たちは浮かばれない。

必ず自分が追い詰めてみせる。唐木田はそう強い決意を胸に閉まった。

「はい、今日もプリン買って来たよ」菜奈はいつものケーキ屋で購入したプリン2つ

を土産に千鶴の見舞いに訪れた。まだ千鶴の心の傷は癒えていない。両親にも投げやりな

態度を取ったりするようで、うまく心を開けるのは菜奈だけになっていた。なので、菜奈

の存在は千鶴の両親に重宝された。出来るかぎり見舞いに来てあげて欲しい、と嘆願さえ

されている。目の前にいる人間が犯人とも知らずに。

「おいしいね、菜奈」千鶴の言葉に菜奈は笑顔を向ける。千鶴も笑顔になるが様になら

ない不器用なものだった。事件以来、彼女は表情の作り方が下手になっていた。どこを見

てるのか分からない、何を考えてるのか分からない。そういった無様な顔色になってしま

った。別に悪気なんか湧かない。全部こいつが豊永に手を出したせいなのだから。

「菜奈は大丈夫なの」千鶴が定まらない視線でこちらの方を見て言った。昨夜の事件の

ことを言いたいのだろう。牛嶋の一件は今朝のテレビでも取り上げられていた。メディア

も一連の事件に対しての不信感を大きく報じた。安里市で起こり続ける数々の事件の異常

さを唱え、同一犯による犯行とする見方に着眼していた。市警も市内のパトロール強化に

あたったり、小学校は集団下校を始めるなど各地で対策も行われているらしい。そんなこと

に意味はないのに、と菜奈は報道を冷めて見ていた。

「私は平気だよ。悪い奴なんか来たら、取っ捕まえてやんだから」

「でも……」千鶴は目を伏せた。今の自分には菜奈しかない。その菜奈にも

しも危険が起きてしまったら、と思うと不安でしうがなくなる。

現実として、四宮家の

すぐ近くにある公園で昨夜刑事が刺殺された。現実味のない話ではない。この近辺はおか

しくなっている。誰の仕業かは知らないが、今すぐにでも止めても

らいたい。こんな思いで過ごしていくなんてできない。警察は何をしてるんだろうか。こんなにも連続する事件に対処できないのだろうか。いや、刑事が刺殺されたということは警察と犯人に接触があったということだ。警察は犯人を射程圏内にしているのだ。つまり、事件の解決は近いともいえるんじゃないだろうか。そう思うと、千鶴はなんとか気持ちを下ろち着けることができた。

警察には特別捜査本部が置かれることになった。あまりに多発しすぎる事件に加熱する報道が一端を担う形でもあるがこんな一市警では目にかかる機会も少ない警視庁の人間や管轄外の刑事も多く集まっている。しかし、特捜はあくまで牛嶋大悟刺殺の事件を基盤としていた。安里市立病院での薬物混入連続殺人は疑いの範囲内とされたが、林田千鶴の強姦は別個のものとされた。ここ最近の数多の事件を切り離し、失態ともいえる現状への軽減でもしているつもりだろうか。一人の犯行にしたら、それほど犯人を逃し続けてる警察の信用にヒビが入る。だから、ここは一つ一つの事件を別にして考えようと。それで責任逃れをしているつもりなのか。幼稚すぎる発想に唐木田は大きく息をついた。こんな考え方をしていたら、いつまで経っても犯人になんか辿り着きはしない。全てを受け止め、自分を苦しめ、その上で現実に向き合っていくしかない。唐木田

はすでに腹をくくっていた。信頼していた部下の命という大きすぎる代償とともに。

唐木田は一連の事件の犯人は同一人物である前提を崩さなかった。ここまで大した報道

になるような事件は少なくともこの数年は無かったはずだ。それが畳み掛けるように連続

している。これが別個のものであるといえるのか。便乗するように悪魔が次々と牙で襲い

掛かっているというのか。そんなことがあつてたまるか。これは同一人物による連続犯、それが妥当な考えだ。

当初の捜査の矛先は四宮貞男だった。始めに起こった安里市立病院の連続犯の容疑者を

浮かべるにあたり、薬物に詳しい、ハッキング行為が出来る、深夜の病院で犯行に及べる、

という点は見逃せない。犯人はよほど頭脳明晰な人間であることも確かだ。四宮貞男はこ

の2件において、アリバイはない。次に起こった安里市立第一中学校での四宮菜奈に対す

る担任の野竿のわいせつ行為。彼女を助けた謎の人物についてはまだ不明のままだ。ヘル

メットまで被った完全装備の20代男性、これ以上は分かっていないがいかに不審そう

でもある。四宮貞男はこの時間、病院にいたため彼でないことは判明している。次に起こ

った病院での医療ミス問題、四宮貞男がカルテに誤記したことが原因になった。彼はこの

件には遺族への謝罪をしたが、誤った薬品名を記入した記憶については見当たらないとし

ている。あくまで担当医としての責任感、そして現状からの推測と

して自分のミスだろう

としたまでのこと。それに、カルテの筆跡鑑定も曖昧な結果だった。本人の書記の可能性

もあり、そうでない可能性もあると。その後、当人は富士の樹海で自殺。遺書が発見され、

医療ミスへの償いが命を絶つ理由であることが書かれていた。しかし、パソコンで打たれ

ていた内容に疑問が残る。この類のものは本人の直筆が普通だ。おかげで筆跡鑑定は出来ない。させないかのように。

ここまでの流れからいくと、四宮貞男は真犯人に利用されたのではないだろうか。彼の自殺で全てが終わっていたのなら、我々は彼を疑っていたかもしれない。ただ、犯行は今

も続いている。とすれば、確実に四宮貞男でない人物が真犯人として存在する。真犯人は

四宮貞男を苦しめ、殺害するまでの綿密に練られた計画をたてて実行した。病院の事件で

医者としての彼を苦しめ、菜奈の事件で父親としての彼を苦しめ、医療ミスの事件で人間

としての彼を苦しめ、死に至らしめた。そこも違っているのかもしれない。あの自殺さえ

計画の一部だったのではないだろうか。恐ろしい考えをするなら、四宮貞男は自殺に見せ

かけて殺されたのではないだろうか。真犯人は四宮貞男が一連の事件の犯人であるように

犯行を重ね、彼を殺めることでより確実のものとした。そして、警察は見事にそれに踊ら

された。真犯人はそんな警察に余裕を振り撒くように犯行を続けている。

この仮説は唐木田の中で主たるものになっていた。四宮貞男ではない真犯人が存在する。

そいつが罪のない人間の命まで奪い、牛嶋さえも殺めた。見つけてやる。必ず見つけ出してやる。「世の中、そうそううまくいくもんぢやうぞ」

林田千鶴の見舞いを終え、自宅に戻ると家の前に刑事の姿があった。聞き込みを逃れる

ためも兼ねて出掛けていたのにしつこいもんだ。

「四宮菜奈さん、警察の者です」少し時間いいですか、と聞いてきた男の顔はもう何度

と見たものだった。「何度もすいませんがねえ」

はい、と菜奈が了承すると唐木田は聞き込みを始めた。

「昨夜の事件は知ってますよね」

「はい。パトカーや救急車も来てたし、ニュースでも見ました」

昨日の夜はやかましか

った。パトカーと救急車だけでなく報道陣や野次馬が群がるように現場付近を取り囲んで

いたので、四宮家にも騒音は届いていた。その様子を窓からこっそり眺めているうちに湧

き上がる感情を感じ取る。勝利の確信、豊永一弥との希望ある未来。

「ウチの刑事が一人、何者かに殺されましてね。あなたも何度か会ってますよ。いつも

私とパトナーを組んでいた、牛嶋ゆう若い刑事です」

菜奈は言葉なしに微妙な表情を浮かべる。牛嶋の死を初めて耳にし、驚きを隠せないという作り顔を。

「惜しい人間を失くしましたわ。出来る人間かどうかは分かりませんが、正義感は最近

の若いもんにしては強い方でした。下手にプライドの高い官僚タイ

ブじゃなく地べた這い

つくばつても犯人を捕まえてやるっていう現場タイプです。こいつは育てがいがありそう

やなと久々に思ってたんですがね、残念です」部下を思い語る唐木田の顔は悲壮にも捉えられた。余程の悔しさと怒りがあるのだろう。

「すみません。話を戻します」間を置くように唐木田は構え直す。  
「昨日の22時から

23時までの間、どこにおられましたか」

その時間が犯行時刻と推測されているのか、と菜奈は思った。「昨日は友達の家に行つ

てて22時過ぎに帰りました」

菜奈の言葉に、唐木田は思わずメモを取る手を止めて彼女を見た。

「22時過ぎに自宅に帰ったんですね」

「はい」

「事件のあった公園の近くを通りましたか」

「いえ、いつも反対側から帰ってきます」その言葉に嘘はなかった。現に今も公園とは

反対の方から菜奈は帰宅して、唐木田もそこに気づいた。正直、わざわざ通学路とは反対

にある公園に連れてつてアリバイを作ってくれた牛嶋に感謝したい。  
「帰ってくる時、何か違和感を感じることはありませんでしたか。不審そうな人物がい

たとか、言い合いが聞こえてきたとか」

「いえ、何も」

唐木田は顔をしかめて息をつく。どうやら、これ以上聞いても何も出てきそうにはない。

「分かりました。以上です、失礼しました」

そう言い、去っていく老いた後ろ姿に菜奈は冷たい視線を投げて



いった。

警察に戻った唐木田は自分のデスクで考え込み、頭を掻いた。今になって、四宮菜奈の存在が大きくなってきた。一連の事件において、彼女の関わり方には見過ごせない部分がある。彼女は今回の事件で四宮貞男と同じぐらいに関わりを持っているのだ。これまで計4回も直接聞き込みをしたのは最も多い回数になる。最初は初めに起こった薬物混入事件に彼女が病院に居合わせたことで、次は学校で担任に襲われた被害者として、次は父親の自殺の時に行動を共にしていたことで、最後はさっきのことだ。その他の病院での事件においても、何年も足繁く病院に通っていた彼女には関わりがある。林田千鶴の事件においても、彼女は親友という大きな関わりがある。一連の事件に四宮菜奈が全く関わってないことがない。もしかすると、真犯人は四宮貞男を苦しめていたのではなく四宮菜奈が標的だったのではないだろうか。だから、四宮貞男が亡くなってからも犯行が続いているのではないだろうか。四宮菜奈が入り浸る病院で事件を起こし、担任に直接襲わせ、父親を死に追い込み、親友に深い傷を負わせた。

これか。これなんだろうか。閃いた新たな推理がまだ定まらずに浮遊している。正直、

唐木田は最初の頃から四宮貞男の担当した患者による犯行ではないかと考えていた。彼の死の後にも犯行が続いている事実から一旦は違うのかと思っただが、

今度は彼の亡き後に娘

の菜奈に標的を変えたのかもしれないと考えた。四宮貞男だけでは物足りず、次は彼女に

手を掛け、四宮家に復讐の矛先を向けてるのではないだろうか。

でも、それは違ったよ

うだ。それが仮に本当ならば、家族である四宮菜子に何も被害が及んでないのがおかしい。

彼女の側では何も起こっていない。近くにいるのは貞男と菜奈ばかり。そんなはずはない。

あくまで標的は一人ずつで、最初に貞男、次に菜奈、最後に菜子、となっているのかもしれない。

それなら、貞男の生きてる間に菜奈が襲われた説明がつかなくなる。

四宮菜奈、彼女が重要な鍵を握ってるんじゃないだろうか。標的は彼女で、真犯人は四宮菜奈に怨恨を抱いてる人物。

「ねえ、菜奈」夕食を終え、リビングでテレビを見ながら一息ついてる時に菜子が話し

掛けてきた。「話があるから聞いてくれる」

「うん」菜奈はテレビの電源を消し、隣のソファに座った菜子の方へ向き直す。

「パパの事があってから、ママは元気が出なくてね。それでも、菜奈が一緒にいるから

と思えば頑張れたんだけど」力なく菜子は話し出す。「お父さんお母さん、菜奈のお爺ち

やんお婆ちゃんかね、4人で暮らさないかって言ってくれてるの。

パパのお葬式の時に初

めに言ってくれたんだけど、そのときはまだ何も考えられなくて返事はしてなかったの。

それはね、パパがいなくなつて経済的な面でも何も収入がなくなつたことを心配してくれ

てのことだから嬉しかったの。でも、そうなるって遠くに引越ししないといけないわ。私は

いいけれど、菜奈はせつかく中学に慣れてきたのに環境が変わるのはよくないじゃない。

千鶴ちゃんとか、友達とも別れないといけない。そうさせたくはないと思つて、ママなり

に頑張ろうと思つたの。ここに住むのは無理でも、もう少し安いところに引越しして私が

働きながら稼げば大丈夫なんじゃないかって」

「ママ・・・・・・・・」

菜子は息をつく。「そうしてあげたかったんだけどね、どうもダメみたい。今はパパの

ことから抜け出せなくて・・・・・・・・もうちょっと時間も掛かりそうなの。私のせいで

こうなつちゃうのは辛いんだけど」

「いいよ」菜子の話の途中で菜奈は遮つた。これ以上、彼女に自虐の言葉を並べさせた

くなかつた。そこまでで充分に娘を想う母親の愛情は伝わったから。

「お爺ちゃんとお婆

ちゃんのところに行こう。4人で一緒に暮らそう」

「菜奈・・・・・・・・」娘の思いやりに菜子は感動し、菜奈を抱きしめて涙した。「あり

がとうね」

「ううん、私はママといられれば幸せだよ」菜奈も母からの愛情に感動して涙し、菜子

を抱きしめる。思えば、彼女はただの被害者でしかない。貞男が他の女に手を出していた

ことすら知らず、娘の本性も何一つ知らない。起こっていく騒動に

身を振られ、精神を傷つけられているだけだ。家族思いの普通の母親なのだ。そう思うと、菜奈の心は急に締めつけられるものがあつた。この人はきつと何があるうとも自分を裏切ったりはしないと思うと、彼女の一番大事なものを傷つけてしまった自分の行為に引くところがあつた。違う、いいんだ、これでいいんだ、と唱える。私は間違つてなんかない、そう自分自身に刻みつけて菜子をグツと抱きしめた。

「どうした」自宅から離れた漫画喫茶のペア室、隣で浮かない顔をする菜奈が気にかかった。

「別に。何でもないよ」そう呟き、息をつく。そして、またここを見てるのか分からない視線を投げる。普通じゃないのは明らかだった。

「何かあつたのか。ちゃんと言ってみろ」豊永は菜奈を強引にこちらに向かせ、真剣な眼差しで問い掛ける。彼女が母親の郷里で過ごすことになったのはさつき聞いたが、そのことが原因とは思えない。2人が離れてしまふのが淋しい、なんてことじゃないだろう。こうなることはとつくの前に考えついていたことだ。なら、なぜ目の前の彼女はこんな顔をしているのだろうか。

「四宮菜子を見てて思ったんだよ。この人は何も知らないんだな、つて。何も知らないまま、自分の周りで起こつてる事件に精神をやられてる。それをやってるのが自分の娘だ

つてことも全く疑ってない。私のことを完全に信じてて、愛してやまない」豊永を見ず、

視線を横に向けたまま菜奈は言う。言い終わると、また息をついた。豊永は菜奈の異変に気づいた。その日の気分の斜めぐあいなんかではなく、もつと根本

にあるものが。「お前、なんかおかしいぞ」

「おかしくなんかない」

「まさか、後悔してるなんて言わないだろうな」

「そんなわけない。ふざけたこと言わないでよ」豊永を強く見やり、言い捨てた。

その様子に豊永は危機感を抱く。これまで冷静に事件を静観していた菜奈がムキになっている。一般的に人間の感情を母親に持っている。

「はい、ちようだいよ」菜奈は気が乗らないように手を差し出す。本題に話を修正した。

「ああ」豊永は菜奈の本心が掴みきれないまま、荷物の中から頑丈に包んだ包みを渡す。

中には、牛嶋を殺した時に奪った彼の所持品が入っている。唐木田の捜査網が菜奈を中心とした円状に行き渡ったため、いずれ豊永にも及ぶだろうと判断した。それなら、彼女を

被害者として利用して網の中心にいる菜奈に持たせた方が警察を防げるだろう

と決めた。しかし、今の菜奈を見ていると不安になった。これを手にしている彼女自身が

崩れかねない気がしてしまう。このままじゃ、罪の深さにやられてしまっんじゃないかと

心配になった。

「どこにおんのや、真犯人は」唐木田は一日中歩き続けていた。

真犯人は四宮菜奈を標

的とした人物として、彼女に怨恨を持つかもしれない周囲の人物を片っ端から調べていくことに決めてから数日、聞き込みを重ねる日々が続いている。若くない体にムチを打つように牛嶋の事で自分を奮い立たせていく。安里市立病院の人間、自宅周辺の住人、菜奈が通っていた幼稚園や小学校の人間に話を聞いてきたが一向に成果はあがらない。誰もが彼女を非の打ちどころがない素晴らしい子だと賞賛する。学業も運動も人間的にも、褒めるところばかりだ。怨恨どころか、そんな事実を打ち消したくなるくらいに何も浮かんではこない。残すは中学時代の関係者だけだ。しかし、まだ半年しか通っていないところにそんなに大きな期待は寄せられそうにない。

本当に関係者だろうか。実は全く縁もないような存在ではないのだろうか。ここまで何も出てこないのだからそうも思いたくなる。ただ、それは違っだろう。真犯人は被害者の関係者のはずだ。それを確信に近づけたのは牛嶋が刺殺された事件だった。現場に残されていた遺留品に唐木田は違和感を覚えた。牛嶋が捜査時に必ず持ち歩いていた物が欠けていたのだ。メモ帳と事件関係者の写真のファイル、どちらも聞き込みには欠かさない。まして、最後に彼に電話した時に聞き込みで大きな成果をあげたことを主張していた。そこから重要人物のもとへと任意同行のために向かっているのだから、牛嶋がそれを持ってな

いはずはない。万が一に持ってなかったとしても、彼のデスクからも自宅からも発見されていないのはおかしい。おそらく、牛嶋が同行を求めた人物によって奪われたのだろう。

だとしたら、その人物は何故それを奪わなければならなかったのか。そこには知られては

ならない情報があった。そうに違いない。牛嶋が手にした事件にまつわる重要な情報がそ

の人物を追い詰める内容だったのだ。ならば、その人物は彼の写真のファイルの中にいた

関係者が鍵を握っている。いや、その本人かもしれない。どちらにしろ、事件は少しずつ

解明へと進み出している。必ず辿り着いてやる。

そして、唐木田には新たに浮かんだ仮説があった。あの日、牛嶋と最後に電話で交わし

た言葉を思い返しているうちにそれはあった。電話口で彼が可能性としてこぼした言葉が

ある。共犯、という単語を何気なしに話していた。牛嶋が犯人ではないかと考えた人物が

そうであるなら、共犯がいるかもしれない。彼がその考えに及んだのは、その人物には

アリバイがあったからか、一人でこなすのは考えきれない犯行だったからか。確かにその

線は考えられる。一連の事件が起こったのは朝方から深夜までバラバラの時間帯だ。一人

でこなすにはアリバイを作りにくい。人には決められた一日のサイクルが存在する。学生

や社会人、そうでないにしても毎日全く違ったサイクルで送っている人間は多分いない。

ただ、共犯がいるなら話は別だ。アリバイを作るのはそう難しいこ

とではない。考えがそこに行き着くと、体が軽くもなり、重くもなった。考えやすくはなかったが、犯人が複数となると余計に困難になる。

「菜奈、進んでる」菜奈はハツとなり、目の前の菜子に顔をあげる。考え事をしながら作業していたため、母親が近づいてくるのに気づかなかった。引越しの準備を昨日から始め、家の中は慌しくなっていた。必要な家具は祖父母の家にあるから近所に引き取ってもらうことになったので、家族の荷物ぐらいだと思っていたがこれが意外に多かった。知らず知らずのうちに荷物は増えていくものだ。

「うん、ちよつとずつやってるよ」引越しは明後日に決まっていた。今日、担任の穂村に伝えると淋しがっていた。赴任してから期末試験や夏休みもあったため、さほど彼女と密に関わった記憶もないのに。出来る生徒がいなくなるのが悲しいのだろうか。四宮菜奈の上辺しか知らない人間の意見だ。クラスメイトには明日のホームルームで穂村を通して告げることになっている。あいつらはどう思っただろう。一連の事件のほとんどに間接的に関わりのある存在を疫病神のようにし、厄介払いができたとするんだろう。あいつらが陰で自分のことをチクチク言ってるのは知ってる。入学したばかりの頃は誰もが周りへ寄ってきたのに、事件が始まってからは蜘蛛の巣を散らすように離れていった。あいつらの



中では私はあくまで事件の被害者だ。被害者なのに、誰も慰めることもなく近寄らない。

人間なんて、そんなものだ。外れることを好まず、多数派に属したがる生き物だ。まあ、

せいぜい集団の中に埋もれていればいいさ。千鶴にも今日の放課後に彼女の家に寄った時に伝えた。始めは受け入れがたい反応を示していたが、無理やり納得したようにして笑顔

を作っていた。「離れてても友達だからね」と言えば、彼女は簡単だ。自分の精神よりも

こちらの現実を優先する。唯一の支えがいなくなり、彼女はますます閉じた性格になって

しまうことだろう。友達がいなくなるどころか学校にもこのまま行くことはないと思う。

安里市立第一中学校の1年2組には林田千鶴の居心地のいい場所などない。行くだけ無駄

な教室に行く勇気があるわけがない。引きこもりになるか、転校して思いきった新たな自分を作り出すか、どちらかだろう。

「菜奈、セロテープ持ってない？ 家のが切らしちゃって」

「私の部屋の押入れにある黄色のケースに入ってる。取ってこようか」

「ううん、いいわ。そこなら分かるから取ってくる」そう言い、

菜子はリビングから離れた。

牛嶋の事件から一週間が過ぎた。警察の捜査は進展していないようだ。どうやら、牛嶋

が事件前に菜奈と豊永の目撃証言を同僚に話してなかったのは本当のようだ。それでいい。

このまま平穏無事に終わっていけばいい。きっと、もうこれ以上は

無理じゃないかと思うから。

菜奈の心は限界に近づいていた。繰り返した悪事は次第に己を襲ってくる。菜子の姿を通して自分の犯した罪を捉えてから、精神が蝕まれてくるのを感じていた。もう終わりにしないといけない。この先は自分自身を危険に陥れるだけになってしまう。

その時、菜奈は自らがした過ちにハツとなる。それに気づいたときにはもう遅かった。考え事に夢中になり、現実への注意がおろそかになっていた。血の気が引くのが分かり、自分の部屋に駆け出す。

「ママ、待って」祈る気持ちで微かな望みを賭け、部屋の扉を開く。その瞬間に、最悪の事態を把握できた。菜子は開かれた包みを手にし、こちらに背を向けたまま座り込んでいる。その包みは他の何でもない豊永から預かったもので、牛嶋を殺した時に奪った彼のメモ帳と事件関係者と思われる写真のファイルの他、実際に犯行に使ったナイフもあった。

「菜奈……これは何」菜子はこちらを振り向き、弱い声で呟いた。おそらく、現状を理解しきれずにいるのだろう。ただ、事件について詳しく調査されたメモ帳に牛嶋の血で赤く染まった写真ファイル、刃の部分は洗い落としたが柄の部分には薄く滲んだ赤い跡が残っているナイフに対して言い逃れは不可能なのは分かりえた。

どうしてだ、と菜奈は心の中で叫んだ。どうして、こんな初步的

なミスをしてしまった

んだ。こんなこと、今までに一度だってなかったのに。菜子に心入れなんかしたからだ。

母親だから、被害者だから、と同情をしてるうちに隙を作り、それが油断を生んだんだ。

だから、普通の人生を捨ててきたのに。人間らしく生きることを捨て、歪んだ愛情のため

だけに生きることを選んだのに。人間らしい感情を受け止めてしまい、表向きの四宮菜奈

が裏を上回ってしまったためにこんな結果に行き着いてしまった。

「ねえ、菜奈。これは何なの」菜子は涙ぐみながら包みを持つ手を震わせていた。もう

その場の適当な言葉で逃げるのは無理だった。同時に、菜奈は母親に対しての感情移入が

強くなってしまっている。冷静にこの場を切り抜けられる状態ではなかった。どうしてい

いのか分からず、表情は歪み、呼吸が荒くなっていく。何年間もかけて築いてきたものが

こんな終わりを迎えてたまるか。私が一体どれだけのものを注いできたと思ってるんだ。

豊永一弥が四宮貞男への復讐を決意した時から全てをそのために向けてきたんだ。多くの

犠牲を払った。自分も他人も時間も人格も、どうなってもいい覚悟をしてきた。ただ毎日

を妥協で生きてる奴らなんか比にならない熱を込めてきたんだ。こんなところで終わらせて

てたまるか。

「警察に行きましょう」そう言い、菜子は立ち上がる。菜奈の表情から、なんとなくの

察しがついたのだろう。立ちすくむ菜奈の横を通り抜け、部屋を出

ていく。鼻をすする音

は聞こえたが、涙は流していなかった。ここで泣いてはいけない、と自身で固持している

のだろう。菜奈も不定な心情のまま、部屋を出ていく。菜子はリビングで電話を掛けよう

としていた。取り出した名刺が誰の物かは分かりえた。聞き込みをされた際に唐木田から

「何かあったら」と渡されたものだ。

万事休す、菜奈は己の行く末を遮断するように瞳を閉じる。闇の世界に浮かんできたの

はこれまでの豊永との関係だった。人目をはばかりながら会い、復讐という目的を前提に

歪んだ愛情を育ててきた。綺麗じゃないかもしれない。誰も認めてくれないかもしれない。

でも、それでも、私たちはこの愛を選んだんだ。私たちにはもうこの愛しかないんだ。

許さない。何人たりとも私たちの邪魔をする奴は。

瞳を開けると、視界に入った工具用コンテナに一直線に進む。中にあつた作業用ロープ

を手に取ると、視線の先に標的を定める。菜子は名刺の唐木田の番号に電話を掛け始めて

いる。牛嶋の時のように豊永が助けに入ってくることはない。彼は私がこんなミスをする

なんて予想していない。豊永はいない。私しかない。だから、私がやらないといけない。

迷いは選択肢にあつてはいけない。その先には敗北しかない。やれ。やるんだ。これまで

のように豊永一弥のためにこの体を捧げるんだ。この手がどうなるうとも、彼と結ばれる

未来を手に入れるために。

綺麗になれなくてもいい。汚れてしまったっていい。彼がいるなら戻れなくてもいい。

「あああああつ」瞳が据わり、声を上げ、己を奮わせ、標的へ猛進していく。菜子は

記憶にない娘の変貌に固まったまま動けず、菜奈はその体を掴むと思いきりフローリング

の床へと投げつけた。うつ伏せに倒れこんだ菜子の背中に乗り、手にしたロープを首元に

巻きつける。手が震えてる。歯が軋んでる。涙がいつのまにか流れていた。気が触れてい

て正常じゃないのも分かってる。自分が母親の首を絞めようとしている事実も分かっている。

その両方の気でもって現実の行動を起こしてる。それでも、ここで裏の四宮菜奈が表向き

に負けるわけにはいかない。唇を噛みしめ、瞳を見開き、力いっぱい菜子の体ごとロープ

を締め上げた。目の前で心を許しかけた母親が狂ったように苦しんでいく。苦しめている

のは娘の自分。その事実を打ち消すように絞める力を増していく。菜子がロープを解こう

とする力の上の上をいくように菜奈はありったけの力を込める。段々と菜子の抵抗する力

が弱くなっていくのが分かった。敗北から勝利への転換を確信すると、涙が止まらなくな

った。腕の力を緩めると、力を失った菜子の体は床に打ちつけられた。菜奈はそこからす

ぐに離れ、距離を置いて菜子の姿を瞳にする。体中が震え、涙は流れ続けた。すぎる思い

で携帯を手にし、豊永に電話を掛ける。

「何があつた」豊永の第一声だった。菜奈が携帯から電話を掛け

てきたことはこれまで

一度もない。2人の関係が通話記録に残らないように、必ず菜奈は公衆電話を使っていた

から。その彼女が携帯電話を使ったということは緊急事態を告げるものであるのは分かり

えた。そして、それは現実になっている。電話越しに菜奈は泣いていて、これまでに感じ

たことのない様子でいた。「どうしたんだ。言ってくれ」

「ママを……殺しちゃったよお」

その言葉に、豊永は危機感が溢れた。菜奈の不自然さに気づいていながら最悪の事態に

なってしまった。牛嶋が辿り着いた時点で警察には自分たちに行き着くだけの証拠を手に入

れる可能性があることは判明している。これ以上に事件を起こすのは自殺行為だ。まし

てや、菜奈がやってしまうなんて。一体、どうすればいいんだ。どうやって、ここを切り

抜ければいいんだ。豊永は急速に頭を働かせ、対処法を作り上げていく。「菜奈、聞け」

うん、と小さくもろい声で菜奈は答える。

「今すぐ外に出ろ。犬の散歩が目的だ。30分ぐらいで帰ってこい。その間に俺がそこ

をなんとかしておく。一つ、絶対厳守するのは近所の人間には散歩に出掛ける姿を見られ

ないこと。これは何があっても守るんだ。分かったか」

うん、とまた弱々しく菜奈は答えた。

「しっかりするんだ。お前がちゃんとやってくれないと全ては水の泡だぞ」

「うん……ごめん」

「謝るのは後だ。言ったとおりに頼むぞ」そう言い、豊永から電

話は切られた。菜奈は

必死に動揺を抑える。抑えるなんて無理だったが、表面上は普段の四宮菜奈を取り繕える

だけの面持ちにし、犬を連れて誰にも見られないように外へと出た。空は暗くなりだし、

月の色が強さを見せてきていた。

きらきらひかる おそらのほしよ

まばたきしては みんなをみてる

きらきらひかる おそらのほしよ

きらきらひかる おそらのほしよ

みんなのうたが とどくといいな

きらきらひかる おそらのほしよ

どうにも定まらない心情の中で、体の中に「きらきら星」を流した。きつと今、私の罪

を無にしようとしてくれてるあなたも流してくれてるのだろうと思つて月を見上げた。

私はあなたと一緒にいたい。何があっても、どうなっても、あなたと一緒にいたい。

## 第11話（前書き）

### 登場人物

四宮菜奈・しのみやなな（誰からも好印象を受ける表面を繕いながら生きている）

豊永一弥・とよながかずや（完璧な外見を併せ持つて女性からの強い支持も持つ）

四宮貞男・しのみやさだお（菜奈の父、病院の副委員長で人望が厚い）

四宮菜子・しのみやなこ（菜奈の母、家族思いで思いやりが強い）

林田千鶴・はやしだちづる（菜奈の友達、劣等生で人を信じて疑わない）

唐木田千治・からきだせんじ（先輩刑事、事件をしつこく追いつける）

牛嶋大悟・うしじまだいご（後輩刑事、唐木田とともに事件に迫る）



## 第11話

四宮貞男を殺めるまでの全ての犯罪はあなたがやってきた。

私にできるものがあるならと言ったが、あなたはそれを断った。

菜奈は手を汚さなくていい、これは俺の復讐なんだから、と言った。

私はあなたの言葉のままにした。私は犯行の実行には加担しない。

私は家族だから捜査線上に名前が上がる可能性がある。

その時、アリバイさえ作っておけば問題はない。

あなたが犯行に及ぶかぎり、私は怪しまれない。

そして、犯行が完璧であるならあなたも怪しまれない。

シナリオに狂いはない。私はあなたの策に乗った。

ただ、今思うなら一つだけ違うところがあった気がする。

あなたはきつと私の手を汚させなくなかったんでしょ。

私に人を殺める覚悟があつたのを止めさせたんでしょ。

自分と同じ思いはさせたくないから、って。

せめて、私には綺麗なままの手でいてほしいからって。

そんなあなたの思いを私は裏切ってしまったんだね。

汚れてから分かったって遅いだけなのに。

四宮菜子の事件は警察に大きな打撃を与えた。捜査本部まで置いて殺人事件の解明へと

乗り出したのに、牛嶋が殺された公園から目と鼻の先にある場所で殺人事件が起こってし

まった。しかも、殺されたのが四宮菜子だ。一連の事件を一つの流れとして見ていれば、

四宮家の人間に危険が及ぶのは予想ができたはずなのに。連続事件

としている報道を否定するための策が仇となった。逆に、報道にとって恰好の事件になってしまった。

言わんこっちゃない、と心内で唐木田はつぶやく。しかし、これで一連の事件が四宮家に関するものであることは決定的となった。これまでの事件は全て四宮家の人間を苦しめるためのもの。そして、最終的な標的は四宮菜奈。真犯人の狙いは彼女だ。絶対に彼女は守らなければならない。ここまでやりたいようにやられ続け、最後まで真犯人の思い通りになどさせはしない。唐木田が信念を強くさせ、見つめる先には菜奈の姿があった。

菜子の通夜に出席していた菜奈は死んだようだった。焦点の定まらない視線を投げて、魂の抜けた殻のような状態で通夜にやってくる関係者たちに対応している。唐木田はその様を見て違和感を覚えた。四宮貞男が亡くなった時の彼女も生気が欠けたようだったが、今回はそれとはまた違った印象を受ける。前者が悲しみや切なさを抱いたものとしたら、後者は絶望。まるで、この世の終わりのような様相を菜奈はしている。父親に続いて母親も、という感情の重なりとしたら納得のいくことだが。

唐木田は通夜に来た人間に片っ端から聞き込みを続けた。牛嶋の捜査資料である関係者の写真のファイルが失われてることから、真犯人は被害者に近い人物である可能性は高い。このこと通夜になど来れるものかとも思うが、被害者との関係性からしても来ないのは

怪しまれるという思いからここを訪れるかもしれない。何か得るものがある、そう信じて聞き込みを続けた。

夜も遅くなつてきて弔問客もいなくなつてきた頃に意外な人物を目にした。林田千鶴が

両親に肩を支えられながらゆっくりとこちらに歩いてくる。目は虚ろなままで体も弱った

ままだった。彼女の事件からいくらか日は経っていたが、ほとんど回復していないようだ。

こんな遅い時間に来たのは人目を避けられる頃合を見計らつたということだろう。千鶴は

両親とともに四宮家に入っていく。

「菜奈、大丈夫」折れそうな弱い声で千鶴が言った。菜奈はそれに何も答えなかった。

目を合わせようともしなかった。彼女は完全に折れてしまった。林田千鶴

が声を掛けたぐらいではどうにもなりはしない。

「菜奈、私だよ」何度と歩み寄ろうとしても無理だった。菜奈の心は遮断されてしまつ

てる。居たたまれなくなつて千鶴は菜奈にそつと抱きつく。大丈夫だよ、大丈夫だからね、

と自分にしてくれたように彼女を慰めた。ただ、菜奈の反応はない。親友に何もできない

自分への気休めにも似たように千鶴は言葉を掛け続けた。

その頃、唐木田は四宮家の前を離れて近くのコンビニに寄っていた。通夜を手伝うため

に来ていた四宮の母方の祖父母が片付けを始めていたので、林田千鶴の家族で弔問は終わ

りになるのだらうと思つて。今日はこれで帰ろうと思い、夕食の弁当や酒のつまみを購入

して歩き出すと四宮菜奈のことが頭に浮かんだ。親友の訪問によって彼女に何か変化があっただろうかと思ひになり、唐木田は再び四宮家に帰ることに決めた。しかし、あと少しで着くという曲がり角で唐木田は急に歩を止める。電柱の裏に身を潜め、四宮家の前に佇んでいる人物に目を遣った。見たことがある、話したことがあるその人物はただ立っているだけで弔問の気がない。結局、そのまま家に入ることなく去っていった。不自然と思える行動を遠くから目にしていた唐木田はその人物に感じるものがあつた。豊永一弥、確かそんな名前だつたはずだ。林田千鶴が交際していた男として、彼女の事件の時に一度牛嶋と聞き込みをしている。その男がどうしてここにいたのか。林田千鶴を通して、係わりがあつたのかもしれないが、それにしても、こんな時間に来て外から眺めているだけで帰るのはどうしてだ。あの男、何かおかしいぞ。

翌日の葬式でも唐木田は弔問に来る人々への聞き込みを続けた。しかし、これといった成果はあがらない。四宮家に対する怨恨に考えが及ぶ者は一人もおらず、どうしてこんな事件が続くのか不可解でならないという意見が大多数を占めた。

四宮菜子は首を縄のようなもので絞められて絞殺された。着衣は全て脱がされ、体中を触られた形跡もあつた。強姦をした上での殺害、犯行の残虐さが現場には残されていた。

これまで四宮家の中で菜子には直接的な被害がなかったが、まさか

こんな結果になるとは。

今回も証拠といえる証拠はなかったが、一つだけ不快なところがあった。菜子の首元には

2回強く絞められた痕跡があった。一度では死に至らなかったからかもしれないが、何か

そうしなければならなかった別の理由があったのかもしれない。

葬式の前に菜奈に話を聞く時間があつたが、彼女は何も喋らなかった。昨日と変わらず、

死んだように自分を見失っているだけで時間は過ぎていった。ポンと押せば倒れてしまい

そうな、立っているのがやつとの状態の彼女の姿は見ていて痛々しいかぎりだ。最初に会

ったときの快活そうな姿はもはや影も形もない。真犯人はここまで四宮家を崩壊させて、

何をそんなに満たされるといつのか。この家族にこれだけの被害をこうむる理由など欠片

も見当たらないのに。警察が総力をあげても全く見えてこない現状に唐木田は息をついた。

葬式には昨日も見えた関係者の他、新しい顔もちらほらあつた。菜子の学生時代の関係者

がそのほとんどを占めていた。この日は林田千鶴の姿はなく、多くの人間の揃う葬式の間

は避けたのであることは汲み取れた。そして、豊永一弥の姿もなかった。いつか現れる

のではないかと思つて、片時もその場を離れずにいたが彼は来なかった。林田千鶴と同じ

ように多くの人間の前は避けたのだろうか。昨日の豊永もそんな印象だった。深い時間、

通夜も片付けに入っている時間に現れ、家に入ることもなく去つていった。人目を避けて

いる印象を抱かずにはいられない。豊永はなぜ、あんな時間にあの場所で孤独に佇んでいたんだろうか。

出棺を見届けた後も唐木田はしばらく葬儀場に居続けた。豊永がそこに来る可能性を捨てきれずに粘ったが、やはり来ることはなかった。昼食を軽く済ませた後、唐木田は安里市立第四中学校へと向かった。豊永一弥が通う学校で直接彼を待ち伏せることに決めた。授業終わりですぐに出て来るかもしれないと思ったが、結局部活が終わるまで2〜3時間待つこととなった。まあ、このぐらい待つのは職業柄慣れてはいる。

豊永一弥は部活仲間らしき学生たち数人で校門から出てきた。同学年らしき集団の中に合わさると、より彼の外見の良さは際立っている。文句のつけどころのない今風の格好のいい出で立ちだ。唐木田は豊永のいる集団から一定の距離を保ち、気配を殺しながら後をつけていく。その間の彼の行動にこれといった特徴はない。会話の内容までは聞こえなかったが、普通の中学生という感覚だ。そんなことには惑わされず、唐木田は疑念を持ったまま後ろを追いかけていく。

仲間と一人ずつ別れていき、豊永が一人になってからも彼を追うことを続けた。怪しい行動でも起こさないかと思つてのことだったが、そのような行為はなかった。豊永が家に

到着する手前で唐木田は声をかけた。「豊永一弥さん」

豊永は立ち止まり、こちらに振り向く。さして、驚いた様子はな

かった。

「こんばんは。私のこと、覚えてらっしゃいますでしょうか」

「はい、なんとなく」

そんなものだろうな、と唐木田は思った。日常で警察に聞き込みをされることなどない

だろうから忘れてるということはないと踏んでいた。「警察の者です。少しだけ、お時間

よろしいでしょうか」

「はい、いいですけど」

「ありがとうございます」2人は近くの小さな公園へ移動した。

道端で聞くべき話では

ないかもしれないと考慮して。公園には唐木田より年上と思われる老人が一人だけいた。

そこまでは気にせず、ここで話をすることに決めた。

「以前に話を聞いたとき、あなたは林田千鶴さんとは別れたばかりだと仰りましたね」

「はい」

「報道で流れてるのを見たかもしれませんが、四宮菜子さんという方が亡くなられたのは知ってますか」

「はい、テレビで見ました」

「その娘さんが四宮菜奈というんですが、ご存知ですかね」

「知ってます」

「どういう関係ですか」

「その、林田千鶴さんの親友というふうに」

「四宮菜奈さんに会われたことはありますか」

「はい」

「親しくはされてましたか」

「いえ、そこまでは」

「面識がある、というぐらいですか」

「そうです」

「四宮菜子さんとは面識がありますか」

「ありません」

「四宮貞男さんとは面識がありますか」

「ありません」

唐木田が畳み掛けようとしたら、豊永はそれを遮るように「すいません」と言う。勢い

を止められ、唐木田は少し間が抜けてしまう。

「俺は何を疑われてるんですか」四宮家との係わりを詮索され、豊永は明らかに戸惑う

表情を見せている。それはそうだな、と唐木田も自分の聞き込みの強引さに気づく。冷静にいこうと思い、一度心を落ち着けた。

「あなた、昨日の夜遅くに四宮の家の前にいましたね」

唐木田の言葉に、豊永の表情は一瞬崩れた。そこに本性が見い出せるかと思うと、すぐ

彼は顔色を元に戻してしまった。

「どうなんですか。いたんですか」

豊永は唐木田に顔を向ける。視線がさっきより強いものになっている気がした。「はい、いました」

「あそこで何をしていたんですかね。家の前に立ってるだけで中に入りもせずに帰ったでしょう」

豊永の返答には気持ちほどの間があった。それが何かを考えているように見受けられた。

「通夜に出席しようか迷っていたんです。彼女とは係わりはあったので、その親族の通夜には出た方がいいのかって。それで時間も遅くなってしまったんですが、とりあえず家に



行ってみようと思ったみたらず片付けが始まっていたのでそのまま帰ることにしました」

苦しい言い訳だな、と唐木田は感じた。その場かぎりの嘘、と。こんな類の分かりやすい嘘はこれまでにいくらでも耳にしている。「そうですか。そういうことでしたか」

「では、以上です。疲れてるところ、すいませんでした」そう言うのと、豊永は一礼して帰っていった。その後ろ姿を眺めながら、唐木田は湧いてくる感情を実感していく。この一連の事件が始まって以来といえるほどの手ごたえを感じていた。豊永一弥、あの少年は何かを隠している。

翌日の正午ごろ、千鶴は母親の出してくれた車で四宮家に来ていた。昨日、葬式に出ることはできなかったが、菜奈の状態が気になって仕方なかった。携帯へ電話しても出なかった。なので自宅に電話すると、通夜と葬式の手伝いに来ていた彼女の祖母が電話に出た。菜奈は心労がひどくて眠ってしまったようで、また掛けなおそうとすると祖母の方から菜奈は祖父母に引き取られることになったからと聞かされた。それは千鶴にとって衝撃に近い言葉だった。菜奈の存在が必要不可欠な千鶴には、彼女が自分の側を離れることなど受け入れられるはずもない。今、菜奈がいなくなったらと思うと居てもたってもいられなくて、直接彼女と話がしたくてここまで来てしまった。母親には車に残ってもらい、一人でふら

つく足取りのまま歩いていく。インターホンを鳴らすと、菜奈の祖母が対応してくれた。

祖父は仕事あるので昨日のうちに一人で帰ったようで、祖母も菜奈の体調が回復し次第に

彼女を連れて帰るらしい。祖母に「せっかくだから今のうちに買物に行ってきたもいいか

しら」と言われたので、千鶴はうなずいた。「菜奈はまだ休んでるけど起きてはいるから」

と言われ、部屋に向かった。

「菜奈、開けるね」ノックをしてから、そう言って扉を開く。中にあつた光景に千鶴は

身が固まってしまう。豊永と菜奈が抱きしめ合っていたのだ。まさか、豊永がいるなんて

思いもしなかったし、祖母も誰かいるとは言っていなかったし、なにより目に映った2人

の行為に自分を疑った。何がどうなってこういう事になっているのか、全く理解できな

った。菜奈は自分の友達で、豊永は自分が思いを寄せていた人で、2人に関わりはないは

ずだ。あつたとしたら、豊永が一中の校門で自分を待ち伏せしていた時にわずかに接した

ぐらいだ。それ以外に関わりはないはずの2人が目の前で抱き合っている。千鶴は自分を

見失いそうになり、現実から逃げ出したくなった。こんなの嘘だ。夢に決まってる。悪い

夢に決まってる。そう自分に叩きこませようとした。なのに、口からついて出た言葉は素

直な気持ちだった。「どうして……どうして」

豊永は菜奈の背中にそっと手を回しながら、千鶴を涼しく切ない瞳で見ていた。菜奈は

豊永の背中をグツと抱き寄せながら、千鶴を睨むような瞳で見ている。菜奈の目つきはど

んどん悪くなり、千鶴を睨みつけていく。荒れ狂った肉食動物のよう

に呼吸も荒くなり、完全に気が触れていくのが分かった。

「帰れよ」言いながら菜奈は涙を零していた。豊永のシャツの背中を力強く掴み、感情

が爆発するのをなんとか堪えている。これまでに見せたことのない裏の四宮菜奈だった。

「早く帰れって言ってたんだろ」

菜奈の怒号が部屋に響き渡る。興奮で大きく震えあがる菜奈の体を豊永が懸命に抱いて

いる。千鶴は初めて見る菜奈の状態に萎縮してしまった。豊永とのことといい、もう何が

どうなってるのかさっぱりで頭は混乱するばかりだ。

「悪いけど、人に会える状態じゃないんだ。帰ってくれないか」怯えたまま何もできず

に佇む千鶴に、豊永は言った。その言葉に反応して、ようやく千鶴は現実に戻れた。その

現実から逃げようと千鶴はすぐに部屋を出る。足早に歩きながら散らかっている頭を整理

する。菜奈と豊永はああい関係だったんだ。いつのまにそうなっていたかは分からない

けれど、2人が強い関係で結ばれているのを察するには充分すぎた。玄関まで歩いたとこ

ろで千鶴は泣き崩れた。信じていた人間からの裏切りに心が砕かれてしまった。

「あれでよかったのか。友達との最後の別れが」抱きしめた菜奈の肩先で豊永は言った。

こんなことを言っても、菜奈に届いてはいないだろうが。通夜で

見たときの菜奈の顔で  
豊永は彼女の異常を悟った。あれは演技で悲しい顔をしてるんじゃない。今にも壊れてしまいそうな爆発寸前の状態だった。昨日は葬式で忙しかったり、祖母もいたからと思っ  
たが気がかりでたまらなかった。今日、こうして祖母にもバレないようにと部屋の窓から  
侵入すると菜奈の変化に戸惑った。彼女は重症だった。再起不能の  
ロボットのように居る  
だけのものになっていた。やはり、菜奈に手を汚させてはならなかった。菜子を殺めたこ  
とで、表向きの四宮菜奈は破壊された。本当の彼女である裏の部分  
しか存在しなくなった。  
表と裏のバランスでこれまで生きてきたのに、片方を失ったことで  
菜奈はダメになってしま  
った。豊永を瞳にした途端に、彼女は彼に抱きついた。呼吸は不安定で、体は小刻みに  
震え、焦点の合わない視線と感情に自分自身が揺らいでいる。林田  
千鶴の訪問は気づいて  
いたが、こんな状態で放っておけなかった。結果、千鶴には2人の  
関係はバレてしまった。  
あの唐木田という刑事にも今後そうなっていくかもしれない。そして、なにより目の前で  
苦しむ菜奈にこれ以上の負担を乗せるわけにはいかない。限界を超えてしまう。「菜奈、  
答えてくれ」  
「もう……無理か」そう言うと、菜奈は堪えきれずに泣き出した。それが彼女の  
本音だった。豊永は瞳を閉じて、大きく息をついた。「分かったよ」

「一緒になろう……もう誰にも邪魔はさせない」

夕焼けは潜み出し、夜に差ししかろうとしていた。自宅の前には唐木田の姿があった。

豊永は瞳を強張らせ、唐木田はその反応に意外性を感じる。豊永は初めから裏の顔を見せ  
ていく。もう、何にも配慮する必要はなかったから。

昨日と同じ近くの小さな公園へ移動すると、お互いに真剣な表情になる。唐木田は強い自信を持ってここへ来ていた。昨日、豊永のことを怪しいと勘ぐってから彼について調査  
してみると多くのことが分かった。一連の事件に結びつくかもしれない内容だ。真犯人は  
この男なんじゃないか、と唐木田は大きな前進を感じていた。

「あなたについて調べさせてもらいましたよ。生後間もない頃に両親は離婚。片親の手  
で育てられるが、その母親も3歳の時に自殺。遺書はなかったので、

労働と育児に負われ

ての疲れだろうとされた。それ以来、あなたは母方の祖父母のもとで育てられた。祖母は

病気で他界し、今は体の弱った祖父との二人暮らし。豊永一弥、13歳。安里市立第四中

学校の1年4組。学業も優秀、運動はサッカー部で新入生ながらエース、容姿も端麗、生

活態度は外見に対して控えめ。総括すると、口の挟みよのない優等生や」

唐木田の言葉を豊永はただ黙って聞いていた。

「安里市立病院の連続殺人事件、四宮菜奈へのわいせつ行為、四宮貞男の自殺、林田千

鶴への強姦、牛嶋大悟の刺殺、四宮菜子の絞殺。この全てにおいて、

あなたのアリバイは

ない」病院での医療ミスについては言い加えなかった。その件について、彼のアリバイは

存在していたから。都合のいい考えだろうが、それは共犯者とされる人物による行為では

ないかとした。「これはどういうことや」

「どういうこと、って」呆れたような口調で豊永は呟く。首をぐるりと回し、唐木田を

芯のある瞳で見遣る。「たまたまだろ」

豊永は昨日までと比べ、別人のようだった。今さっき自分の口から出た優等生という言

葉は当てはまらない、変な自信にまみれた人間になっている。しかし、そんな相手の出方

で怯んではいけない。唐木田はグツと気を引き締める。「あんたが元々生まれ育った場所、

富士らしいな」

「富士は四宮家が毎年家族旅行で行くところや。そして、四宮貞男が自殺したのも富士

の樹海や」唐木田は一層に声を強くする。「これは偶然なんかねえ」

脅かすような勢いを張った唐木田の姿勢に豊永は全く動じていない。逆に、豊永も声を

強くする。「俺のこと怪しんでるみたいだけど。証拠はあんの？」

動機は？ 言ってみろ」

唐木田は口を嚙む。正直、証拠も動機もない。彼を動揺させるために脅しをかけるよう

にしてみたが、何の効果もなかった。それどころか、こちらが押し込まれている。こんな

肝っ玉のある13歳、見たことない。この年齢なら、粹がっつてるとしても上っ面だけだ。

それが豊永は心にまでしっかりとした軸がある。どうして、その年

齡でそんなものを持て

るんだ。逆にそれが怪しい。でも、証拠も動機もない。

「例えば」豊永から今度は口を開く。「犯人が一人じゃないとしたら」

その言葉に唐木田は目を見開く。何を言い出すんだと思ったが、豊永の言を止めることは止めた。

「実行犯と共犯、この2人がいたら犯行は可能だ。共犯者は被害者と関わりを持って、実行犯は蚊帳の外にいる。共犯者は直接犯行に及んでないからアリバイが成立する。実行犯は被害者との関わりがないから疑いをかけられる対象にならない」豊永は口角を上げる

ぐらいの余裕の顔をしている。「これで犯行は完成だ」

唐木田は稲妻を食らったような衝撃に起こされる。豊永一弥が真犯人、そう確信した。

ただ、そうにしてもこのこせつかない様は一体何なんだ。

「安里市立病院の薬物混入連続殺人。共犯者は長い年月を要して病院と関わりを持ち、医学の勉強を蓄えた。その結果、病院の職員の目を盗んで鍵を奪うことに成功し、人間を死に至らしめる重度の薬品を知ることが出来た。鍵はスペアを作成し、薬品はネットを介して手に入れた。犯行当日、実行犯は病院の監視カメラをハッキングし、スペアキーで中へ侵入して犯行に及んだ。病院の警備をしていた蔵川は犯人に仕立て上げるには恰好の対象だ。一人の犯行にしてもよかったが、親子によるものにした方が犯行の難度は減る」

「安里市立第一中学校のわいせつ行為。共犯者は野竿が四宮菜奈

に好意的な印象を持つ

ていたことを知り、蔵川の件での奴の精神の変化にも気づいていた。野竿が四宮菜奈への

犯行に及ぶように発破をかけ、実行に移すと実行犯が彼女を助けた」  
「富士の樹海での四宮貞男の自殺。医療ミスによって、奴の医者としての芯は崩れた。

謹慎になった奴は家族とともに富士に旅行に出かけ、娘と毎朝に散歩をする習慣を共犯者

から得ると、実行犯は奴が一人になるタイミングを狙って樹海に連れ込んで銃を撃った。

遺書はパソコンで打った出まかせ、医療ミスを苦にした自殺に見せかけるのは簡単だ」

唐木田は脈打つ鼓動を抑えきれなかった。豊永が語る言葉たちは全て真実と思うことは

難易ではない。これまで追い求めてきたものが一挙に体の中に入ってきて、入りきれないほど押し合いを続けていく。

「犯行はここで終わるはずだった」豊永の言葉に唐木田はまた虚をつかれる。

「林田千鶴への強姦。彼女は一連の犯行のアリバイを作るのに必要だった。犯行が終わ

ったうえで、彼女との関係は必要がなくなった。なのに、彼女はより強い関係を求めてく

るようになった。それが邪魔だった。出すぎた杭を一発で埋め込むために犯行を決めた。

夜道で気を失わせ、車の中で犯行に及び、自動車工場へ捨てた」

「牛嶋大悟の刺殺。彼は取り立てて優秀な刑事でもなかった。だから、注意も特に強く

は抱いてなかった。ただ、彼は運がよかった。いや、悪かったんだろ。林田千鶴の犯行



の際、犯人が工場へ彼女を運ぶ姿を偶然に見ていた人物の証言を得たんだ。犯人を確信の

ものとして現れた彼の背中にナイフを刺して始末した。誰にも犯人の正体を知らせてない

とは若僧らしい致命的なミスだが、おかげで犯人は救われた」

「四宮菜子の絞殺。はつきり言って、彼女に手を上げる予定はなかった。ただ、彼女も

運が悪かった。たまたま、事件にまつわる重大な証拠を目にしてしまったんだ。だから、

申し訳ないが彼女にも手をかけた」こんなところかな、と豊永は言葉締めくくる。自供

にもとれる内容だったが、あくまで自分が犯人であるとは言わなかった。事件に対しての

一つの見解、とても言いたいのだろうか。それでも、豊永の言葉は彼が実行犯であること

を明らかに示していた。

こいつが。こいつが犯人。こいつが牛嶋を。唐木田は身を震わせて、怒りたつのを止め

られなかった。「どうして……どうして、殺さなあかんかったんや」

さあ、と豊永は息をつく。今にも笑みを見せそうな表情は疑問を抱かずにはいられなかつた。なんなんだ、この余裕は。「俺がやったんじゃないから分か

りませんけど」

「どうして、野竿に襲われた四宮菜奈をリスクをおかしてまで助けたんや」

「そうする必要があつたんじゃないですかね」

「牛嶋の私物を奪つた理由は何や。事件関係者の写真のファイルとメモ帳や」

「それが証拠になるからじゃないですかね」

唐木田は目を充血させるぐらいに力を込めていた。今すぐ、この男を逮捕してやりたい。

目の前にいるのに手錠をかけられないもどかしさに苛立ちは募っていく。「なんで、今になつて全部言う気になつたんや」

「黙つてる必要がなくなつたんじゃないですかね」

豊永の言葉と態度に唐木田の怒気はピークに達した。それでも、今ここで吐き出すのは

止めにする。絶対に確たる証拠と動機を携え、こいつを捕まえてやるに心に誓った。

翌日、唐木田は富士に急いだ。そこに事件の紐を解くものがあると思ひて。

富士は澄んだところだった。ここであんな事件が起こつたとはとても思いがたい。それでも、ここは豊永と四宮家の関係が眠っているかもしれない。そう胸に刻み、唐木田は聞

き込みに励んだ。四宮家が毎年の家族旅行で訪れる別荘の関係者、貞男と菜奈が朝の散歩

で回るコースにある店の人間、豊永一弥が幼少の頃に母親と住んでいた家の近辺、隈なく調査を続けていく。

その結果、豊永家の近所の人間から大きな証言を得ることができた。豊永の母親と親しくしていた人物が家族のことをよく知っていた。まず、豊永の両親の離婚は父親の不倫が原因であること。それで夫婦関係にヒビが入つたというより、父親は不倫相手の方を本命としていたため別れたようだ。それからは母と子の2人で慎ましく生活を続けていたが、

やがて母親には恋人ができた。その相手は都会に住んでいて、家族も持っている人間だったらしい。それから間もなくして彼女は自ら命を絶った。証言してくれた女性は、もしかしたら労働や育児ではなく不倫関係による行く末が原因だったのではないかと漏らした。

唐木田にとつて、天の恵みともいえる証言だった。豊永の母親の不倫相手というのは、四宮貞男ではないかと考えるのは容易といえたから。その恋愛の行く末として豊永の母親は自殺に至った。母を殺されたも同然の息子の一弥はその恨みを晴らすために四宮貞男を殺めることを決めた。当時3歳だった子が行き着くには行き過ぎた話かもしれないが動機としては充分だ。

そして、もう一つ大きな証言があった。豊永の母親が不倫相手と交際してる頃、一弥が同じ年の頃の女の子と遊んでる姿を何度か目撃したということだ。豊永の母親に聞いたところ、その女の子は不倫相手の娘だと言ったらしい。となると、それは四宮菜奈ということになる。不倫相手の家に娘を連れてくるなんて大胆不敵といえたが、交際をバレないようにするためのアリバイを作るのに必要だったのかもしれない。もしもこの仮説が正しいとしたら、幼少の頃に豊永一弥と四宮菜奈には接点があった。下手をすれば、菜奈は父親の不倫を知っていたのではないだろうか。豊永が彼女に知らせたということも考えられる。

そのとき、一つの説が唐木田の頭に浮かんだ。まさか、豊永の共

犯者は彼女なんじゃない

かろうか。いや、さすがに実の父親を死に至らしめるようなことをするはずないだろう。

ただ、親に手をかける子供の事件はいくらでも存在する。それでも、四宮菜奈のような子

にかぎっては考えにくい。成績も優秀で、運動も長けていて、容姿も端麗で、生活態度も

控えめ。口の挟みようなない優等生だ。

そこで、唐木田はハツとなる。今並べた通りの人間を知っている。昨日、それを思った

ばかりではないか。豊永一弥、彼もその通りの人物だ。四宮菜奈と豊永一弥、2人の人間

はうまく重なっている。そう思うと、唐木田の推理は流れるようになる。昨日、豊永から

告げられた言葉にも重なる。四宮菜奈が野竿に襲われた時に実行犯が彼女を助けた理由、

それも彼女が共犯者なら繋がる。でも、なぜ自分の身の危険を背負ってまでそんな事を。

それも犯人が四宮家への怨恨を抱いている、と警察に思わせるためか。そこまでの執念を

もって犯行に及んでいたということなのか。豊永は昨日、長い年月を要してと言っていた。

母親の自殺から10年もの間、この犯行を作り描いていたのだろうか。それも、四宮菜奈

と2人で。なるほど、それなら警察が束になろうと叶わないはずだ。あの2人の執念と絆

は相当どでかいものにまで成長してしまった。ちょっとやさつとで崩れるものじゃない。

あの2人だけにしか見えない絆の線、赤く濁って染まった糸で結ばれたものがあるのだ。

同時に分らないことがあった。昨日、どうして豊永はあそこま  
で自由したのだろうか。いや、そんなものあつ  
たとしてもあんなこと  
しないだろう。あそこまで完璧に犯行をやれる人間が自分の足元を  
掬われるようなことを  
しやしない。捕まっても構わない、と思ってるのか。確かに、あの  
年齢なら少年法で刑は  
軽くなる。

そのとき、唐木田の携帯が鳴った。出てみると、同僚の刑事が慌  
てた声を発していく。  
その言葉に唐木田も驚きを隠せない。四宮菜奈がいなくなり、祖母  
が搜索願を出してきた  
というのだ。今朝に祖母が菜奈の部屋に行くと姿がなく、窓が全開  
になっていた。学校に  
も千鶴にも連絡したが見つからず、近所を探しても一向に見つかる  
気配がなかったらしい。  
まずい、何かが起こる前触れのような気がしてならなかった。「豊  
永一弥ゆう男の行方を  
調べろ。今すぐや」

私はあなたの希望にしかねない。  
あなた以外の人間の希望にはなれない。  
あなた以外の人間の抱く希望は偽者の私でしか抱けないから。  
本当は何気ない日常の風景を妬んだ。  
裏の人格で生きる決意をしたのに本音の隅っこではそう思ってた。  
私はそこで幸せにはなれないことも知っていた。  
あなたもそこで幸せにはなれない。  
だから、私たちには必要のないものだった。  
じゃあ、私たちに必要なものって何。

無いんだよ、そんなもの。

俺たちに必要なものはいずれ俺たちが捨てていくものだ。

それでも、普通に生きている人間を羨んでいた。

自分自身が居たたまれなくなつて死にたかつた。

その度に君が支えてくれた。俺たちはお互いを支え合つて救い合つた。

きっと、俺たちは生まれてきてはいけなかつたんだ。

だから、目的を果たせれば残しておく生命の意味なんてないんだ。生きてることが苦痛だつた。君もそうだろう。

もう楽になろう。一緒なら何も怖いことなんかない。

俺たちは道を誤つたんじゃない。

最初から誤つた道に産み落とされたただけだ。

俺たちにはその道を歩むことが当たり前だつたんだ。

それが人間の歩むべき道でないことは分かつてる。

ただ、俺たちにはこの道しかなかったんだ。分岐点なんかなかったんだ。

この道を歩き、行き止まりになれば終結させるしかなかったんだ。

本当の幸せつて何ですか。

本当の喜びつて何ですか。

本当の温もりつて何ですか。

私には分かりません。

私には偽りで作られた感情しかないから。

私はまやかしの太陽にしかねないから。

私たちはこれからいなくなります。

でも、それでいいんだと思います。

私たちは生まれてきてはいけなかつたんだから。

浅い緑の草々は木の陰に潜んで、色を濃くしている。

それでも、それらは生きている。うざったい。  
樹齢の深い木々は空へ伸び、美しく醜い。

それでも、それらは生きている。うざったい。

みんな、どうして生きてるんだ。真実が偽りに負かされる現実を。  
悪事が正義を痛めつ

ける現実を。そんな時代を生きて何が楽しいんだ。

それでも、それらは生きている。うざったい。

それでも生きたいというんなら勝手にすればいい。

「俺らはこれで永遠になるんだ」

「うん。私たちならなれるよ」

「ああ。これで終わる。そして始まる」

「未練なんかないよね」

「菜奈とずっと側にいられる死に勝るものなんかない」

「私も」

「最後に言ってもいいかな」

「何」

「愛してる」

「・・・・・・私も愛してる」

ねえ、一弥。

人間って何だろうね。

唐木田は全力で走っていく。老いた体では大したスピードにはならないけど、それでも

無我夢中で走った。富士の遊歩道を駆け抜け抜けると、四宮貞男が失命した辺りへと樹海の中

に入っていく。数分前に銃声を耳にして、嫌な予感が現実のものになったことを感じた。

そんな結末、絶対に許されん。まだ、犯人であることを本人の口か

ら聞いてないのだから。

事件の経緯も動機も分かった。後は証拠を死に物ぐらいで探す。そして、お前らを捕まえに行く。それまではそんなこと許されんのや。

樹海の奥まで走った唐木田は膝から崩れ落ちた。目の前に広がる光景に、自然に涙が流

れてきた。下唇を噛み、拳を地面に何度も打ちつける。豊永一弥と四宮菜奈は手に拳銃を

持ったまま、頭部を互いに撃ち抜いて死んでいた。もう片方の手をお互いの背中に回して、唇を重ね合ったまま、まるで微笑んでいるようにも見える。

唐木田には無念しかなかった。牛嶋の仇を取れたとか、これ以上の犯行はこれで起こら

なくなったとか、そんなこと微塵も思えなかった。自分の非力さを痛感するしかなかった。

そんな人生、何の意味があんのや。お前ら、まだ何も人生の良さ味わってへんやないか。

どうして、こんな結末やないとあかんのや。ちゃんと罪を償って、全うな人間になって、

普通の人生を送ったらええやないか。なんで、そのことに気づけへんかったんや。

2人の背中にある手の小指には紫の糸が結ばれてあり、そのまま2人の体をぐるぐるに

巻いていた。紫の糸は豊永が用意したものだった。本当なら赤い糸を巻きたかったが、今

の自分たちには似合わない。そんな正統派な愛情なんかじゃない。もっと黒ずんでいて、

それでいてこの上のない純粹。赤に黒をまぶせた紫こそ、自分たちにはふさわしい色だと思





## 第11話（後書き）

「まやかしの太陽」は今回の更新で終了となります。  
最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8869h/>

---

まやかしの太陽

2011年2月17日23時28分発行